沖に達し、檣頭高く戰鬪旗を飜しつゝ、巡洋艦隊は直に港口の正面に進みて、我が乙驅逐隊を掩護せんとせり。時に敵艦ノーウキックは提督マカロフ中將を乘せ、バヤン號を率ゐて、港外に出で、吾が驅逐隊に圍まれたる敵の驅逐隊を救はんとす、而して吾が巡洋艦の近づくを見るや、彼れ亦戰鬪旗を揭げて進み來れり、我が常磐艦乃ち之に向つて挺進せしに、黃金山の砲臺より盛んに砲火を發射せしが、其砲彈は多く前後の海中に落ちて、一として命中せず、常磐は益々進みて敵艦に近づくや、我を誘引して布設水雷の犧牲たらしめんとてか二隻の敵艦は忽ち艦首を廻轉して背進せり、常磐は爭で此の淺墓なる計略に乘せらるべき、直に右舷に廻轉して、敵の着彈距離外に逸出し、巡洋艦隊と合して、本隊砲擊の看的に任じ、遙に旅順口の西面に遊弋せり。

之に先だつこと少時にして吾が聯合艦隊の一隊は老鐵山の南麓に進みて、午前十時砲擊を開始したり。蓋し我が艦隊の砲擊方面は、敵の戰鬪力殆んど亡滅せんとする今日にありて、力を分つを得るに至りたるなり。且や敵の建築物は正面より砲擊し易きが故に、敵は港口の防禦に重きを置き、殆んど其他を顧みざるの狀あると、港口の兩岸には砲臺あるに加へて、高丘左右に屹立し、非常の急角度を以て吾艦に臨めるが故に今や迂回して老鐵山の南麓に出でたる也。我が艦隊は此處に陣を取り、黃金山砲臺を監視線とし、砲臺、敵艦錨地、船渠等みな攻擊線の中にあり、數千米突の距離を以て、前後の主砲を發射しつゝ數回の廻轉を爲し、山蔭に隱れて、巧に敵の砲臺の射界を避けしを以て敵は之を如何ともする能はず。而して我が艦隊には、一彈を發する毎に、看的の任務に當れる巡洋艦隊をして、港口の正面より一々信號を揭げて、着彈の効果を報告せしむるが故に、恰も無人の境に臨みて演習射擊を爲すに異ならざりき。砲擊終はりて老鐵山の東に出づれば、今迄沖合に遊弋し居たる一隊は、代りて砲擊を開始し、午後一時四十分に至りて終り、全艦隊整々として沖合遙に引揚げ豫定地に集合せり。各艦些の損傷なし。

殆ど四時間に亘れる主力艦隊の砲擊が、いかなる損害を敵に與へたる乎、其詳細は敵秘して云はざる故に、明かにすること能はずと雖も、我多數の發彈中、その無効なりしは、僅かに十發に過ぎず。敵艦に損傷を與へたるの外、敵の建築物を毀ち餘波延

いて市街に及び火藥庫外三個の建築物を燒き、黃金山、老鐵山、威遠、營口等の諸砲臺に着彈して少なからざる損害を被らしめたるは亦疑ふべからず。而して此間、更に巡洋艦の他の一隊は大連灣に至り、港口三山島に於ける敵の建築物を砲擊破壞し合せて市街に及ぼして殆ど完膚なきに至らしめ、高砂、千早の兩艦は別に命を受けて、旅順の西岸に敵を索めたるも隻影を見ず、勃海灣内亦露國の海軍なきの觀を示して、獨り日本海軍の雄風堂々馳騁するに任せぬ。越えて十三日、東鄕長官に左の勅語を賜はる。

聯合艦隊ハ旅順口ノ敵ヲ威嚇シ特ニ第一驅逐隊第三驅逐隊ハ險ヲ冒シ敵ノ要塞砲火ノ下ニ優勢ナル驅逐隊ト戰ヒ奇功ヲ奏セリ朕深ク將校下士ノ勇武ヲ嘉尙ス

第十章　外交の活動

日本の海軍は露國の海軍と戰ひつゝあるの傍、日本の外交は亦露國の外交と戰ひたり。譎詐百出、世界の耳目を瞞過して利する所あらんとするは、由來露國外交家の本領也。是を以て戰端の開かるゝや、露國は、宣戰の詔勅を以て、宣言を以て、通牒を以て、日本の行動を非難し、日本の行爲は國際法に違反せるものなりと誣ひ、以て自ら極東の平和を攪亂したるの責任を逃れんとす。其二月十八日二月二十日の二回に發したる宣言の如き、實に誣妄の甚しきものにして、露國は、外交斷絶は敵對開始を以て目すべきにあらず、日本が其宣戰以前に露國艦隊を攻擊したるは妄極れりと叫べるも、日本が外交の斷絶を通告し、自由行動を執るべきを公にせるは二月六日にして、我軍の旅順艦隊を襲擊せるは九日の朝也。露國は戰爭に應ずるの準備は十分に在りし也。否、露國が日本に先ちて——開戰布告前に——戰端を開くべき準備の既に成れる證左は、一月九日附を以て故國に贈りたるコレーツ艦長の書簡の一節に明か也、曰く「余

等は機日となく日本と戰ふべきを期待せり、余等は開戰の布告をなさずして不意に襲擊を試むべき筈にして、艦内の木製裝置は凡て之を撤去して陸上に引揚げたり云々、露國が開戰前滿韓の間に兵事上の大活動を試みたる事實に徵して、此書簡の詐らざるものなるを以て知るに足るべし。且つ夫れ宣戰の布告は敵對行爲開始の必要條件にあらざることは、國際法學者の悉く一致する所にして、露國自身、口を極めて日本の行動を非難する露國自身すら、豫告なくして開戰せし實例に豐富也、試みに歷史に徵して之を擧げれば、

一、一七〇〇年ナルバーの戰爭前露國は特に開戰を豫告することなくして軍事的行動をなしたり

一、一七三三年露兵はスタニスラスを冊立する爲め突然波蘭に入れり而して此の軍事的行動に關して何等の豫告を與へざりき

一、一七五三年露國は墺、普兩國と共同して突然波蘭を襲擊したり

一、一八〇一年露帝ポールは突然英國の商船二百艘を其の港灣にて拿捕し軍事的行

動の端を啓きたり

一、一八〇六年露國兵は外交談判の際突然モルダヴィアを襲擊して城塞を奪へり

一、一八二七年露、英、佛の三國艦隊は豫め何等の注意を與へずしてナヴアクノに於て土耳其艦隊を破壞したり

一、一八二八年露土戰爭は相方に於て開戰を宣言せざりき

一、一八三一年露國は宣戰せずして希臘船を砲擊し擊沈し捕獲したり

一、一八三六年露國は普、墺兩國と共に豫告なくしてクラカオを占領したり

一、一八五三年クリミヤ戰爭は宣言なくして開始せり

斯くの如き生ける證據あるにも係らず、尙ほ言を巧みにして極東平和攪亂の責を日本に嫁し、以て列國の同情を得んとす、其矛盾は一笑の値だもなしと雖も好諂、暴戾は實に驚くべきものあり。而して我外交當局者は(三月三日)事實によりて露國の誣妄を明かにし、日本の行爲は一毫も國際法に戻る所なきを辨せり。而して露國は更に二月二十二日を以て外務大臣ラムスドルフ伯より、各國に提出すべき回章として、各在露

國外交代表者に向つて、左の如き回牒を發したりき。曰く

日露兩國間談判破裂以來日本國政府の態度は文明諸國相互の關係を律する各種慣法の公然たる違犯を構成す、今我露國政府は其違犯を一々名狀することをなさず

と雖も日本政府の敢てしたる韓國に關する暴戾の行爲に至りては之れに關して各國最も深重なる注意を促すの必要ありと考量す抑も韓國の獨立及び其保全は各國の承認する所にして此の原義の犯す可からざるは千八百九十五年下關條約、千九百二年日英協約後千九百二年三月十六日露佛宣言の確認する所にかゝる韓國皇帝は日露兩國の衝突の危險を豫想し本年一月嚴正中立守持の決心を宣言せる文書を各國に發送し各國は滿足を表して之れを接受し露國も亦之を承認せり而して在韓我公使の報告に依れば英國政府は在韓同國公使に命じ韓國皇帝に右宣言書に對し謝意を表したる公書を捧呈せしめたりと云ふ然るに日本國政府は右の事實を悉く蔑視し各條約及其義務を蔑視し且國際法の原則に反戻して左記の行爲を敢てしたること今や精確にして充分に確認を經たる事實の之を歷證するあり

一、抗敵開始に先ち日本の軍隊は中立を宣言せる韓國に上陸せり

二、日本艦隊は本月八日卽ち宣戰公布の三日前に於て中立港濟物浦に碇泊中にして而も其艦長は日本人が惡意を以て丁抹海底線經由我電報の配達を遮止し且韓國政府電信交通を破壞せしが爲め國交破綻の通知を受くるに由なき境遇に在りたる我軍艦二隻に對して突然砲擊を加へたり。

三、日本國政府は現行國際法に拘らず抗敵開始に至らんとする刹那に於て我商船數隻を韓國中立港內に於て戰時捕獲船として捕收せり

四、日本國政府は京城駐劄同國公使を經て韓國皇帝に向ひ自今日本國行政の下に僅かる可しと宣言し且つ之に從はざるときは日本國軍隊は皇城を占領すべき旨同皇帝に警告せり

五、日本國政府は在韓佛國公使を經て在韓我公使に宛て我公使館員を率ゐて韓國より撤去すべき旨を促したる書面を送附せり

我露國政府は前記各事實の甚しき國際法違反の罪を構成することを認定し日本國

政府の行動に對し各國に抗議を提出することを其義務なりと思量し國際を保證する處の原則を重視する各國の我態度に合意すべきを確信して疑はず又是と同時に我政府は日本國が韓國に於て不法に權力を壟斷せんが爲め韓國政府より出すことあるべき各命令及び宣言を盡く効力なきものと宣言する旨を茲に豫告することを必要なりと考量す

認妄の言、依然として露國外交の特色を發揮して剩すなし。是に於いて日本政府は三月九日を以て再び之れに對する宣言を公にせり。

聞くが如くんば露國政府は此頃一の公文を各國に致し日本政府を責むるに國際法違反に屬する或種の行爲を韓國に於て行ひたることを以てし將來韓國政府の命令並に宣言は其効を有せざるべき旨を聲明したりと云ふ帝國政府は此機に於て露國政府の意見若くは聲明に對し敢て顧慮するの必要を見ず然れとも事實の認妄を看過するに於ては或は恐る中立國中之れが爲めに誤解を生ずるに至るものあらんことを故に之れに對し其妄を辯ずるは帝國政府の權利にして又義務なりと信ずるを

以て茲に露國が其公文に於て充分の證左あり且つ確實なる事實と聲言したる五點に關し左の言明をなさんとす

一、日本軍隊が宣戰に先ち韓國に上陸したることは帝國政府も亦之を認む然れとも交戰の狀態は既に現實に成立し居たるなり且夫韓國の獨立及領土保全の維持は今回戰爭の一目的なり從つて露國が侵迫せる地方に軍隊を派遣するは我權利と必要に屬す況や此事たる韓國政府の明確なる同意を得たる所なるに於てをや

日本軍隊が韓國に上陸したるは平和なる商議の進行中露國の大軍が清國の同意を經ずして滿洲に送派せられたるが如きと大に趣を異にし曲直の在る處極めて明瞭と云ふべし

二、帝國政府は露國公文第二點を以て全然無根の虛說なりと聲明するものなり帝國政府は丁抹海底電線に由る露國電信の交付を停止したることなく又韓國政府の電信を破壞したることあるなし若し夫れ二月八日我艦隊が仁川港に於て二隻の露國軍艦に突如攻擊を加へたりとの非難に對しては交戰狀態當時已に成立し

たりしこと及び韓國は已に日本軍隊を仁川に上陸せしむるに同意したるが故に兩港は少くも日露交戰國間の關係に於ては業已に中立港たる性質を有せざりしことを一言するを以て足れりとす

三、帝國政府は捕獲審檢所を設立し之に授くるに商船捕獲の適法なるや否に關し最終の決定を下すの全權を以てせり此故に露國公文第三點に關しては茲に何等の言明を爲すべき場合にあらずとす

四、帝國政府は露國公文第四點の所說は全然事實の根據なきものなることを聲明す

五、帝國政府は露國公文第五點所說の不精確なることを斷言す帝國政府は露國公使に對し韓國より退去せんことを直接にも亦間接にも要求したることなし二月十日駐韓佛國代理公使は我公使を來訪して告ぐるに露國公使が韓國退去を希望し居るを以てし之に關して我公使の意見を尋ねたるに付我公使は露國公使にして其機會弁に公使館護衛兵を饒へ平和に撤退するに於ては日本軍隊を以て充分

之を保護すべき旨を答へたり此の趣は其後日佛兩代表者の書翰を往復して更に確められたり斯くて露公使は二月十二日を以て任意に京城を撤退し而して我は仁川迄は日本兵士の護衛を付したり

尙ほ茲に附記すべきものあり釜山駐在露國領事は二月二十八日に至る迄尙ほ其任地に止まりたり同官の殘留如此久しきに亘りたるは何等訓令に接せざる爲め不得已に出でたるものなりと云ふ惟ふに露公使は其出發に先ち必要の訓令を領事に與ふることに念ひ到らざりしものなるべし而して撤退の訓令遂に露領事に達し領事に於ても亦可成速かに釜山を去らんことを希望せること明かなるに及び釜山駐在帝國領事は露領事の出發に際し有らゆる便宜を與へ結局露領事の一行は我領事の斡旋により日本を經て上海に赴くことゝなれるものなり

奈何に露國の宣言なるものが、道理と事實とに反するか、而していかに日本の行動が合理にして且つ公正なるかは、此一篇の辯明書によりて自ら明かなる可し。世界の公論は、曲直孰れに在るかを判ずるに於いて苦しむ所なかりし也。

(二) 日韓協約の締結

日本と韓國との特殊の關係は、日韓協約の締結によりて明白にせられたり。協約は二月二十三日を以て調印せられ、二十八日を以て發表せられたり。

大日本帝國皇帝陛下の特命全權公使林權助及大韓帝國皇帝陛下の外部大臣臨時署理陸軍參將李址鎔は各相當の委任を受け左の條款を協定す

第一條　日韓兩帝國間に恒久不易の親交を保持し東洋の平和を確立する爲め大韓帝國政府は大日本帝國政府を確信し施政の改善に關し其忠告を容るゝこと

第二條　大日本帝國は大韓帝國の皇室を確實なる親誼を以て安全康寧ならしむること

第三條　大日本帝國政府は大韓帝國の獨立及領土保全を確實に保障すること

第四條　第三國の侵害により若は內亂の爲め大韓帝國の皇室の安寧或は領土の保全に危險ある場合は大日本帝國政府は速に臨機必要の措置を取る可し而して大韓帝

國政府は右大日本帝國政府の行動を容易ならしむるため十分便宜を與ふること

大日本帝國政府は前項の目的を達するため軍略上必要の地點を臨機收用すること を得ること

第五條　兩國政府は相互の承認を經すして後來本協約の主意に違反すべき協約を第三國との間に訂立すること を得ざること

第四條　本協約に關聯する未悉の細條は大日本帝國代表者と大韓帝國外部大臣との間に臨機協定すること

明治三十七年二月二十三日　　特命全權公使　林　權　助印

光武八年二月二十三日　　外部大臣臨時署理陸軍參將　李　址　鎔印

極東禍亂の因、其一は實に韓國の釀生するもの也。日韓協約は、此禍根を除いて平和の一保障を與へ、以て韓國と日本との利益を保たんとするもの也。蓋し韓國の利益

は、日本の利益と一致す、日本の希ふ處は、露國の侵略主義と全然撰を異にして、韓國の位地を永久に鞏固ならしむるに在り、是れ東洋の平和と共に日本の自衛の爲めにして、日露大戰の理由の一半はこゝに在り。然りと雖も韓國の位地を鞏固ならしめんには、丙政外政の改善を計らざる可からず、韓國にして其政治的改善に於いて、日本の助言と援助とを容るゝを得ば、其國勢の進歩始めて期すべき也。而して日韓協約は明かに、日本の忠言に聽くことを示せり。且つ是れと共に、日本が韓國の領土保全の爲めに、最も有効にして有力なる保障を與ふるの義務を負ふの報酬として、韓國の領土を軍事的目的の爲めに用ふるの權利を得たり、是に至りて日清戰役の原因たり、日露戰爭の原因たる韓國處分の大躰は定まれり。而して左顧右眄を特色となす韓廷の紛々たる群議を壓して、幾多苦心の末此協約を締結したるは、我外交の一成功と云はざる可からず。

而して此協約の結果、從來露國が韓廷を壓迫して獲得したる各種の協約、殊に巨濟島不割讓、月尾島炭坑採掘、鐵嶺島豆滿江及び鴨綠江沿岸の森林採伐等に關する各種

の條約は消滅に歸し、日本は新に京義鐵道敷設の承諾を得、韓廷は我が士官學校卒業生にして、日本語に精通せる陸軍參將將李基東を派して、線路の敷設に便宜を與ふることゝせり。

（三）伊藤特派大使の韓國行

日韓協約新に成りて兩國の關係更に一層の緊密を加へたる爲、更に韓帝慰問の爲め侯爵伊藤博文を特派大使として韓國に差遣することとなれり。是に於いて伊藤大使は、樞密院書記官長都築馨六以下の隨行員を隨ひて出發し、三月十七日仁川に着し、即日入京大使館に入り、十八日慶興宮に赴き、甘寧殿に於いて韓帝に正式謁見を遂げ、我天皇陛下よりの御親書、及び御贈品を奉呈せり。二十日再び謁見せる時、韓帝より金尺大綬章（大勳位）を親授せられ、續いて韓皇及び皇太子は列席の韓國顯官一同をして其席を去らしめ、約一時間伊藤大使と懇談せられたるが、洩れ聞く所によれば、此時韓皇は大使に對して、卿は日本國の元勳にして、前後多年の間大政に參與し、他人の企及すべ

からざる經驗に富めることなれば、朕が爲めにも充分の助力を惜しむなからんことを望むとの趣旨を仰せられ、大使は之に對し、殷懃に奉答する所あり、且つ日露交戰の刻下に於て、韓國は急激なる改革を爲さゞるを宜しとすること、特に軍隊の膨張は大に不可なること、最も力を教育に盡くし、國民の漸進發達を計るべきこと、皇室と皇室との間に最も親密なる交際を完うする事等に關して縷々奏聞し、陛下の賢明に渡らせらるゝとは夙に瞻仰せる所にして、必ず國政振興の績を擧げらるべきを信ずる旨、豐富の辭令を以て言上し、大使の圓滿にして温醇なる奏上は、韓國宮廷に少なからざる慰安を與へ、我れに信賴するの念を熾ならしめたりと云ふ。斯くて大使は二十五日に至り、告別の謁見をなせり。其際大使は、宮廷に各種雜駁の意見を容るゝの弊を述べ、國事は成るべく大臣に責任を負はしむべきことを勸告し、且つ從來の歷史を見るに、政權爭奪の爲め、往々施政を誤るの弊あるを以て、常に和衷協同の方針を執りて大綱を總攬あらせらるべきを奏上せり。謁見終りて別室に於いて御陪食を賜はり、翌、二十六日を以て京城を出發歸途に就けり。

斯くして伊藤大使は其特派せられたる使命を了へたり。我が慰問の鄭重なるが上にも鄭重を重ねたる、韓帝が我皇室の御好意の深厚なるに感激せしと云ふは、偶然にあらざるべき也。是れより先き韓廷にては大使の入京に關して密に疑懼の念を抱き、或は韓皇の日本漫遊を勸告せらるべしと恐れ、或は亡命者特赦の忠告に逢はむと恐れ、甚しきは國土の割讓、行政の干涉を見るべしとまで恐れたりしも、大使の使命は、單に兩國の親善を期するに外ならざりしより、却て案外の思をなし、深く喜びたりしと傳へらる。

(四) 清國中立の保持

日本政府が韓國處分と同時に力を用ゐたるは、清國中立の保持に關する問題也。一は上海に於ける露國軍艦の處分に關し、一は遼河右岸の中立に關す。

露國砲艦マンジュール(一二二四噸)は日露開戰前より上海に碇泊せしものなるが、二月十日頃より多量の石炭を積込めるのみならず、十一日には錨地を轉じて東清鐵道

會社所有倉庫前の機橋に横着けして盛に彈藥を積込める形跡あり。右に關し二月十一日上海駐在日本領事は清國地方官の注意を促し、上海道臺はマンジュール艦長に對して退去を請求したれども同艦長は之を肯せず。然るに清國政府は二月中旬を以て其中立規則を發布し、同規則中に於いて交戰國軍艦は特定の場所を除くの外二十四時間以上清國港灣に碇泊することを得ずと定めたるを以て、二月十九日上海駐在日本總領事は再び清國地方官に對しマンジュールの上海に碇泊するは一般通商に對し脅迫の因たるのみならず、同時に清國政府の制定したる中立規則に違反することを指示して、同艦の退去を請求せり。上海道臺は卽ち露國領事に對し、二十四時間以内に退去せしむることを照會せしも、依然言を左右に托して、應せず。是に於いて内田清國公使は清國政府に對しマンジュールにして、規定の時間内に上海を退航せざるに就ては、清國政府は其中立權に據り、同艦をして戰爭繼續中交戰行爲に從事する能はざる事態にあらしむることを要す、若し清國政府に於て此中立義務を破る時は帝國政府は其軍艦をして上海に淵らしむるの外止むを得ざるに至る可しと警告せしを以て、二月二十四日

清國政府は同政府と露國公使との間に取極めを爲しマンジュールの武裝を解き、其銃砲彈藥を上海各居留民地會の管理に委ぬべく、尙ほ露國公使より公文を以て戰の終結まで、同艦は上海を去らざることを誓言せしむべきことを定め、我政府の同意を求めて來れり。

然れども我政府は此取極めを以て、將來に對する滿足なる保證と認めず、尙之に加ふるに同艦の航行に必要なる機械を取去るか、又は同艦を清國の支配の下に移すことを必要とし、其旨清國政府に通知したり。是に於て清國政府は更に露國公使に交渉したる上、三月七日に至り上海道臺は同艦が露國總領事に對しマンジュール裝置大砲の尾栓、兵器、彈藥及び必要機械の陸揚を請求せることを上海駐在の帝國領事に通知しマンジュールは大砲の尾栓を除き去り彈藥等を清國軍艦に移積する等、徐ろに其武裝を解くことに從事せしも遷延時を要すること多きを以て、我公使は嚴に清國政府に督促する所あり、三月三十日に至り、日本總領事は警戒の爲め上海の港外に在りし軍艦秋津洲の艦長と共に、露艦より取外づしたる武器を臨檢したるに滿足すべき狀態にあ

りしを以て、翌三十一日秋澤洲は上海より退航し、こゝに所謂マンジユール問題は解決することを得たり。

而して一方に於いて遼河右岸地方に關する中立問題起れり、嚮に清國が中立を宣言するに當り、『遼河以西に於ける露兵撤退(第一期撤兵の際に撤兵したるもの)の地は、北洋大臣より兵を派して駐劄せしめ、各省及び邊境內外、蒙古は凡て局外中立の例に照して處辯し、云々』と聲明し、同く滿洲の地なりと雖も、遼河以西は全く中立地となり居たるものなりしが、露國の橫暴なる之を作戰上に便ならずとして、此の地域に關する中立宣言を撤回せしめむと企てたり。而して我が內田清國公使は、二月廿三日慶親王を訪問して、露國政府の提議したる中立地域減縮には、飽くまでも抗議する旨を陳べ、萬一露國の恫喝に恐れて、山海關以外に兵を出さゞるに於ては、中立宣言の當時日本に對して聲明せし言辭に違ふものなれば、日本に於ても十分の計畫ありと嚴談し、慶親王は直に駐露公使胡惟德に訓電するに、中立地域に關する露國の抗議を拒絕すべきを以てせり。然りと雖も國際の信義を解せざる露國は依然として清國の中立を蹂躙

し、新民屯の電信局を占領し、新民屯、田庄臺、溝幇子等へ其兵を派し、食糧品を各所より徵集しつゝあるのみならず、馬玉昆の兵三萬內外朝陽を中心として駐屯し、袁世凱の兵亦三萬內外永平を根據として駐屯しつゝあるに對し、露國は之を中立嚴守の態度に非ずと稱し、清國外部に移牒するに、清國政府にして斯く對手國に偏袒するの事實を見ては、露國政府に於ても別に取るべき道ありとの意を以てし、清國當局者を威嚇し、是非共朝陽方面の清國兵を撤退せしめひとせり。之に對して袁世凱は强硬の意見を建議せしも、慶親王は實力に伴はざる反對抗議を以て口舌の爭ひに過きずと爲し、成行きに一任し置くべしとの回答を與へたり。三月十五日の一北京電報は、露國にして此上更に遼河以西の地に向て兵員を增派するが如きことあらば、露清兩國兵の衝突或は免れざるべきの形勢あるを傳へ來りぬ、平和の攪亂を事となす露國は眞に憎くむべき限りならずや。

第十一章　閉塞擧行前の豫備戰

三月二十一日二十二日の兩日、又もや我艦隊は旅順に敵艦隊を攻擊せり。されど彼我睨みあひの姿を以て別れ、花々しき激戰に至らざりしものは、我に在りては、是れ敵情の偵察戰なれば也、壯烈鬼神を哭せしめたる第二回敵港閉塞擧行前の豫備戰たれば也。

是れより先きマカロフ提督の來りてより、旅順は幾分か面目を改めたるもの〻如く、艦隊の應急修理は略成りて、屢々港外に遊弋し、以て其士氣の回復を表現せんとするもの〻如し。彼れにして依然旅順の海角にあらば、我は之れが爲めに牽制せられて、艦隊意の如き運動を試むる能はざるのみならず、陸兵輸送の安全亦之れが爲めに害せらるゝの虞あり。我はいかにしても擊たざる可からず、擊ちて之を無能力の者たらしむるを要す。而も敵は我艦隊の進擊するに逢へば、則ち深く港内に隱遁して出でず、會々勇を皷して出づるありと雖も、近く砲臺の下に艦列を作り我を誘うて砲臺の十字

火に入れ、陸上と相呼應して砲彈雨注の下に我を苦しめんとするか、又は沈設水雷に掛けて我を滅さんことを圖るのみ。之を擊破するの困難、實に名狀すべからざる也、而も戰機は一日も緩うすべからず、是に於いて又もや封鎖決行の議は盛んに起りぬ、其中心は第一回の封鎖に從ひたる將校なるは勿論なり、彼等は第一回に於ける其壯擧の功、一簣を缺けるを深く遺憾とし、武士の面目にかけて是非とも其目的を達せんと主張し、之を東鄉司令長官に申請して熱心に其認可を請ひて、議は遂に決せり。然れ共敵は第一回封鎖に依りて蒙れる障碍を、其後如何にして處分したるか、又陸上幷に艦隊は目下如何程其戰鬪力を恢復したるやを探査するは、第二壯擧を決行するに先ちて豫め試ひべき至當の順序なり、玆に於てか我艦隊は三月某日根據地を發して旅順口に向ひぬ。

東鄉司令長官より發したる二十四日付の公報に據れば聯合艦隊は豫定の如く行動し、兩驅逐隊は二十一日夜より二十二日未明迄旅順口港外に在りて與へたる任務を遂行せり、此間多少敵の砲火を被りしも別に損傷なし、又本隊及び巡洋艦隊は二十二日午前

八時旅順港沖に達し、其一部を鳩灣の方面に遣はし、富士、八島をして港内に對し間接射撃を行はしめたるに、此砲撃中敵艦は漸次に港外に出で來り、午後二時過ぎ間接射撃を止むるの頃、其數、戰艦五隻巡洋艦四隻驅逐艦十隻となれり、敵は始終砲臺下に運動し我を誘致せんとするを認めたり。又敵艦よりも間接射撃を爲したるものゝ如く富士の附近に着彈多かりしが、一も損傷なし。午後三時迄に港外を去りて引揚げたり。我艦隊が三月十日の如く全力を擧げて猛撃を試みざりしは、攻撃の目的が上記の如く一個の偵察に過ぎざりしが故なり。

而して我艦隊の射撃中漸次港外に出で來りし敵艦は、定かに判明せざるも、戰闘艦ポベータ、ペトロポウロウスク、ペレスウイット、ポルターワ、セバストポリの五隻と裝甲艦バヤーン及び巡洋艦ノーウイック、アスコルド外十一隻なりしが如し。而して此の中ペトロポウロウスク、ポルターワ、ノーウイックの三隻は前數回の攻撃に於て多大の損害を蒙りたるものなるが、戰列に加はりたるを見れば、最早や修理を終りしものなるべし。然るに交戰中見馴れぬ四本煙突の巡洋艦一隻ありて、而も先頭に進み來り恰も

元五本煙突のアスコルドに能く類似せるを以て、各艦皆疑念を起して注視せるに、果して巡洋艦アスコルドなり、蓋し前回の砲撃に我が彈丸命中して、一本の煙突を粉微塵に破壞し、如何にするも原形に復すること能はざるの損害を與へたること判明したり。

敵は戰闘の序列を造りたるも砲臺掩護の線内より出で、我艦と雌雄を決することをせず、始終我艦を砲臺の着彈圏内に誘引せんと試みたるは、敵の現勢力の上に於て執るべき態度なると共に、破壞艦に姑息の修繕を行ひ、戰闘準備の充實し居らざることを窺知するに足れり。然れども敵は數回の激戰後旅順港内外の復舊に努め損傷破壞の艦を逸早く修理し、又レトウヰザンの如き港口に擱座したるものをも巧みに港内に引入れ、其他港口附近に在る妨害物取除けに從事し、比較的港口左方に近く横はり、敵艦の出入に著るしき障害を與へ居りし報國丸の船首を縱に引き直して其の船體の位置を動かし居るなど、すべての面目は改まれり、今や閉塞擧行は一日も緩うすべからざるに至りぬ。

第十二章　第二次敵港閉塞

敵狀の偵察は了れり、再び旅順閉塞の大冒險、大壯擧は策せられたり。千代丸、福井丸、米山丸、彌彦丸の鐵質老朽の四船を閉塞に充て、海軍中佐有馬良橘、中佐廣瀨武夫、中尉森初次郎、大尉正木義夫其指揮官たり。而して下士卒の閉塞隊員たらんことを望むもの極めて多く、且つ前回の決死隊員は悉く之れが任に當らんことを熱望して已まず、然れども曾て二千人に餘りし志願者の其選に洩れて心甚だ遺憾とするものあるを察し、將校機關士のみは多く前回の閉塞に從來したる者を用ゐ、其他の下士卒は新たなる志願者を採用して名譽ある任務に當らしむることゝせり。而して閉塞遂行後の隊員を收容する任務に當るべきものは、白雲、朝潮、霞、曉、雷、朧、薄雲、東雲、曙、電、漣の驅逐隊、雁、鴿、鵲、莽鷹、燕、眞鶴の水雷艇也。

斯くして編成はなれり、諸隊の準備は整へたり、三月二十六日午前三時、將校以下死を決して將に發せんとす。出發用意の號令は下りぬ、切に諸氏の成功を祈るとの信

號は旗艦に揭げられぬ。船は動き始めたり、各艦の甲板上に起れる萬歲の聲と、悲壯なる樂隊とを後にして、閉塞隊は死地に向つて進めり。

前夜までは、曚昧たる春月淡く海波を照して彼我の艦影明かに認め得べかりき。今宵はいかゞならんと氣遣ひしに幸なるかな、陰曆二月十二日の月は密雲に掩はれて一天暗く星影さへ定かならざれば、前回は港口四浬の沖合にて早くも砲擊を蒙ひりしが、今回は安々進むを得て、午前三時には早くも港口二浬の處に近づけり。

斯くて港口二浬の間に進むや、初めて敵の探海燈の發見する所となり、猛烈なる砲火は哨艇及び砲臺より發射せられて、各船の前後に集中せり。敵が數度の襲擊に警戒を嚴にせしは覺悟の上也、雨と飛び霰と降る砲丸は決死の勇士の志を沮む能はず、各船は愈々勇往邁進し全速力を以て港口に達せり。千代田丸は前鋒にありしを以て最も烈しく砲火を蒙り、敵の驅逐艦は左右より挾みて亂射擊を加へしが、須臾にして、砲臺上より照射せる探海燈は、何事やらん、信號と覺しく、二三回上下に打振られて、哨艇の砲擊は頓に全く止みたり、機逸すべからず千代田丸は更に港口水道に猛進し、

思ふまゝに目的地點に達し、自ら爆發藥に點火して轟沈せり。之に續ける福井丸は、千代田丸の左側を過ぎて更に前方に進み、今や投錨せんとする時、敵の驅逐艦より發射せし魚形水雷は、一發見事に命中して、忽ち爆發沈沒せり。指揮官廣瀬中佐は令を下して直に乘員全體を端艇に移らしめしが、獨り杉野兵曹長の有らざるを怪しみ閉塞船に行きて之を探ぐること三回に及ぶも其影を見ず、已むなく端艇に移乘して本船を離れ、敵彈雨注の間を漕ぎ行く折しも、敵の哨艇より發射せし速射砲の一彈飛んで中佐の後頭部に命中し、纔に一片の肉塊を艇中に留めて名譽の戰死を遂げたり。第三番なる彌彦丸は、福井丸の右側に投錨して、自ら爆發沈沒せしが、第四番の米山丸は、已に沈沒せる千代田丸との間を過ぎて、港口水道に入らんとせし時、敵の驅逐艦一隻前面に現はれたり、指揮官正木大尉は此艦をして港外に出でしめなば、吾が歸路の妨害たるべきを思ひ、忽ち勢鋭く猛進して、其艦尾に衝突を試みぬ。敵艦狼狽して發砲すること甚だ盛んなりしも、一も命中せず、我は奮戰して遂に目的地に達して水道の中央に投錨し、敵の魚形水雷一發を受けて爆發し、その惰力の爲め、左岸に近く船首を左に

して横さまに沈沒せり。

閉塞隊員掩護收容の任務を帶びたる水雷艇隊は、天明過ぐる頃まで、敵の砲火の間に立ちて能く、其職責を盡したるが、中にも芥鷹、燕の二艇は閉塞船隊を護衛して、港口より約一海里の處に達せし時、敵の驅逐艦一隻二艇の間を一直線に通過するに逢ひ、其左右より挾み擊ちて、多大の損害を加へしかば、敵は汽艙を破られて盛に蒸氣を噴出し、狼狽度を失ひて、遂に淺瀬に乘揚げたり。此驅逐艦はシールヌイ號と稱し、機關士一名、水夫六名之に死し、艦長大尉及び水兵十二名負傷せり。

かく四隻の閉塞隊員は、其船を爆沈して目的を達せし後ち、何れも端艇に乘りて歸路に就きしが、敵は探海燈を照射して、砲臺より發ち來る砲丸雨の如くに端艇を打ちて、その彈孔殆んど蜂巣の如くなるに至りしも、幸に多く我が將卒を損せざりき。されど流石に初の内こそ勇ましく漕ぎたれ、終夜眠らず激戰奮鬪し、剩さへ數里の間を漕ぎ行くこととて、疲勞次第に加はりたれば、正木大尉は、一同聲高らかに軍歌を唱へしめ、海軍萬歳を叫びなどして士氣を皷舞せるに、敵は其聲を的にして急射擊を爲し、

危險云はん方なかりしも、各艇皆悲なく港外に出づるを得、待合せ居りし水雷艇隊に漕附けて各收容せられたり。

第二回の閉塞事業は終れり、遺れる疑問は其成績の如何に在り。千代丸は黄金山の西側約三鏈の處に爆沈し、福井丸は千代丸の左側を過ぎて、其前方に沈沒し、彌彦丸は福井丸の左側に沈み、米山丸は港口水道の中央に投錨し、敵の魚形水雷を受けて、惰力の爲に左岸に近かく、船首を左りにして横に沈沒したれば、米山丸と彌彦丸の尾端とは相距る百五十米突乃至二百五十米突に過ぎず。而して此の間隙に於ける水深は二十七呎乃至三十五呎なりといふ、前回の閉塞に沈沒せし報國丸及び仁川丸は已に港口の船路を妨ぐべき位置に在りて、敵艦隊の出入に少なからざる時間を費さしむるに今又た閉塞の意外に好成蹟を得たれば敵艦隊行動の不自由は想見するに餘りあり。故に此の再擧の閉塞は殆んど七八分以上の目的を達したりといふを得べき也。

閉塞再擧の報傳はるや、世界は日本軍人の勇敢にして大膽、報國の念炎ゆるが如きを見て益々感嘆し、是れ決していづれの國の歴史にも見るを能はざるものとなせり。

第一回閉塞の際英國海軍少將イングルスは之を評して曰く「日本が初め旅順閉塞を企てたる時、此壯擧に加はらんことを申出でたる者二千名に餘り、中には其願書を血書したるものさへありといふ。斯くの如き忠勇義烈の事例は、歴史上未だ曾て見ざる所、是れ實に日本人の特性を發揮したるものにして、人をしてそゞろに希臘の古英雄を追憶せしめずんばあらず。夫れ閉塞の事たる海戰中の最も危險なる動作と認めらるゝもの、而も彼等は驀然として其擧に突進したる也。彼等に在りて危險の地即ち名譽の地と心得たるが如し。人は英國の船艦に長たるものが往々其船の沈まんとするに當りて其船を去ることを肯せざるを賞揚すれども、日本の海軍に在りては斯くの如き心掛は上下を通じてあらゆる階級に存じ最下級の水夫と雖も、尚ほ此の心掛けを忘れざるなり」云々

而して今や歴史に曾て見ざる忠勇義烈の事例を再び示す。世界の齊しく讃嘆措く能はざりしもの固より當然の事也。優詔聯合艦隊に下りて嘉賞あらせらる

聯合艦隊ノ再度旅順港ヲ閉塞セントシタル壯擧ヲ聞ク朕倍々其事ニ與リシ將校下

士卒ノ忠烈ヲ嘉ス

(附) 廣瀨中佐の戰死

東鄕司令長官の第二回閉塞公報中の一節に曰く「戰死者中福井丸の廣瀨中佐及杉野兵曹長の最後は頗る壯烈にして同船の投錨せんとするや杉野兵曹長は爆裂藥に點火する爲め船艙に下りし時敵の魚形水雷命中したるを以て遂に戰死せるものゝ如く廣瀨中佐は乘員を端舟に乘移らしめ杉野兵曹長の見當らざる爲め自ら三度び船內を搜索したるも船體漸次に沈沒海水上甲板に達せるを以て止むを得ず端舟に下り本船を離れ敵彈の下を退却せる際一巨彈中佐の頭部を擊ち中佐の體は一片の肉塊を艇內に殘して海中に墮落したる者なり中佐は平時に於ても常に軍人の龜鑑たるのみならず其最後に於ても萬世不滅の好鑑を殘せる者と謂ふべし。」何等壯烈の最期ぞや、部下の一卒の見えざるが爲め雨と注ぐ砲丸の間に之を探ぐること三回に及ぶ、仁至り愛盡くせるものに非ずや。而して艦の沈沒により海上恐るべき旋渦を起すべきを以て、無限の情恨堪へ難きを捨てゝ早く端艇を旋渦の範圍外に脫せしめ、乘組員の生命を全からしめたり。中佐は旋渦の起る可き時と、船中に於て搜索すべき時間及び最後の移乘後旋渦の範圍外に漕出すべき時間とを百忙中の腦裡に描きて寸毫も誤らず、大膽にして小心、事愈々急にして心益々閑なるは、到底常人に於て見ること能はざるもの、東鄕司令長官が「其最期に於いても萬世不滅の好鑑を殘せるもの」といへるは、決して過褒の言にあらざる也。

中佐は豐後の人、武士の門に生れて父祖壯烈の精血を承く、幼にして膽氣既に群童を絕し、長じて身を海軍に投せんが爲め、明治十八年を以て海軍兵學校に入れり。日淸の役には海軍大尉を以て威海衛の進擊に加はりしも、尙ほ未だ重視せらるゝに至らず、戰後、露國々情研究の急務なるを感じ、熱心に研鑽せしが、遂に上官の認むる所となり露國留學を命せられたり。露國に在ること前後五年、出でゝは露國の俊髦と臂を把つて交を訂び、退いては一室に默座して萬卷の露書を讀破し、陸海軍の現狀、其他戰略戰術に關する實情を知ることを得たり。三十四年十月、歸朝を命せられ、翌年

一月露都を發し、冴寒酷烈の嚴冬、西比利亞の氷野を東に指して二千五百里の鐵路、滿洲の疆上を走り、東三省を縱斷して旅順口に出でゝ歸朝せり。此行は沿道の地理風土を視、雪中の輸送力を觀察すると共に、自己の身體のよく寒威に耐へ得るや否やを實驗せんが爲めなりと云ふ。

歸朝後まもなく朝日艦水雷長を命ぜられ、勤務未だ一年に滿たざるに日露兵端を開くに至る。是れより先き大佐八代六郎、中佐有馬良橘と商量し、一旦砲火開く時は、旅順口を封鎖するの大方策を案出し、固く身を以て當らんことを期せしと云ふ。中佐の部下に對する懇切殷到、悃誠忠實、人の憂を憂へ、人の喜を喜ぶ。温然として玉の如き美質は中佐をして好箇の紳士たらしめたり。而も凜乎として鐵の如くに鋭、何物も其志を奪ふ可からざるは、自ら海將の典型たるを示せり。是を以て艦中の將士、中佐の感化を受くること多く、一種義烈を尚ぶの風は翕然として全艦を靡かすに至りしと云ふ。中佐逝くの歳、僅に三十七、帝國海軍の將來は中佐の如き武人の貢獻に待つこと益〻大なるに至るべしと雖も、而も千載の一時に遭うて一死家國の爲めに盡くす、

亦何の憾みかあらん。況んや必ず露國と戰ふの日あるを信じて其國情兵事の研鑽に心血を濺ぎし中佐は、露國要塞下の露と消えたる、寧ろ死處を得たるを喜ぶなるべし。東鄕將軍曰く「中佐の如きは武人の典型なり」と。

嗚呼武人只斯くの如くにして死すべき也。

第十三章　軍國の議會

天下急機あれば、急機は先づ帝國議會を撃つ。今日の戰爭は國民を背後に負へるの戰爭也、天下の安危、豈國民の聲を代表せる帝國議會に觸接せざるものあらんや。

第△議會は、政府と議會の衝突に終れり。河野議長の內閣彈劾的答答文は、第△議會の運命をして僅に一日たらしめ、開院式の翌日を以て解散せらるゝの未曾有の珍事を演じたりき。當時政黨領袖間の籌略は、次期議會に於ける花々しき政府と決戰の上に運らされぬ。而も晴天の霹靂は二月〇日を以て東亞の天を動し、外交の斷絕に次いて宣戰の詔勅となり、國民は火の如くに熱して千歲再び有り得べからざるの國難に殉せんことを希ふに至りぬ。斯る間に臨時議會は召集せられたり、亦何ぞ政權の爭奪あらんや、感情の衝突あらんや、區々たる討論あらんや、紛々たる質問あらんや。臨時議會は主として時局に關して緊急なる豫算を議せんが爲めなりと雖も、實は是れ、日本國民は世界に於ける最高度の愛國心を有する國民なることを發表せんが爲め也。尙

ほ詳しく云へば、日本國民は、國難に際しては、百事を拋ち、自己を忘れ、同心合體義勇奉公の實を擧ぐるものなることを世界に告げんが爲め也。否、故らに之を告げんとするにあらず、溫き愛國の血の流るゝ國民性は期せずして斯くの如きに至るのみ。

三月十一日臨時總選擧によりて選出せられたる代議士は、同月十八日を以て召集せられ、同じく二十日を以て　天皇親臨開院式を行はせられ左の勅語を賜はる。

朕茲に帝國議會開院の式を行ひ貴族院及衆議院の各員に告ぐ

帝國と締盟各國との交際益々親厚を加ふるは朕深く之を欣ぶ

朕は東洋の平和を永遠に保持するの目的を以て朕が政府をして露國と交渉せしめたり而も露國は平和を尊重するの誠意を缺き遂に干戈相見るに至れるは朕が慨とする所なり然れども事既に此に至る交戰の目的を達せずんば止むべからず今や朕が軍人は艱苦を排して其忠勇を致せり朕は帝國臣民が協同一致以て國光を宣揚せんことを望む

朕は國務大臣に命じて特に時局に關し緊急なる豫算案及法律案を提出せしむ卿等

克く朕か意を體し和衷協賛の任を竭し以て朕か望む所に副へよ

翌二十一日貴族院にては左の勅語奉答案を議決せり。

臣貴族院議員等誠恐誠惶謹で

叡聖文武天皇陛下に上奏す　恭しく惟みるに當今皇化日に躋り國運日に進み各國との交際益々親厚を加ふ前きに帝國は東洋の平和を保持するが爲めに露國と交渉する所あり然るに露國は平和を尊重するの誠意を缺き終に交戰の已むを得ざるに至れり開戰以來出征の將士勇進奮鬪捷報累りに奏す臣等　陛下の威德を瞻望し感激の至に任ふるなし爰に臨時議會を召集せられ、　車駕親臨して開院の盛典を擧げ時局の要務に關して優渥なる　勅語を賜ふ謹んで　聖旨を奉體し　宏謨を翼賛し協同一致以て光輝ある終局を見んことを期す恐惶の至に堪へず謹んで奉答す

尋で海軍の偉功を欲するの議案を可決せり。

今や外征の帝國海軍は萬難を排して遠く匝寒の苦境に進み勇戰奮鬪累りに大捷を致す海上の控制帝國の權内に歸する將に近きにあらんとす其忠勇壯烈景仰に任ふるなし貴族院は茲に帝國海軍の偉功を頌し其光輝の益々發揚せられんことを望む

衆議院は左の勅語奉答文を呈せり

恭しく惟に

叡聖文武天皇陛下茲に臨時帝國議會を召集し　車駕親臨開院の盛式を擧げ優渥なる聖詔を賜ふ臣等恐懼の至に堪へず顧ふに帝國が東洋の平和を保持するに切なるは一日にあらず然るに露國は平和を尊重するの誠意なく清國との盟約及び列國に對する累次の宣言を破れり　陛下の戰を宣し給ひたるは臣等の感激に堪ざる所なり今や出征の師は連戰連勝益忠勇を致す是陛下の稜威によらずんばあらず臣等謹で聖旨を奉體し協賛の任を竭さんとを期す衆議院議長臣松田正久誠恐誠惶謹で奏す

尋で全院委員長常任委員の選擧をなしたる後、左の決議案を提出通過せり。

我忠烈勇猛なる帝國海軍が嚮ふ所克捷を奏し敵國を震懾し

皇威を輝耀し忽ちにして海上を攘掃するの殊勳を樹てたるは國民の深く感荷する所なり衆議院は茲に之を顯明して其誠悃の意を表す

是れより先き政府は軍費の支出を以て公債募集を第一着歩となすに決し、國庫債券一億萬圓を發行するや、國民、奉公の誠意喚發する所、未だ期日に達せざるに、全國の應募高は募集額の三倍を超ゆるの盛況となりしも國民はこれに滿足せずして、更に續々軍資金の獻納となり、恤兵品の寄贈となり、都下に有栖川宮殿下を總裁に戴ける國民後援會の設立を見るに至りしが、今や五千萬民衆の聲を正式に代表する帝國議會の海軍に對する感謝狀を發するに至れり。是れ國民の力を間接に軍旗の上に發揮して、最も有力なる後援を與ふるものにあらずや、之を露國に看る、上下隔離し民心和せず、怨嗟の聲は家國安危の岐るゝ時に於いて尚ほ囂々たり、勝敗の決は此一點に於いても、尚ほ優に判ずることを得と云ふも過言にあらざる也。

超えて二十三日、第一回の衆議院は開會せられたり、傍聽人は滿場立錐の地なき迄に押寄せたり。諸般の報告終り、桂首相の演說に次ぎて、小村外相の日露交渉に關する演說、曾根藏相の財政に就いての演說あり。小村外相の演說は既往三ヶ年に亘れる露國と折衝の顚末を公にして詳細を極めぬ。貴族院議長德川公爵は此日東鄕司令長官

の答辭を報告せり。

聯合艦隊は去る二十一日の決議に係る貴族院の鄭重なる頌詞を辱うし一同感佩の至に堪へず尚ほ益々奮勵事に從ひ終局の効果を收めんことを期す

右謹て答謝す

明治三十七年三月廿五日　聯合艦隊司令長官　東鄕平八郎

臨時事件費として政府の協賛を求めしもの左の如し。

一金一億五千六百萬圓　救裁濟支出額
一金三億八千萬圓　臨時軍事費
一金四千萬圓　臨時事件豫備費
計金五億七千六百萬圓
一金六千八百萬圓　增稅收入
一金四千七百萬圓　歲計剩餘金

一金五千萬圓　特別會計資金繰替
一金四億千百萬圓　公債及借入金

右の目的を以て政府より議會に提出せる議案は、二十五の多きに及べるが、中に非常特別稅法案といへるは、卽ち所謂戰時稅にして、其增稅すべきものは左の如し。

一　地租　二　營業稅　三　所得稅
四　酒稅　五　砂糖消費稅　六　醬油稅
七　登錄稅　八　取引所稅　九　狩獵稅
十　鑛業稅　十一　輸入稅　十二　新稅（關稅、毛織物稅、石油稅）
十四　商事非訟事件印紙

右の地租は、政府案四分五厘を四分三厘とし、其期限を戰後一ヶ年までとし新稅の鹽、絹布稅を廢し、其他は大抵可決せられたり。かくの如く重大なる議案の多かりしにも係らず、開會數日僅に十日、衝突なく紛擾なく、和氣靄々の間に無事議了することを得たり。

二十九日、山本海軍大臣聯合艦隊第二回閉塞に關する報告をなすや、貴族院は廣瀨中佐以下の戰死者を哀悼するの決議をなせり。

決議案

帝國海軍の旅順口第二回閉塞に關する公報に接し貴族院は其忠烈勇壯の動作を頌し同時に光榮ある戰死者に對し深く哀悼の誠意を表す

同日衆議院の決議に對する東鄕司令長官の答電あり。

聯合艦隊は本月二十五日の決議に係る衆議院の鄭重なる頌詞を辱ふし一同感佩の至りに堪へず尙ほ益々奮勵事に從ひ其目的を達せんことを期す

明治三十七年三月二十八日　聯合艦隊司令長官　東鄕平八郎

二三の議案を議せる後全會一致を以て左の國民後援の決議をなせり

決議案

征露の　聖詔は、公明正大專ら東洋の、平和を軫念し給ふに出づ。我帝國の臣民たるもの孰れか鞠躬盡瘁以て　聖旨に奬順せざらんや。本院は乃ち國民報公の誠

意を體し、政府求むる所の軍資を辨給し、以て戰費に缺くる所なからんことを圖れり。惟ふに今や戰端僅に開け、我艦隊の奏功偉大なるものありと雖も、全局の大捷を收め東洋の平和を回復するは、前途猶遼遠に屬す。其必要の戰費の如きは、本院の固より吝まざる所なり。本院は切に望む、內閣大臣は宏謨を翼賛し運籌畫策能く機宜に適し、速に戡定の功を致されんことを。玆に特に決議して國民意志の在る所を表明す。

桂首相答辭を述べ、議會は三十日を以て閉院式を擧げたり。　陛下勅語を賜うて、軍國の急務に關し協賛の任を完うせるを嘉奬あらせらる。

小に爭ひ大に合し、安きに離れ難きに和す、是れ實に日本國民の特性也。而して之れを正式に事實の上に示せるものは、則ち此臨時議會なりき。

第十四章　陸軍の活動

（一）七星門外の衝突

梅花白雪の如く、白雪梅花の如き二月のはじめ、アヲヽンの悲歌一曲心なく歌うて事大の迷信に醉へる韓人を、仁川埠頭に驚かせる我三千の貔貅は、滿肉の歎を抱いて京城に淹留すること一週日、二月十六日に至るや俄然小泉大尉の率ゐる一隊に出發の命令は下りぬ。是れ平壤に在る兵站司令部を守備せんが爲め也。

小泉大尉は卽ち翌日の朝を以て汽船富士川丸に乘じて海路海州に抵り、更に膚を刺すの朔風を冒して數百韓里の道を進み、日淸の役我軍の苦戰せし古戰場船橋里を過ぎて大同江に至れば、水は氷りて容易に涉り得べし。一隊卽これを涉りて隊伍肅々二十四日を以て平壤に入れり。小泉大尉は直ちに平壤守備に關する訓令を布き、各部隊をして各々其守備地に就かしめ、尋いで斥候を放ちて附近に散在せる敵の動靜を探らしめぬ。二十八日の朝鐵騎六名は後藤少尉に率ゐられ、斥候の任務を帶びて平壤を北に距る

こと約半里、並嘓山の峠を下れる時、威力偵察らしき百餘の敵騎は彼方に現はれたり。

ア、是れ敵として陸上に見たる最初の露兵なりき。我兵意氣衝天の概を以て蹤地斬り入るの快を思ふも、衆寡固より敵し得可からざる上に、斥候の重大なる任務を有するを以て、徐々と退却を始めたり。斯くと見たる敵騎五名は蹄を揃へて急追し來りしが、七星門北方の城壁に據れる我小哨は、騎兵を援護せんが爲め、急射擊を與へしを以て、敵は直ちに馬首を回へして散亂退却を始め、一發の銃火をも交へずして後方に控へたる二十騎と共に山傳ひに迂回して影を沒せり。

斯くて七星門外に敵を擊退したる後、我が後發部發の續々平壤に入り來りしを以て、先發中隊は直に平壤の北方五里の順安に向つて進み忽ち之を占領して翌日後發部隊と合して長驅十四里を隔つる安州を略せんとし、樋藤中尉をして精鋭十騎を提げ偵察せしむ。至れば敵影を見ず、卽ち無事安州を占領することを得たり。

續いて三月九日、丸尾中尉は騎兵三名及び通譯一名を率ゐて偵察の爲めに北に向ふ、行きて博川江の畔に至れる頃、露兵二三十騎の前面に在るを見る。我兵踊躍長刀を

提げて敵群に入れば、敵騎狼狽列を亂して退く。卽ち北ぐるを追うて博川を渉りしが、深く敵地に入るの利あらざるを思うて捨て、歸り來り、舊津を過ぐる頃昌城方面より來りし敵の爲めに横さまに擊たれ、尙ほ襲の三十騎の返し來らんことを思うて背進せしに、一等卒田所清熊馬を射られて列に後くれ、遂に多數の敵と接戰して斃れたり。

是れ我が陸上に於ける名譽戰死者の嚆矢也、我が陸戰史の初頁は、田所一等卒の鮮血によりて彩られたる也。

(二) 定洲の占領

我軍已に平壤を得、更に一兵に刃ぬらずして安州を略することを得たり。士氣益々奮ひ、一鞭高く長驅して定州の地を領せんとす。定州は敵の主力のある所、蓋し此處に於いて、我が北進を阻まんとする也。是に於いて戰爭らしき戰爭は始めて陸上に見ることを得んとす。

二月二十八日我が將校斥候の一隊は、燒川を渉りて將に定州南門を過ぎんとして、城廓外約二百米突の地點に達したるに、敵は城壁に據りて我に銃火を送くること頗る急なり。我兵卽ち展開して乾田の中に伏し、徒步戰鬪を以て敵に當りしも、敵の勢力次第に加はりて我兵苦境に陷り安全なる退却をなすべき途なき時、騎兵聯隊は急を聞いて驟起直ちに水田中の隘路を驀進し來り、定州の南方三百米突從馬洞(チヨンマトウ)の高地に達するや、孔子廟を中心とし堤防を楯として全力を擲開して敵の側面に當る。然れども敵は八百に近く、我騎兵聯隊は漸く百三十騎に過ぎず。加ふるに敵は高地の城壁に依り我は斜面せる小丘より之に應戰するを以て頗る不利の地位に在り、且つ我陣地は後に水田を控ふるを以て、敵より之を見れば、宛も囊中の鼠の如き觀あるも我は毫も屈せず、遂に五十米突の地に接近しよく苦戰に堪へて敵前の地位を保てる時、恰もよし我步兵二個中隊の來援に遭ふ、是に於いて衆寡全く地を易へ、敵兵遂に支ふる能はず、城壁を下つて退却を始め、其首力は義州街道に、一部は鵬山に向へり。我步兵は直に追擊を始め、定州西方の高地を占領し、猛烈に追蹤射擊を行ふ。かくして後我軍は各

部隊を整齊して戰場の清掃を爲し、定州に急舍營をなせり。

我軍の死傷加納中尉以下十五名、敵の死傷は敵の公報十九名と稱せり。

第十五章　旅順艦隊の大打擊（敵艦提督の戰死）

明治三十七年四月十三日は、萬世武人の鑑と謳はれ、我國民に絶大なる精神的感化を與へたる廣瀨中佐の葬儀を施行せる日なり。一天朗かに霽れて風なき空を、花しづ心なく柩の上に散るさまの、いかに詩的趣味深かりしぞ。弔旗戸々に飜り都民皆涙を垂れて柩を送くれるの狀、悽惋比ふべきものなかりき。計らざりき、此日、旅順港外海若怒つて激浪萬丈、敵旗艦沈沒し司令長官の戰死を見んとは。斯くして此日は、我海戰史上忘るべからざるの紀念日とはなれり。

東郷司令長官の此日の戰を報せるもの、精細明快、吾人をして更に何等加ふる所なからしむ、乞ふ之を錄せん。曰く

「聯合艦隊は、去る十一日より豫定の如く行動し、更に旅順口の敵に對して、第八次の攻擊を爲せり。第四驅逐隊第五驅逐隊第十四水雷艇隊及び蛟龍丸は、十二日夜半旅順口港外に至り、敵の探照を冒して港口に近づき、計畫の通り港外の各所に、機

械水雷の迅速なる沈置を遂行し得たり。又特別の任務を有せる第二驅逐隊は、十三日黎明港外鮮生角の南東を巡邏せる時、東方より旅順口に入らんとする四本煙突を有する敵の驅逐艦一隻を發見し、直ちに其前路を遮りて之を攻擊し、約十分間戰鬪の後之を擊沈せり、又同時頃西方老鐵山の方向より來れる他の敵驅逐艦一隻を發見し、轉じて之を攻擊せしが、距離遠くして遂に之を港口に逸せり。此戰鬪に於ける第二驅逐隊の損傷は、輕微にして、唯「電」の卒二名輕傷せるのみ、擊沈せる敵艦の溺者は敵艦「バヤーン」の近づき來りしため、之を救助するの暇なかりし。

第三戰隊は、午前八時港外に達して、第二驅逐隊を掩護し、且つ敵情を偵察せり。午前九時頃敵艦「バヤーン」我に向ひ突進し來り、遠距離より砲擊を開始せしを以て、徐々に應戰して之を擊退せり、幾もなく敵艦「ノーヴキック」、「アスコリド」、「ヂアナ」、「ペトロパウロスク」、「ポベーダ」、「ポルターワ」等「バヤーン」と合し攻勢を取り、反擊し來り、第三戰隊之に應戰しつゝ、敵を南東方向約十五海里に誘致せり。此時沖合約三十海里に方りて、濛氣の内に隱れたる第一戰隊は、第三戰隊の無線電信に

接し直に急進し、敵艦隊に逼りしが、敵は艦首を轉じて港内に向ひ背進せしを以て、尚益々追窮して之を港前に壓迫せる時先頭に占位せる「ペトロパウロウスク」と見えたる敵艦一隻前夜沈置したる我機械水雷に掛り爆發轟沈するを見る時に午前十時三十二分なり敵の殘艦は此慘憺たる光景に驚きて大に混亂し尚ほ外に一敵艦の進退自由を失ひたるの疑ありしも敵艦隊混雜の爲め其艦型を識別する能はざりし其後敵の殘艦は約一時間頻りに艦側附近の水面を砲擊しつゝ漸次に港内に入り正午過ぐる頃港外に敵影を見ざるに至れり此戰鬪の初期砲戰に於て第三戰隊は一の損傷なく敵の損害も亦少許なるべく第一戰隊は遂に敵と砲戰距離に近かざりし。

當日午前一時艦隊は旅順口港外を去り豫定地點に集合して洋中に假泊し更に準備を整へて十四日午後四時より再び旅順口に向ひ發動せり第二驅逐隊第四驅逐隊、第五驅逐隊、第九水雷艇隊は翌十五日午前三時前後相次で旅順口港外に達し豫定計畫の如く再び其任務を遂行せり午前七時第三戰隊も港外に現はれ敵情を偵察せしが港外に敵影なく港内寂然たり又第一戰隊は午前九時旅順口沖に至り途上浮流せる敵の機

械水雷三個を發見し一々之を砲擊爆沈し午前十時より春日、日進を老鐵山の西方に分派し、約二時間港内に對し間接射擊を行はしめたり。敵の要塞及港内の敵艦も時々之に應戰せしが、兩艦共に損傷あらず此兩艦は此日を以て敵に對し其初彈を發射せしが、其射擊の効果は相應に之れありしが如く、老鐵山西の新造砲臺を沈默せしめたり。午後一時三十分艦隊は、交戰を止め歸航せり。

此連續せる作戰に於て、聯合艦隊が一兵をも失はずして多少の戰果を擧げたるものは、一に　大元帥陛下の御威德に依るものにして、麾下將卒は終始勇往敢爲其の任務を遂行するに忠實なるも、其奏功成果に至ては人力の及ばざる所多し。特に多數の艦艇が、晝夜を問はず、敵機械水雷の浮流せる洋中を縱横に航行し、然かも今日に至るまで、一の危害を受けたることなきが如きは、只天祐と確信するの外あらざるなり。

敵旅艦の沈沒！、是れ海戰に於いて容易に見る可からざるの非常事たり。故に敵に在りては全軍の士氣を沮喪せしめ、手足を斷たれたるに均しき打擊也。誰か此偉勳を

樹てしものぞ。東鄉司令長官の明かに云へるが如く、是れ假裝巡洋艦蛟龍丸の爲せし所也。當時旅順口外は狂風怒號し濁浪天を衝ち大小の船舶は爭うて港灣に入り以て其覆沒を免れんとする時、一檣の汽船は水雷驅逐艦及び水雷艇に圍繞せられ怒濤を蹴破りて萬里の波上を照らす探海燈を事ともせず進む。是れ蛟龍丸が機械水雷沈設の目的を抱いて港口に近づける壯絕の光景也。かくて敵彈雨注の間に沈勇と熟練とを以て迅速に機敏に所要の場所に之を沈設したる大膽の動作は、閉塞の壯擧と共に其壯烈を比ぶ可きもの也。斯くして其翌朝即ち記憶すべき四月十三日に至るや第三戰隊をして港外に進みて敵情を偵察せしむ。敵の主力艦隊は濃密の霧を破り全速力を以て我に向ひ突進し來れり。我は八千米突にして砲火を交じへ、我本隊へと誘致せしが、我本隊の速力を增して急進し敵艦に迫るや、敵は勢の敵すべからざるを見、忽ち背進せり。而して例の如く戰鬪艦を二列となし巡洋艦を左方に置き砲臺下に於て運動を始めたり。彼等は今や我が前夜を以て沈沒し置ける機械水雷の位置に近づける也。我各艦の將士は今か今かと片唾を呑みて待ち構へたり、果然！　果然！、敵の前艦橋に當りて萬丈

の水柱騰ちて空を衝てり。スハてそと見るまもなく、甚しき爆聲を發し非常なる煙を擧げ、檣は右方に仆れたり。アヽ是れ實に敵旗艦ペトロパウロスクなりき。四十五度位ゐ迄は綫るく仆たれりしが、後は急に仆れて水中に影を沒し而して蒸氣と火とを噴出して悽絕形容すべからざるの光景を名殘りに、提督マカロフ以下六百の敵兵は旗艦と共に運命を決せり。

報、傳はるや、國民は此奇提に扑舞すると共に、高貴なる敵艦の犧牲を弔するに吝ならざりき。マカロフ近代戰術家として名あり、敗殘の旅順艦隊を率ゐて士氣の皷舞に勉め、屢々港外に出でゝ我れと砲火を交換し、强國海軍の面目を保つに勉めたる、我れに在りては誠に好敵手なりき。而して戰鬪に於ては巡洋艦に比して甚しき遜色あり。と自ら稱せる戰鬪艦に座乘し之と運命を共にす、憐れむべからずとせんや。嗚呼武士は相見互ひ也、我將士が一掬の涙を敵將の最後に捧げたる、亦是れ戰時の語り草とすべき一佳話歟。

第十六章　元山沖の悲劇

上村中將の率ゐる艦隊が、武を浦鹽に示してより已に四十餘日となりぬ。今や旅順艦隊はマカロフの戰死によりて氣阻み勢挫けて出で、戰ふの勇なし。茲に於いて自然の順序として我艦隊は再び日本海の方面に向ふ可き時となれり。上村中將は卽ち第二艦隊及び水雷驅逐艦若干隻を率ゐ、舳艫相啣んで對州海峽を横ぎり、四月二十二日を以て北韓の要港元山津に入りぬ。元山港頭皆を決して北の方水天髣髴の間を望めば、浦鹽軍港一飛して至る可し。翌二十三日を以て愈々北征の途に就きしが、日本海特有の濃霧は海面を鎖して、艦の進ひと共に、濃密益々甚しきに至り、浦鹽港門を距る僅に六十浬迄接近して遂に艦首を回さゞる可からざるに至り、憾みを呑んで濃霧の裡海上に在ること三晝夜、漸く元山に歸港すれば驚くべし、二個の悲報は全艦の將士を震駭せしめたり。敵を求めて敵を得ず、敵は却つて我が背後に在りて心のまゝに暴行を逞うし得たる也、何等の恨事ぞや。二個の悲報、一は五洋丸事件とし、一は金州丸事件となす。

是れより先き敵陸兵の一小部隊が漸次咸鏡道に南下せるを見れば、浦鹽艦隊の出港は、遙かに之れと呼應して、偵察の傍ら聲援の任に當らんとせるものなる可し。かくて敵艦は元山方面に我海軍力の皆無なるを知り、二隻の水雷は葛地港内指して進み來れり。港内に我商船五洋丸の碇泊しあるを見るや、「其船を擊沈すべきに依り乘員上陸せよ」と信號し乍ら、上陸の時間を與へずして、突然砲擊を始め遂に之を擊沈し了せり。乘員は幸にして無事なるを得たるも、此椿事起りし爲め、居留民は非常に騷擾を始め、老幼子女先きを爭うて附近の山中に避難しぬ。蓋し元山には日本人居留地あり、露兵上陸して暴行を逞うす可きを期せしが、同日の薄暮に至り、東北に向つて其影を隱くせり。五洋丸は噸數四百に滿たざる一小汽船のみ、然れども妄りに敗戰の餘憤を商船に洩らして何等正式の手續を踐まず、公法を蔑視して暴擧に出づるに至りては其罪悔ひに餘りあるものならずや。

上村艦隊の痛心せしは、更にこれより大なるものありき。前日北の方利原地方に向

つて元山を發したる御用船金州丸の安否是れ也。是より先き露兵は續々南下し來りて、北青に向け出發せりとの情報あり、我元山守備隊長は形勢舍て置くべからずとし、歩兵一中隊を利原に送りて威嚇運動をなすに決し、則ち金州丸をして陸兵を搭載せしめ、海軍は之が掩護の爲め第十一艇隊を附せしめたり。斯くて金州丸は二十五日歩兵第三十七聯隊第九中隊(大阪)を載せ、艇隊と共に元山を發し、利原に着するや陸兵は直ちに上陸して偵察を終り、艇隊と共に元山歸航の途に就きたるが、天候俄に險惡の兆を呈せしを以て、艇隊は途に假泊するの已むを得ざるに至り、金州丸のみ大膽なる單獨航行をなし、二十五日の午後十一時、進んで新浦附近の沖合に至るや、濃霧に鎖されし海面漸く霽れて春月朦朧たる中に、大艦三隻、水雷艇二隻の我に向つて來るに會ふ、敵か味方か、恐らくは是れ我艦隊なるべしと信じ船長は却て其艦近く船を進めしに、近づき見れば驚く可し浦鹽艦隊也、アヽ武裝なき汽船のいかにして之に向ひ得べき。生も死も只敵艦のなすが儘に任せざる可からざる運命に陷れり。

敵艦は空砲を放ちて吾に停船を命じたり、此に於いて監督將校溝口海軍少佐は船長外二名を伴うて敵艦に赴く(非戰鬪員救助を請求せんが爲め也と云ふ)既にして敵の端艇に將校兵員三名を乘せたるもの我船に近づき命を傳へて曰く、若し武裝を解き一同我に降らば皆之を我艦に收容し而して後本船を擊沈すべし、依りて一時間の猶豫を與ふと、船員及び非戰鬪員は此言を聞きて孰れも端艇に移れり、今は船中陸軍々人の外參影を見ざるに至りぬ。月は全く雲を放れ、海霧また散じて銀光萬頃波濤汪洋として遠く聲あり、蕭寥の氣はます〳〵迫り來りぬ。午後十二時を過ぎたれども、監督海軍將校は遂に歸來せず、我兵皆劍を銃に裝し、彈丸を裝して各最後の準備を整ふ。忽ちにして裝置水雷の一發は本船の舳部を壞つ、時まさに午前一時を過ぎぬ(二十六日)此に於いて隊長は事既に此に至る、今は各員隨意の行動を取るべきを命ずるや、或は甲板上に登り月色を仰ぎ見て割腹する者あり、或は戰友と面して互に銃殺する者あり、既にして敵更に魚形水雷を放つ、轟然たる音と共に船の中腹を衝きて本船は二箇に裂かれたり。茲に於いて我兵の甲板上に在る者一齊射擊をなし、敵亦之に應じて砲擊し、我兵死する者相次ぐ。敵は我銃擊の烈しきに堪へず遂に其砲擊を中止するに至り

ぬ。既にして潮水は次第に船内を浸し、甲板下は水腹部に達し、甲板に上れば亦膝に達す、而も我兵尚ほ銃撃を續けて止まず、船遂に沈没する時、何等の勇敢ぞ、何等の沈着ぞ、徐に帝國萬歲を三唱し、朗々として聯隊の軍歌を歌うて海波に捲き込まれしものあり。最後に殘れる三十餘名の兵士は端艇三個によりて海上を漂ひしが敵艦遂に追はず、僅にサーチライトを照らすのみ。不幸、端艇の一は、本船沈没の際其檣頭に觸れて覆没し、他の一は二十六日朝馬巻島に漕ぎつき、他の一は同日正午過ぎ亦辛じて來陽化に漂着することを得たり。

上村艦隊は此悲慘なる飛報を救護船泰盛丸より得るや、艇隊をして尚ほ避難者あるべきを慮り捜索せしも、何の得る所もあらず、憐れむべき船と人とは空しく海上の藻屑となれる也。是れ國民の堪へ得べからざる痛恨事なりしと雖も、而も何物にも比すべからざる我武人最後の花々しかりし擧動は、日本國民の美質を名殘りなく發揮し得たるもの、國民はこれを看て感むるを得たる也。

第十七章　九連城の占領

(一)　大戰前記

我陸兵の仁川埠頭に上陸してより已に二ヶ月、此間に於いて海軍の提電は頻々として來るにも係らず、陸軍大活動の快報に接せざるは何の故ぞ。乞ふ戰爭以前に當りて、いかに苦楚を嘗めつゝあるかを看よ。

我軍は先づ道路と戰はざる可からず、清韓道路の甚しく險惡なるは、到底邦人内地に在りて想像すべからざる程にして、殊に平壤以北は解氷の爲め泥濘尺餘に及び、輸送の困難は實に名狀すべからず、馬匹の斃死し車輛の破壞せられて道に委棄せらるゝもの、累々相望むべき有樣也、而して斯る道路によりて未曾有の大軍を動かし、未曾有の大輸送をなす、其困難は、いかで食卓の上、机案の下に於いて想像し得る所ならんや。

然れとも我陸軍は斯る困難を排して、行〳〵露兵を壓して遂に鴨綠江岸に達せり。

國民の待ちあぐみし一大快報はまさに來らんとす。然りと雖も有體に云へば、國民は容易に意を安んずる能はざりき。是れ實に陸上に於ける第一回の大衝突なれば也。露國は陸軍の精強を以て久しく世界に鳴るもの、海上の失敗は必ず陸上に於いて償ひ得可しと期し、世界の輿論多く之を信ぜるもの、如し。露國はいかなる犧牲を拂ふも、陸上に於いて勝利を得ざるべからざる也。且つ夫れ我は三個師團の大軍を以て敵に衝るは、今回を以て嚆矢となす、之を水澤錯流して丘陵多く、險隘にして大兵を用ふるに不便なる鴨綠江岸に於いて、十分意の如く運動せしめて錯誤あらざるを得る乎は、頗る掛念に堪へざりし所也。

然れども皆これ杞憂に過ぎざりき。我忠勇なる將士の前には、天險何の値ぞ、狙擊隊コサック騎兵亦何の値ぞ。乞ふ世界の耳目を聳動せる九連城占領大快報を見よ。

（二）河身偵察

鴨綠江は清韓の境を限れる有名の大江にして、時恰も長白群峰の積雪始めて溶け、

河身汪々として海の如し。我軍之を渉りて敵を一掃せんとす。軍を統率するものは、黑木大將也。長谷川、西、井上の三中將に率ゐらるゝ三個師團を合して第一軍と稱す。

敵前の危險を冒して架橋の工を起すに決せしを以て、先づ河身を偵察すべき要あり。是に於いて四月二十二日の午前一時、四名の壯士（少尉碇中三、上等兵古賀清之助、石原金太郎、藤田利助）は、此大任を負ひ闇を傳うて江畔に進み、雪消の水は冷まさに骨に徹せんとするをも顧みず、ザンブと計りに水中に投せり。第一流は幸に水深淺く川幅亦二十米突餘に過ぎざりしが、更に中洲（九里島の一部）を縫うて第二流に至れば水漸く深く、流れ甚だ急也。冷氣渾身に滿ちて知覺を失はんとし、やゝもすれば押し流されて達すること容易ならざりしも、遂に彼岸に至るを得て、偵察の任務を十分に果し、敵の監視線を通過して再び流れに投じぬ。

時に東天まさに明けんとし、漸く人影を認め得可し。敵の歩哨は其監視線を犯されたるを發見し、銃聲は忽ち背後に起り、第二流を渡り終らんとする頃、敵の一丸は先頭の藤田上等兵を射て、遂屍空しく江水に委せり。他の三名は幸に無事歸隊して復命

することを得たり。

(三) 渡河戰、架橋作業

各方面の偵察漸く終りて我軍の部署亦定まる、二十三四五の三日は兩軍對陣の間に暮れて、二十五日の夜に至り、軍司令官黑木大將は全軍に令を傳へ、愈々渡河の方略を授く。其夜も深けて刻は既に二十六日に入れる午前一時頃より、各隊肅々として部署に就く。卽ち近衞師團の一部を以て中流九里島を占領し、第二師團を以て下流黔定島を占領し、以て架橋の地歩を作さしむるに在る也。

九里島の敵兵を掃蕩すべき任務を受けたる一部隊は、攻擊の前夜十二時と共に、一部の歩兵をして豫ねて義州の或る地點に作業せしめつゝある函船を同部隊の集合地に運べり。午前二時一隊の兵は歩武肅々前哨を徹して龍門峴に集合しぬ。龍門峴は元化洞より更に東北に至れる江の上流に沿へるもの、蓋し此日の集合地と定めたる所也。

敵は我軍の動かんとするを認めたるにや、時に銃火を放ちて相警む。我中央縱隊及

左縱隊の前哨歩兵は、弦月西に傾くを待つて暗中渡船に棹さし、中央縱隊の前哨歩兵は元化洞より九里島に押し渡り、左縱隊の方は大なる抵抗に逢ふことなくして、よく目的地に達し得たるも、中央縱隊は午前三時半頃、其先頭渡船彼岸に至り、後續部隊亦方に乘船せんとする刹那、端なくも九里島中の民家に隱匿せる敵兵の發見する所となり、猛烈なる敵火を蒙りて多くの死傷者を出し、後船一隻亦中流に顚覆して溺死者をさへ生ずるに至りぬ。去れど勇敢なる我が將士は毫も屈せず、續々第一江を渡りて九里島に上陸し、午前五時半頃九里島全部を占領することを得たり。

是に於て敵は一名の軍傷者を遺棄し四隻の小船に棹さして敗走せり。時に東天漸く白らみ、江上の樹草人影露の間に隱見せしかば、元化洞の高地に據れる掩護歩兵は於赤島上を逃げ走れる露兵を瞰射して數名を傷け、其の既に九里島を占領せし部隊は更に前方の汀渚に進み、急射擊を以て右岸山脚の道路上に現はれたる應援騎兵を掩護し、以て尠なからざる損害を加へたり。

午前七時頃白馬に跨り。幾多の將校を前後に跟隨せしめたる高等司令部らしき一隊は、九連城より現はれて鴨河を押し渡り、虎山の蔭に隱れたり。此時より一門の敵砲兵は虎山の鞍部に現はれて、最初は元化洞の高地及び義州城内に向つて砲擊せしが、其の砲彈は或は江流に沒し或は山脚を穿ちたるのみにて、我には何等の危害をも加ふること能はず。既にして虎山鞍部の敵砲は射擊方向を轉じて、我が左縱隊に屬する工兵の架橋點に向ひ(義州街道上)射擊を試みたるも、多くは架橋點の前方百餘米突の砂上に落下するのみ。敵は却て我砲兵の爲めに、高等司令部を砲擊せられて軍國長ザスリッチ及び師團長カシタリンスチキーの負傷を見るに至れり。

かくて二十六日の渡河戰に於て、近衛師團の前哨は九里島を、第二師團の一部は黔定島を占領し、之によりて各々江上の中洲の立脚點を確持せり。翌廿七日は對陣の間に經過して、明くれは廿八日、九里島の前哨部隊は近衛歩兵第四聯隊の二箇中隊を鴨綠江の對岸虎山の方面より進め、其一小隊は更に遠く栗子園の方面に出でゝ、敵情を探る。前進少隊が少數の部隊と接戰未だ幾ならざるに、敵は俄に其勢力を增大し、剩さへ鴨

河右岸の砲八門、横さまに我を射擊せしかば、我は大に苦戰となり、多少の損害を受けたるも、元化洞高地に在る砲兵の掩後に依り、黄昏無事前哨線内に復歸するを得たり。此戰はもと小部隊の遭遇に過ぎざるも、我軍が鴨綠江の對岸に至れるは實に之を以て初めとす。又一方軍の右翼なる第十二師團は又此日より上流水口鎭附近に活動を始め、少數の敵を擊退して、午後零時半頃より架橋作業を開始したり。

九連城の總攻擊は五月一日と決定せられたるを以て、軍は遲くも四月三十日の夜中を以て對岸に至らざる可からず。

我軍司令官は廿九日の夜を以て部署命令を各隊に下し、各隊は則ち三十日午前三四時の頃を以て宿舍を引拂ひ所命の地點に進發せり。月は斷雲の間を漏れて光かすけき中を幾萬の豺狼國家の安危を負うて進みゆくさま、何等の悲壯ぞ。東天微かに白みたる頃諸部隊皆所命の地點に到着す、近衛砲兵先づ其一發を虎山北方の丘上に放ち、尋で元化洞の砲兵も亦砲戰に參加し、約四十五分間敵地を掃射す。午前九時十分寂寞たる天地を破つて砲聲二發遙かの下流に轟くを聞く。午前十時十五分敵の歩兵約一中隊、

鏝河を渡り、虎山の山陰を環りて栗子園に通ずる道路の右傍丘陵脈に現はる。之を見るや九里島の我が右翼砲兵及び元化洞の我が砲兵陣地より盛に曳火彈を集注し、敵をして殆んど陣地を占領するの遑あらざらしむ。

敵は一發の銃火を發することを能はずして退却せり。後三十分にして九連城凸角の敵砲兵は作業中の我工兵に向つて曳火彈を注ぎ、更に轉じて黔定島なる我第二師團の砲兵陣地に向ひ猛烈なる射擊をなし、九連城後方丘上にありし敵砲も亦之に參加せり。是に於て我は機を見て徐に猛火を敵の砲兵陣地に浴せ掛け、重砲は榴彈を發射し、野砲は盛に曳火彈を續發せり、江を隔てゝ兩軍相對し、彼我の砲數總て百三十餘門、轟々たる砲聲は百雷の一時に落下せるが如く、囂々たる炸煙は暗雲の東西に去來するにも似たり、壯絶悽絶の光景を示すこと約一時間、敵の砲兵は遂に堪ふる能はずして沈黙するに至れり。

此に於て九里島に出でたる我が近衛工兵は、鐵舟を集めて中江に架橋するの準備をなし、我が步兵の一隊は其の架橋作業を掩護せんが爲めに、九里島より扁舟に乘じて直

に右岸に上陸し、山脚を迂回せる江岸の道路を經て虎山の東方丘陵線に進み、又數名の小斥候は於赤島に出で、午後一時我が近衛工兵は愈々架橋作業に着手するに至れり然れども水流るゝこと矢の如きに加ふるに、楡樹溝にある敵砲兵は其陣地を左方腰溝に進めて、我が架橋點を猛射せるを以て、我が作業意の如くなる能はず。此に於て三ヶ所に據れる我が近衛砲兵は一擊の下此敵砲を撲滅して工兵作業を容易ならしめんと欲し、猛烈なる砲擊を加へて、午後二時過ぎには敵をして全く沈黙せしむることを得たり。かくして夜に入りて九里島より於赤島に通ずる軍橋は鐵舟を以て全く架設せられ了んぬ。

架橋既に成る、今は我軍潮の如くに進むべきのみ。此に於て近衛第四聯隊長梅澤大佐の指揮する一隊は三十日夜より先づ此軍橋を通過し於赤島を經て虎山の山脚に進み、以て敵の逆襲に備へ、之に續いて第二師團の步兵は其の稍上流に架設せし軍橋を經て虎山の背後より鏝河を徒涉し大迂回をなして中江臺の中洲に進み入り、近衛の步砲兩隊は同じく軍橋を通過して於赤島に進み、夜間工兵の架設しつゝある第三江の軍橋完

成するを待て虎山の東方栗子園に通ずる地點に進入し、夜を徹して所命の新陣地に就く。又第十二師團の水口鎭架橋之に先ちて此日拂曉完成したるを以て、夕刻までに悉皆渡河を終りたり。我陣形は是に於いて全く成れり、陸上第一の大激戰は、天明を待つて行はれんとす。九連城頭旭旗飜るの光景は、すでに銃を枕の我兵の夢に入れり。

（四）我軍の總攻擊

明くれば五月一日、九連城を攻擊して我武を耀すべき日とはなれり。

此日の未明に於ける我軍の配置の概要を云へば、第十二師團は四月三十日水口鎭に於いて渡河し、五月一日の早朝栗子園附近の高地を占領し、且つ本軍主力の渡河を援護せり。第二師團は、元化洞附近に集合し、五月一日早曉を以て、虎山より芥河尖に亘る一帶の陣地を占領し、近衛師團は義州東方に集合し、五月一日早朝栗子園と虎山との間を占領せり。而して近衛師團砲兵は、虎山南方の河原に、第二師團は遼陽街道附近に、重砲は第二師團砲兵の左方に陣地を占めたり。斯くの如くにして、九連城の

敵を一掃すべき總攻擊は開始せられたる也。

架橋一たび成るや、我が歩兵は前進徹夜して敵の正面に於ける河岸の配置に就き一方には九里島に在りたる砲兵陣地の虎山北方に於ける高地に移されたるあり。黔定島に在りたる砲兵陣地の何時しか船にて中江臺に移されたるあり、重砲亦前方に進めり。黔定島に在りたる歩兵も亦船にて芥河尖に移れり。虎山以南の配置は、未明に於て既に整へり。虎山以北の第十二師團亦午前四時までに豫定地に達し、主力は宰道子溝、栗子園附近に集められたり。天明と共に見渡せば、河岸に伏せる我兵の黑き一線は、敵壘の正面に横はり、虎山以北は定かに見ること能はざれと、上は夾河口より栗子園までを一團とし、虎山の橋より敵の右翼までを一團とし、延長二里の長きに及びぬ。既にして我が小部隊は行進し始めたり。而も、敵は寂として應せず、稍大なる部隊行進を始むるに及んで敵は漸く砲門を開けり。是に於いて一齊射擊は起り、我が歩兵は次第に展開せり。我が砲兵亦敵壘目がけて砲彈を浴びせかけ、中江臺、黔定島の砲門も虎山高地の砲壘を集射せり。重砲彈の正しく命中して土烟を揚ぐるの狀勇ましとも

また言はむ方なかりき。

敵砲は忽ち沈默したりしも、山上山下の掩壘より打出す銃丸は霰の如くに飛ぶ、一の掩護物なき平地に展開せる我兵は困難云ふばかりなきも毫も屈せず、敵の右翼たる擂鉢山に向ひたる兵は益々前進し、八時十分には既に鴨河を徒渉し了へたり。尋て臀部に達する水を蹴て各隊何れも鴨河を渡り、右翼の我兵は既に擂鉢山の麓に達せり。而も敵は尚ほ依然として動かず、中央より迫りたる我兵は、山の中腹に於て激しく銃火を交換せり。斯かる中に我が三里に亘りたる横隊は、遂に敵壘に達せり。敵頑強よく戰ふと雖も、我兵踴躍戰友の算を亂して斃るゝを顧みず、奮進せるを以て敵始めて退却し、山上に踏止まりて頑強の抗抵を試みたるものも、全く逃げ出せり。是に於て日章旗は高く占領地に飜へされぬ。攻擊を開始してより僅に三時間のみ、我軍の進擊疾風迅雷の如かりし狀想見するに足る。

鴨綠江の濁流、九連城の峻嶺、由來敵の恃みて天險となせる處、之を堅むるに人工を以てし塞壘重疊、歩砲の配備亦之に應へり。聞く戰鬪の前、數日、クロパトキンは馬

車を遼陽より驅りて、具に九連城の防備を査閲し、欣然として曰く、「我に此金城あり、年に亘りて日軍を支ふるを得ん、若し不幸にして我機を失ずる事あらんも、三月の保障は疑ひなし」と、將軍の軍事的慧眼を以て、此觀察をなせる、我軍を蔑視したるか、其統ぶる處の兵數に誇れるか、皆非らず徒に山河を重んじ、武器に依賴して、爲めに機を制するを忘れ、形を尚びて勢を闕に附したるの過誤といはざるべからず。然り斯くの如く信ぜられたる鐵壁は、遂に五月一日僅々數十分の間に旭旗を掲げらるゝの止むなきに至れり。海上の恥辱を雪がんが爲めに戰ひたる此役は、更に陸上の恥辱を得んが爲めに戰ひたるものに外ならざりし也。

一般の戰況は斯くの如し、これより各師團の戰況を分ち叙せざる可からず。

◎近衛師團の戰鬪　愈々總攻擊の開始せらるるや、第二師團九里島の軍橋より迂回して渡河し、九連城の南方に向ひ、近衛師團は虎山方面に續々進行し、中溝臺沿岸にも砲列を進め、天未だ明けざるに鴨河より鴨綠江本流に及び、九連城の對岸一帶に瀰蔓するに至れり。午前五時我軍より砲火を挑みたるも、敵は之に應せず、而して近衛

の斥候が虎山村より、鴨河を徒渉して對岸に及び、敵兵のあるを知るや、敵も始めて砲火を開き、兩軍銃砲の聲等しく起れり。時に近衛師團司令部は虎山村後方の高地にありき。斯くて兩軍の交戰約一時十五分にして、近衛師團は鴨河を徒渉して續々對岸に馳せ登り日章旗を押樹て、第十二師團は其の上流より、第二師團は南方安東縣街道に、何れも潮の湧くが如く敵地に登ると等しく萬歲の聲盛んに起れり。

◎第二師團の戰鬪　四月三十日全師團悉く蘭子島に達し、赤裸々の身に劍を横へ、對岸に泳ぎ渡りて敵情を視察し、苦心慘憺物音を竊みて漸く夜の明くるを待兼て、曉霧に乘じ、第十六聯隊先づ渡河を始めたり。敵は之を知らざるもの丶如くなりしが、一二大隊が江の中央に達したる頃、敵は俄然大砲小銃を亂發射擊し、一時は面を向くること能はざりき。而も勇猛なる東北男子は毫も屈せずして渡河進行し、全身びしゃ濡れとなり、何等の掩蔽物もなき白砂の上を倒けつ轉びつ宛然土饅頭の如くなりて多數の死傷者を出しながら、大膽にも九連城の正面擂鉢山附近に取つき猛烈に突貫したるを以て、敵は遂に支ふること能はずして退却し、九連城一帶我軍の占領に歸し、城頭高

く旭旗を見ることを得たり。此戰鬪の如何に猛烈なりしかは先頭第十六聯隊のみにて十萬四百九十一發の銃丸を發射したるを見ても知るべし。而して其死傷者約三百餘名に上れり。蓋し最困難の地を攻擊せるが爲めなる也。

◎第十二師團の戰鬪　五月一日午前二時頃より第十二師團は運動を開始し、四時までに全く豫定の陣地に到着し、午前七時頃に至りて近衛師團方面及第三師團方面の砲聲盛に起ると同時に第二十四聯隊を先頭として各兵四縱隊となり、淺きも腰を沒し深きは肩に及ぶ鴨河の流れ四百米突を突貫の勢にて徒渉せり。光景の壯烈名狀すべきものあらず、敵見て大に驚き、狼狽して前面の嶮岨なる山間及び九連城方面に逃走せり我が各隊は猛烈の勢を以て敵を追擊し高地を占領したるが、右方石城に於て敵は頑强の抵抗をなし、第二十四聯隊第三中隊は最も苦戰しつ丶も急激なる突貫をなし、權藤大尉以下二十餘名の負傷者を生ずるに至れり。而して敵は遂に陣地を守る能はず、退却して鳳凰城街道を扼せんとし、却て佐々木旅團の迎擊する所となり、蛤蟆塘に逃走せり。敵は九連城西北高地に於て再び抵抗を試み、以て是日の午後一時五十分に至り

ぬ。而して軍の右翼第十二師團は大樓房に、中央隊近衛師團は蛤蟆塘に、左翼隊第二師團は安東縣に向ひ、軍の總豫備隊は遼陽街道を前進し、午後六時に至り、我が軍は安東縣より老古溝を經て梨樹溝に亘る線を占領したり。其中蛤蟆塘附近にては三面より敵を包圍して最も激烈なる戰鬪をなせり。

(五)　蛤蟆塘の追擊戰

蛤蟆塘は四面丘陵高峰を以て圍繞されたる楷鉢の底の如き地形也。之に追ひ込まれたる敵は、退路を發見すること能はざるに至れるを以て、遂に死を決して猛烈なる抵抗を試みたり。石城以來追擊し來りし木越旅團の第二十四聯隊第十中隊第十一中隊第五中隊は、猛烈なる勢を以て先頭に進み、鳳凰城街道上の丘陵に三個中隊殆ど一列に陣を布き、以て銃擊を開始し、將に敵を塵殺せんとする一刹那、我が第二及第衛師團に擊破せられ、退潮の如き勢を以て此街道を敗走し來りたる敵の大部分と、端なく此處にて遭遇し見る間に激戰となり、敵は全く逃路を扼せられたるを知るや、死物狂ひとなり、獅子奮迅の勇氣を奮ひ、又驚く可き機敏を以て馬に曳かせ來りし大砲十門を(前に四門後の小高き處に六門)見る間に目と鼻との短距離にて陣地を布き、百雷の一時に墜ちたるが如き勢を以て我が先頭の三個中隊を砲擊し、且つ數千の兵も忽ち展開して銃火を交へ、先頭の三個中隊は意外の所にて非常の窮地に陷りたり。而も我軍は泰然として隊形を紊さず、彈丸の有らん限りを打ち盡し(一人に付き約五百發以上を打てり)火藥の爲に各兵士の顏面黑硝の如くなりながら、尙一歩も退かざるのみならず最も勇敢なる第五中隊は中隊長大尉牧澤赳夫の嚴令に勇み立ち、約五六千米突に突擊を試み、前面の一小丘陵を占領したりと思ふ折しもあれ　左方の高き峰の上より(第五中隊の外二中隊の陣地に小松繁り居りて敵の後方に現はれたるを知らざりし)約一千五六百とも覺しき敵兵、猛烈の勢を以て手に〳〵銃劍若くは手鎗を携へ眼下の小丘を見掛け驀然として殺到し來り、加ふるに哥薩克兵數百騎亦我軍の後方に廻りて我が三個中隊を包圍せんとせり。是に於て我が二個中隊は先づ巧みに崖により敵の猛勢を避けて射擊したるも、第五中隊は此の前後に牧澤大尉始め各將校兵卒の半ばを失ひた

れば前面の小丘を退き、後方の丘陵に歸らんとせし時後方より來りたる敵の突貫隊と丘と丘との間なる窪地にて端なく衝突し、劍々相磨し銃々相接し、格闘劍擊入亂れ一時殆ど敵味方を見分け難き有樣なりき。遂に第五中隊殆んど全滅の悲況を見んとしたるも、第十中隊及第十一中隊の掩護其宜しきに適ひ、且木越旅團長時もあらせず攻め寄せければ、敵兵忽ち大包圍の内に陷り、突貫隊は殆ど全部戰死、若くは捕虜となり我軍も亦二百餘名の死傷を生じ、伏屍累々として實に目も當てられぬ悲慘の光景を呈したり。

斯くの如くにして漸次大部隊の敵は、高地の頂上を越えて逃げ失せたり。而して恰も此敵の動搖を始めし時と相前後して、最初我左側面に近衛師團の追擊隊顯はれ出で此高地より斜めに敵を打ち下し又第二師團の追擊隊は鳳凰街道の南側近衛の左翼に出で、最後迄頑强に抵抗せる敵兵を三面より包圍したるが爲め、遂に頑强なる敵兵も、茲に至て全部總崩れとなり、蛤蟆塘西南の高地を越えて潰走せり。我軍は好機逸すべからずとなし、近衛師團は敵の右翼、第十二師團は敵の左翼方面に突擊し、右翼の近

衛は背後に迫りし爲め、敵は銃砲彈藥輜重軍輜を悉皆遺棄し、唯身を以て免れたるが、此時逃げ損じたる敵兵は、高地の澤に逃げ隱れ、後に至つて自ら降を乞うて出でたり。此戰は午後一時半に始まりて五時半に及ぶ、四時間は實に近世戰史稀に看るの一大血戰にてありき。

九連城の戰は、敵は初めより堡壘に據り我を迎へ擊ちたるものなれば、損害は甚だ多からざる可き筈なるも、我軍の攻擊猛烈なりし爲め、死傷八百の上に出で、師團長カシタリンスキー及び狙擊歩兵第十一、第十二聯隊長等戰死し、軍團長ザスリッチ中將亦負傷し、捕虜は三百三十名の多きに至れり。我死傷約八百追擊によりて二百を增せり。形勝の地に防禦の陣地を占めたる敵軍を攻擊するに於いて斯くの如きの損害は、寧ろ意外の少數と云はざるべからず。これ我軍の勇敢なるよく非常に快速なる戰闘を爲したるが爲めなるべし。吾人は、我第一軍司令官黑木大將、長谷川、西、井上三師團長の作戰計畫よく其機宜を得たるを特記せざるべからず。

五月二日を以て優詔第一軍に下る、

鴨綠江ハ敵ノ恃ミテ以テ天險ト爲ス處我第一軍及ビ之ニ參加シタル海軍支隊ハ計畫周到克ク其施行通過ヲ全クシ大ニ敵ヲ擊破セリ

朕深ク之ヲ嘉ス惟ニ爾後ノ掃蕩ハ勤勞倍々大ナルベシ汝將校下士卒奮テ勉勵セヨ

（六）海軍の陸兵掩護

第一軍に賜はれる優詔の中、特に海軍支隊の功を賞せらる。蓋し海軍の此役陸軍を掩護せる所少なからず、左に之を叙すべし。

鴨綠江一帶の地は、敵が防備を盡して我軍の進路を阻碍せひとする要害にして此の地に於ける戰鬪は戰局の未來に一大關係を有するものなれば、我海軍は海軍少將細谷資をして別に一艦隊を統率せしめ、以て鴨綠江邊に於ける我第一軍を援護するの任務に從事せしめたり。

高橋海門艦長は細谷司令官の命に依り、海軍中尉山口毅一に下士卒五名を附し、朝鮮漁舟に乘せしめ、鴨綠江邊の敵情を偵察せしめたり。此の一行は四月十日鴨綠江右岸より支那漁舟に乘じて龍巖浦西南約千五百米突の海岸に上陸せひとする七名の露兵を發見したるを以て、山口中尉等は、是れより先、既に左岸に到着して此の狀態を諦視しつゝある我騎兵斥候隊と水陸力を協せ、陸よりは騎兵二分隊を以て捕獲を努め、海軍は海より舟にて敵の退路を絶たむとせしに、敵は早くも退却を始めたるを以て、我は直に之を射擊せり。此の敵は變裝したる騎兵にして、監視の任務を帶びたるものゝ如くなりき。此の時敵の騎兵十數名は前面の中洲に在り、大漁舟に乘じて敗兵を收拾じ且つ戰ひ且つ退きつゝあり。山口中尉之れを追擊して右岸に抵りしに、敵は上陸して逃走せり。此の交戰は一時二十分に亘り、敵の死傷は、戰死一、負傷二、我れに一人の死傷なし。此の外變裝したる敵兵は、義州龍巖浦にて頻りに渡河を企てしも皆之を擊退せり。

斯くて鴨綠江の對戰は間斷なく行はれたり。摩耶艦長は細谷司令官の命を受け、四月二十五日分遣隊をして鴨綠江を遡航せしめたるに敵の野砲隊は、龍巖浦の對岸遠距離の處より發砲したるも中らず。然るに江の中洲陸上には敵の騎兵散在し居たるを以

て我が分遣隊は之れに發砲したるに、敵は直に遁逃せり。翌二十六日敵の騎兵約百名我が小蒸汽艇に向ひ發射したるを以て、第六十九號水雷艇は之れに應戰し、敵は多數の負傷者を殘して山背に退却したり。同日午後五時敵は安子山方面より其分遣隊に向て發砲し、我れ亦之れに應戰したるに、午後五時五十三分に至り、敵は沈黙せしを以て射擊を止めたり。此の戰我れに一の損傷なし。

既にして二十七、二十八、二十九の三日間は架橋及び進擊の準備に消過せられ、而して三十日は、九連城總攻擊の豫定運動を開始するの日なりしを以て、摩耶艦長の率ゐたる分遣隊は、鴨綠江下流の敵を牽制するの目的を以て、二十九日午前八時出港し、約一時間再び威嚇砲擊を爲し、午前十時五十五分錨地に歸れり。又裝砲艇隊は娘々城より北西約三里に在る三道浪頭に於て、敵兵約百五十名を發見し、之れに向て砲擊せしに、多數の死傷を殘して山背に退却せり。尋で翌三十日復た出でゝ威嚇砲擊を爲し敵も應戰して砲火を交換すること二時間に亘れり。又砲裝汽船は、安東縣下流に進み敵の步騎兵約四百と近距離に於て激戰すること一時間に及べり。

三十日には第一軍の各部隊悉く渡河を了へて、翌一日愈々九連城の總攻擊に着手したるを以て、摩耶艦の分遣隊は、一日午前九時を以て鴨綠江を遡航し、摩耶艦は安子山方面、宇治艦は六道溝附近の威嚇砲擊を爲し、又水雷艇は四道溝を遡航して威嚇砲擊を爲し、將に歸航せんとするの時、案子山北東の山腹より突然敵砲隊の激烈なる射擊を受け、應戰約二十分にして敵を沈黙せしめ、午前十一時半龍巖浦に歸れり。又た裝砲汽船は、三十日の夜、四道溝の上流に到り、約三十分威嚇砲擊を行ひ、翌一日午前一時歸航して、同日午前九時三十分再び江を遡りて安東縣の下流に到り、敵の步兵及砲兵と約三十分激戰の後敵を退却せしめ、安東縣市街に火災の起るを見て午後二時歸港せり。斯くの如く鴨綠江に於ける細谷艦隊の行動は、我第一軍の渡河前進を全くせしむるに於て大なる援護なりし也。

第十八章　第一軍鳳凰城を占領す

日清の役、九連城に次いで鳳凰城に激烈なる戰鬪ありし事を記憶する者は、敵は必ず此地を以て第二防禦線となし、力を盡くして我軍を支ふるならんと期せりき。而も九連城の大敗頗る烈くして相距る僅に十五里なる鳳凰城に於いて、到底敗勢を立直し得べきようなく、我一部隊の攻擊に會ひて忽ち潰走せり。

九連城大戰後一日を隔てたる五月三日、由上騎兵中尉以下十四騎より成れる將校斥候は早くも湯山城に入れり、敵騎十五六名悪崖を後ろにし拳銃を構へて我を待つ、中尉奮進して激烈なる戰鬪を交じへ遂に敵をして鳳凰城方面に敗走せしめたり、我は逃ぐるを追うて更に遼陽街道を進み、終に高麗門の東南約一里に在る淵川の線に達せり。

由上中尉の一隊が進軍の途中土人に付て知り得たる所に據れば、五月一日（九連城大戰の當日）敵の歩兵約二千、潰亂して遼陽街道を北走し辛うじて湯山城に至るや日既に暮れて追擊するものなし、衆始めて蘇息し前哨を設けて自ら警戒す、偶ま曖河

右岸の敵守兵亦敗れて河岸に沿ひ湯山城方位に退きたるもの三百餘、山徑を傳うて湯山城南方の高地に現はる、兩者互に味方なるを知らず、見て以て日本兵到るとなし高地の敗兵先づ銃火を開きて湯山城の敵を射擊し、湯山城の敗兵之に對して應戰し、接戰四時間の後高地の敗兵潰走四散す、湯山城の露兵進んで高地に突入すれば、奚ぞ知らむ山上露兵の死屍百餘を數へ一軍爲めに啞然たりきといふ。

此一事敵兵狼狽の狀のいかに甚しかりしかを推知し得べし。當時敵の情形を案ずるに、其主力は勿論九連城附近に在りて、鳳凰城には多くも三千以上の兵力を殘さゞりしが如し。然れども其兵の多少に拘らず、敵が鳳凰城を以て後方の一要地とし、若干兵力を止ひる以上、當に前面戰列との交通連絡を保持すべきは言を俟たざる所。味方の敗兵を誤認して同士打をなす如きは、要するに連絡の極めて不充分なりしを暴露せるに外ならざる也。

越えて三日、五月六日に至り、我一騎兵斥候は更に進んで鳳凰城に迫り、其東北に於て敵の騎兵を襲擊し、死者三、傷者數名を生せしめたり。同日我騎兵は更に二拳子、

三臺子、四臺子の敵を擊退し、鳳凰城の附近一帶を廓清しぬ。而して我歩兵の一部隊は此日を以て事なく鳳凰城に入り、全く之を占領せり。鴨綠江を渡りて實に僅に五日。

而して鴨綠江畔の一敗に氣死し膽落ちたる敵兵は、又鳳凰城を固守する勇なく、我兵城に薄ると同時に、倉庫、火藥庫、彈藥庫を燒き、退却を始めたり。蓋し彼等は初より退却を豫期し居たるに相違なきも前日來の紛雜混亂の爲め、此等貴重の兵器をさへ始末するの時日なかりしものなるべし。報告に據れば、遼陽街道の民家は多く敗兵の爲に焚燒せられ、光景轉た荒涼を極むといふ。又退却途上に人馬逃走したる衛生材料を發見し、我は之を收容して彼我傷者の治療に用ひ、逃後れたる數名の敵衛生部員は其の哀求に任せ、舊戰友の治療に任せしめたり。而して七日以後に至るも、多數の敗兵續々として森林村里の間より出で來り、我軍に投降するもの引も切らず。土人の言に依れば、去二日擔架にて鳳凰城を通過せる敵の負傷者は約八百なりしといふ、此一事により九連城に於ける敵の損害は少くも三千を下らざることを知るに足るべし、敵軍の潰敗如何に甚しかりしか、亦云ふを要せざる也。

第十九章　第三回敵港閉塞

我第一軍は、滿韓境上の敵兵を一掃し、まさに潮の如く滿洲の野に進み入らんとす、これと相呼應して第二軍は金州半島に上陸して、一大活動を試むることとなり、同時に旅順附近の海上を絶對に安全ならしむるの必要に迫れり。蓋し曩に二度び危險を冒して敵港の閉塞を企てしも、未だ全き成功を見ること能はず、而して敵旗艦沈み敵司令官死し、旅順艦隊は大打擊を蒙れりと雖も、尚ほよくその戰ひ得るもの幾隻を數へ得可し。此時敵港を距る遠からざる海上を運送船の織るが如くに往來するは、危險少なからざる也。こゝに於いて又もや大膽なる敵港閉塞の議は成れり。

此度は、奈何に大なる危險を冒すも、いかなる高き犧牲を拂ふも、必ず完き成功を見ざれば已むべからず。即ち第一回には五隻、第二回には四隻の運送船を送りしに反し、今回は規模を大にし、遼江丸、相模丸、三河丸、及び佐倉、江戸、小樽、愛國朝顏、長門、新發田、釜山、小倉丸の十二隻を送くるに決し、内三隻は探海燈を點ず

べき任務を帶び、同時に第三回決死隊は組織せられたり。此時進んで決死隊に入らむと欲じたるもの二萬を超ゆ。彼等は閉塞行爲の慘烈を極むるは、何人よりも多く知る者也。而も自ら進んで此に加はるを望むこと斯くの如し、何等の壯烈ぞや、我軍人の難に遭うて益々奮ふの狀を想見すべき也。斯くて九連城占領の翌日たる五月二日を以て、壯途に上れり。

閉塞船掩護の任務を負へる艦艇列を正して先づ發し、岫部腹部艦部の三箇所に一より十二までの番號を記したる閉塞船之に從ひ、探海燈を裝置したる三隻を前列とし、東郷司令長官の信號に對して、閉塞船隊員より「成功を得ざれば生還せず」と悲壯なる答をなし勇ましき軍樂を交換しつゝ隊伍整々として、午後六時に根據地を出發せり。閉塞船遠江丸は海軍少佐本田親民之を指揮し、江戸丸は海軍大尉高柳直夫之を指揮し、佐倉丸は海軍大尉白石馀江之を指揮し、愛國丸は海軍大尉大塚太郎之を指揮し、朝顔丸は海軍大尉向菊太郎之を指揮し、相摸丸は海軍大尉湯淺竹太郎之を指揮し、三河丸は海軍大尉匝瑳胤次之を指揮し、小樽丸は海軍大尉野村勉之を指揮し、海軍中

佐林三子雄全閉塞隊の總指揮官たり。而して之が掩護艦赤城は海軍中佐藤本秀四郎之に艦長たり、鳥海は海軍中佐岩村團次郎之に艦長代理たり。又同じく掩護隊たりし第二驅逐隊は海軍中佐石田一郎之を司令し、第三驅逐隊は海軍中佐土屋光金之を司令し、第四驅逐隊は海軍中佐長井群吉之を司令し、第五驅逐隊は海軍中佐貝野巖次郎之を司令し、水雷艇第九艇隊は海軍中佐矢島純吉之を司令し、第十艇隊は海軍少佐大瀧道助之を司令し、第十四艇隊(鵲、眞鶴を缺き、第六十七號艇第七十號艇を加ふ)は海軍少佐櫻井吉丸之を司令したり。

五月六日の午後六時、閉塞隊は本艦隊に別れて旅順に向ひ、肅々として其進行を續けたりしが、何等の不幸ぞ、午後十一時に至り一陣の强風卒然として東南より吹起り、波濤甚だ高く、列次意の如くなる能はず、之が爲め閉塞船隊は忽ちに離散して、全く相失ふに至りぬ。是に於いて閉塞船隊指揮官たる林中佐は、到底艦隊集合の見込なきを認め、其成功を危ぶむの餘り、命を下して閉塞事業を中止せり。而も其信號は多く通せざるより、林中佐は通信に盡力して翌三日の午前二時頃までに漸く長門丸、新發

田丸、釜山丸、小倉丸、の四隻をして事業中止の信號を認めしめたりと雖も、他の閉塞船は毫も之を知るを得ず、午前二時頃既に相前後して旅順沖に達し、中にも最も先に進みたる亟磋大尉の指揮船三河丸は、港外に偵察しつゝありたる第十四艇隊に對し、敵の開始したる砲火を認め、各船早くも港口に突進したりと思惟し、乃ち全速力を以て港口に邁進せり。而して白石大尉の指揮船佐倉丸と覺しきもの之に次ぎたり。是時敵は港口附近に敷設し置きたる視發水雷を發火し、同時に增設したる三十浬の探海燈七基其他を以て強力なる探照を加へ、猛烈なる砲火をあびせ掛け、防禦最も努む。然るに三河丸は、敵の豫て設け置きたる港口防材の一部を破壞して尙奥深く水道へ闖入し、前二回には未だ達せざりし中央の好位地に投錨して爆沈せり。之に次で、佐倉丸と思ぼしきは港口尖岩の附近に投錨して沈沒し、引續き本田少佐の指揮したる遠江丸、高柳大尉の指揮したる江戸丸、野村大尉の指揮したる小樽丸、湯淺大尉の指揮したる相模丸、犬塚大尉の指揮したる愛國丸、向大尉の指揮したる朝顏丸、亦港口を指して猛進す、時に敵の防禦砲火猛烈の極度に達し、敷設水雷の爆發前後左右に相續き、閉

塞隊員の戰死するもの續出するに拘らず、各船何れも勇進して屈せず、其中遠江丸は先づ港口の防材に衝突し、船首を東にして其位置に爆沈し、殆ど港口の半部を塞げり。江戸丸は港口に達したる際高柳指揮官戰死したるを以て、指揮官附中尉永田武次郎代て投錨爆沈せしめ、小樽丸相模丸と覺しきもの亦港口に入りて沈沒し、愛國丸は港口より約五鏈の所に於て敷設水雷に掛りて瞬間に沈沒し、指揮官附中尉內田弘、中機關士青木好次郎以下八名の踪跡を失せり。又朝顏丸と思ぼしき一船は、港口に達せずして舵機を損じたるもの、如く終に黃金山下に爆沈したり。是れ五月三日午前三四時の交也。かくの如く慘絕なる光景なりしを以て我が損害甚しく全閉塞員の半は戰死若くは行衛不明となり、中にも小樽丸、相模丸、佐倉丸、朝顏丸の四隻の閉塞員に至つては、一人の收容され歸りたるものなかりき。

當時の壯烈凄慘なる光景に至ては到底想像の及び得る所にあらず、各閉塞船愈々沈沒せんとする時、指揮官が第一の號令を發するや、閉塞隊員は大鐵槌を以てキングストン（軸部に裝置せる管にて船體を沈沒せしむる時之を破壞す）を破壞し、其れより第

二の號令を以て綿火藥に點火したるが、大鐵槌にて沈沒管を打つ音は敵の砲聲と相和し、破壞せられたる沈沒管よりは、恰も百鯨の一時に水を吹くが如く潮水空中に奔騰し、或は敵彈トンキポイラーに命中して盛に蒸氣を吹きて噴出し、或は敷設水雷の前後左右に爆發して濛々たる白氣を揚ぐ、而も我兵は間斷なき砲聲と爆聲と強烈なる彈硝の間に立ちて、神色自若、從容として其任務を行ひ、殊に船體の沈沒する時總員艦部に集まりて萬歲を叫びたるが如きは、蓋し世界の歷史に於て前古未曾有なるべし、閉塞の翌日旅順より逃げ來れる某支那人が芝罘に於て語りたる所を聞くに『閉塞艦隊の突進中露軍は四方より大砲小銃を亂射し視發水雷、機械水雷を爆發せしかば、殷々轟々として火焰天を焦し、將士奮鬪の狀歷然として觀戰者は自ら四肢戰慄し膚に粟を生じたり』と。彼れ又曰ふ『此戰は二月開戰以來の最も凄惨猛烈なる決戰にして、日本將士は一時より五時に至るまで、狂風怒濤を冒し、砲火と水雷の中に苦戰奮鬪して、能く閉塞の目的を達したる勇氣は、露軍將官の膽を寒からしめたり』と。

これ僞らざるの言なるべし。世界古今の大小戰鬪幾百千回、然かも海戰ありてより以來、此の如き猛烈の事蹟は決して史上に類を見る能はざる所也。吾人は今何の辭を以て吾勇士猛將の上に加ふべきかを知らず。日本武人の精華は實に前後三回の閉塞事業によりて遺憾なく、否寧ろ歷史ありて以來の最高度に發展せられたるものといふべき也。

第三回の閉塞事業は、此くの如く慘烈を極めたるものありしより、之が掩護收容の任務を帶びたる艦艇の奮鬪苦心も、亦決して尋常一樣にてはあらざりし也。此等の艦艇は、善く一方に猛烈なる敵の砲火と戰ひ、洶湧せる風波と鬪ひつゝも、一方に閉塞隊員の收容に從ひ、以て翌朝に及び、就中水雷艇隊の如きは、近く港口に接近して閉塞員の約半部を收容し、之が爲め中尉平兵雄の艇長たる第六十七號艇の如き、敵彈に氣管を破られて六十三名の負傷者を出し、一時敵前に進退の自由を失ひ、儻に大尉森本義寛の艇長たる僚艇第七十號艇に曳れて歸り來りたる程なりき。其壯烈想ふべき也。又第九艇隊司令中佐矢島純吉の艇長たる荼鷹の如きも、左舷機を敵に傷けられ、卒一名戰死し、隼艇にては下士一名戰死したり。而して第三戰隊は、三日午前六時旅順口

外に至り、第一戰隊は同日午前九時に亦來りて、驅逐隊及び水雷艇隊を掩護して午後四時に至るまで濛々たる海霧の中を搜索し、以て閉塞員の收容に力めたるも、竟に得る所なかりき。而も此收容に洩れたる者のうち、進んで陸上に突擊せる者少なからざるが如し。一實見者は我兵十名虎尾半島に上陸し、他の十二名は黃金山の牧猪礁に上陸して、奮鬪の餘一名も餘さず戰死したるを云ひ、又他の一實見者の談は日本人四五十人黃金山の東南釣魚臺に上陸して一名も殘らず戰死せるを傳ふ。眞乎、眞乎。日本の軍人は徒爲にして死するものにあらず、是れ蓋し誤らざるの事實なるべき也。然れども海戰史上稀に看る悽絕慘絕の此擧は、我に在りて十分なる報酬を得たり。いかなる場合にも謙讓なる、東鄕司令長官が『八艘の內五艘は港口に入りて爆沈せしを以て、港口は少くとも巡洋艦以上の通航に對し、充分閉塞せられたるものと認む』といひたる如く、閉塞は成功せり、確に成功せる也、勇士の骨空しく埋められず、其血徒に流されず。前古未曾有の大業は終に成就して敵は全く港口を閉塞せられ了りたる也。

陛下は七日を以て優詔を賜はる。

聯合艦隊ハ三タビ旅順口閉塞ノ壯擧ヲ行ヒ猛激ナル敵ノ抵抗ヲ排シ其目的ヲ達セリト聞ク朕倍々其事ニ與リタル將校下士ノ忠烈ヲ嘉ス

第二十章　第二軍の金州半島上陸

(一)　敵前上陸

敵港の閉塞は成功せり、之れと伴ふものは、第二軍の金州半島に於ける活動ならざるべからず、果然、閉塞成功後僅に三日、我大軍は金州半島に上陸せり。第二軍の上陸は第一軍の如く敵なきの地に上陸せるものと異り、所謂敵前上陸の危險を冒さゞる可からざれば、これが先驅として海軍陸戰隊の力を待つべきこと日清役の當時に同じ。是に於いて、海軍大佐野元綱明に率ゐらるゝ水兵幾千名は、日本丸、香港丸に乘じ、四月二十七日夕陽まさに波を彩るの頃を以て、佐世保を發せり。そのまさに港門を出でんとするや、哨艇より「光榮を羨む」、「汝等の成功を祈る」と信號すれば陸戰隊も亦「誓て成功せん」と信號し、針路西北を指して遙に雲水の間に沒し去りぬ。

五月四日、片岡海軍中將の率ゆる第三艦隊は豫定の如く行動して集合地を離れ、翌、五日、其の第七戰隊及び第二十水雷艇隊は、細谷司令官の旗下に屬して、愈々遼東半

島の前進根據地に着す。時に午前五時三十分。夜色漸く淺く、曉風征衣を拂うて寒し。晩を放つて遙に荒涼たる陸岸を眺ひれば、大兵の我上陸を妨害せんとする氣勢は一向見るべからず、唯敵の監視兵らしきもの數名、丘上に散在するあるのみ。我第七戰隊は直に之に向て砲擊を加へたるに敵は周章狼狽して、忽ち內陸深く逃げ行きたり。此に於て細谷司令官は其の伴へる日本丸、香港丸の二船に令を傳へ、直ちに野元大佐の率ゆる陸戰隊をして遼東半島に向て第一の上陸を爲さしむ。此日天氣快晴時恰かも干潮に際し、遼東特有の淺沙深さ僅に數呎、到底短艇を通ずる能はざるを以て、各兵皆跳て身を水中に投じ水深膝に達する所約一千米突を徒涉して終に陸岸に達し、衣を振て直に前進を始む。然れども敵は既に我兵威に怖れて在らず。我は遂に一彈を發することなく高地一帶の地を占領して日章旗を其頂上に樹つるを得たり。金州の地！當年我幾千の將士の屍を塡めたるの地、我國民をして悲憤の涙抑ふる能はざらしめたる地は、十年を隔てゝ又我陸戰隊の第一足跡を印したる也。此間第七戰隊の一部たる大島、鳥海、愛宕の各艦は上陸地點の側面を牽制し、赤城は陸岸なる敵兵百餘名を擊攘して、

其二三を銃せり。

是より先き第二軍の先發は片岡第三艦隊に援護せられ運送船に搭乘して梯團を作り、やゝ沖合に碇泊し、以て陸戰隊の任務の終るを待てり。やがて午前八時五分丘上の旭旗飜々として海風に飜るを見るや、陸軍運送船第一梯團も亦直に揚陸を開始し、等しく深水を冒して最も活潑に上陸せり。之と同時に海軍兵は迅速機橋の架設に着手し、以て後續部隊の揚陸に便する等、應急機敏の動作毫も遺漏なく、陸兵は之に依りて多々益々揚陸の快速を加へ、敵前上陸の一業も着々進行するを得たり。此に於て陸戰隊は任務既に盡きたりとなし、則ち其占領地を陸兵に引渡して再び香港、日本の兩船にて引還へせり。

此くて我第二軍の一部は豫定行動の第一難關を踰え愈々遼東半島の一角に確然なる地歩を占め、以て遙に鳳凰城の第一軍と相對せり。由來敵前上陸は兵家の最も困難とする所にして、敵亦死力を盡して我を拒斥せんとは中外の齊しく豫想する所なりしに、敵は全く影を潜め、殆んど無人の地に上陸するが如くなりしは全く意外とせし所にして海軍陸戰隊の如きは豫め敵前上陸の危險なる性質より打算して、必ず多數の死傷者あらんことを覺悟し、病院船西京丸神戸丸の如き特に尋常設備以上に傷兵を收容するの準備をなせる程なりき。

(二) 上陸劈頭の活動

我上陸軍は金州半島に其第一歩を着くるや、直に敏速なる活動を開始し、翌五月六日を以て其一枝隊は遼東灣の方面普蘭店に、他の一枝隊は黃海の方面貔子窩に各々道を分ちて派遣せらる。蓋し前者は鐵道及び電信を破壞して、旅順要塞と敵の策源地との交通を斷絶するを目的とし、後者は黃海海岸に沿へる電信を破壞して是れ亦敵の交通聯絡を斷絶するの任務を有する者なり。而して此一舉にして成功せば旅順は全く孤立して後方の連絡を失すると共に、我上陸軍は其對敵戰略上茲に其一大目的を果たすを得るものなり。其任重くして關係する所亦甚だ大也。

普蘭店の地たる我上陸地點を距ること目睫の間にあり、此を以て我軍は上陸開始後

二十四時間を隔てたる五月六日の午前八時、其先頭枝隊をして早くも其附近に殺到せしめぬ。士馬踴躍して普蘭店に近づく頃、其南方の高地に於て敵騎七、歩兵若干の出發せるを發見す。即ち直に銃火を開きて之に向ふ。敵支へずして、退却を始めたるを以て、我軍は一氣直に普蘭店に進入し、更に進んで其西南方なる鐵道停車場に至れば、約一百名の敵兵停車場を占領して之を防守せるを見る。乃ち又一擊の下に之を敗退せしめて難なく停車場を占領するを得たり。此附近にありし敵兵は歩兵二三百、騎兵一百に過ぎざりしるのゝ如し。彼の損害は詳ならざれども、我は敵の歩兵一名を虜にしたり。而して吾軍の失ふ所、戰死兵卒一名、重輕傷四名に過ぎず。

普蘭店に向ひし吾枝隊は停車場の敵を擊退して之を占領すると同時に、鐵道線路に沿うて工兵將校を分派し停車場の南方に於て鐵道橋を破壞し、且つ電信を切斷せしめたり。我第一の任務は此にて終了し、旅順の敵は見事釜中の魚となり了りぬ。

一方電信線破壞の目的を以て貔子窩に向ひし他の一枝隊は、何等の抵抗を受くることなく、電線を切斷して是亦難なく其目的を達したるが、當時敵は既に同地に在らず。

土民の言に據れば、此方面に在りし敵は約二百騎に及びたるも、五日朝倉皇として西方に向つて退却し、貔子窩電信通信所の諸機械は悉く之を持去れりといふ、蓋し五日朝に於ける我軍上陸の報に接し、風を聞て先づ潰走したるものなるべし。東西の二電線及び鐵道は此くして我軍上陸後僅に一日を以て、全く我の破壞斷絶する所となれり。

第一回の鐵道破壞隊が其目的を達して歸還せる五月七日、我軍は更に一枝隊を普蘭店三十里堡の中間に出だし、之に命するに交通機關破壞の任務を以てせり。枝隊は即ち七日午後を以て出發し、五月八日三十里堡の東北方一里半なる龍口附近に達す。敵兵約一百之を死守す。依て直に銃火を開き午前八時半より十一時に亘る劇戰二時半の後之を擊退し、同所附近に於て鐵道を破壞すること二ヶ所、此の延長二吉羅に及ぶ。此戰敵は最も頑強の抵抗をなし、爲に我は中尉以下百名の死傷者を出すに至れり。三十里堡は金州の北方約五里、普蘭店より六里强の地點に在り。吾軍の鐵道を破壞したるは其北方一里半の所なるを以て、則ち普蘭店の南方三四里に在るべく、敵の鐵道は

茲に幾個の斷片となりて全く其用を爲さゞるに至れり。翌えて四日、卽五月十二日に至り、我一枝隊は更に少しく方面を變じて普蘭店の北方約六里なる瓦房店に至るまでの敵情を搜索し、兼ねて三たび鐵道を破壞し、電線を切斷せり。枝隊の報告に依れば普蘭店附近には敵步兵約三百騎兵約五十駐屯し、別に一隊廿名位づゝの監視兵所々に配置せらるといふ。蓋し敵は一たび普蘭店を擊退せられたるも、去る七日我第一回鐵道破壞隊の歸還せる後に於て、更に一隊の兵を此地に派したる者なるべし。

かくて五月十五日に至るや、更に二箇の新運動を始めたり。卽ち七名より成る騎兵將校斥候の一隊は、第二回鐵道破壞の地點たりし龍口より東北約半里なる五十里堡に於て敵と衝突し、敵の大尉一、下士卒數名を殺し、卒七名を虜にせり。又若干の步兵及び騎兵より成る他の一部隊は護家屯(三十里堡の東北約半里、龍口の西南約一里)に於て北行する敵の軍用列車と戰鬪を交へ、之を南方に擊退し、同時に龍口護家屯間に於て電線を切斷し、且つ鐵道の第四回破壞を行へり。是れまでの我作業に依りて敵の鐵道は凡て四ヶ所を破壞せられ、旅順方面は護家屯を限り、又牛莊方面は普蘭店の以南を限り、其間の鐵道をして全く使用に堪へざらしめ、敵の連絡を斷絶するの戰略は茲に完全なる實行を見るに至れり。

(三) 大軍金州に迫る

我は既に鐵道電信を破壞し、敵の交通を斷絶したるを以つて、强大なる部隊は漸次活動を始めぬ。卽ち第四回鐵道破壞の翌五月十六日を以て、先づ十三里臺の敵を擊攘せり。

十三里臺は則ち金州北方の高地にして、形勝の地たり。我軍之を占領すれば頗る利あるのみならず、敵より見るも、金州に入らんとする我軍を支ふべく、而して此陣地に依りて金州の掩護は安全に保證せらる。敵亦此に見る所あるが故に專ら力を此一點に集め以て我軍を此處に扼せんとす。是に於て五月十六日午後零時半より此地點を攻擊し、激戰三時間、同三時四十五分に亘りて、終に此陣地の敵を擊攘し、九里店より陣家屯に亘る一線の高地を占領せり。卽ち我は既に金州城を距る一里半の近距離に

迫りしものとす。敵は退却後復た迫り來らず、唯金州城の東南なる省金山（大和尙山の西麓）附近に在る砲兵の時々我に向つて發火するあるのみ。然れども此役少くも三四箇大隊を下らざる優勝の陣地を占めたる敵に對したることゝて、死傷は將校下士卒百四十六名を數ふるに至り、殊に砲兵士官に損害多かりしを見て、劇烈なる砲戰なりしことを知るべし。敵の損害亦少なからず。戰場に委棄せる死屍三十に及べり。

第二十一章　我掃海事業(宮古艦の喪失)

我海軍は既に敵を旅順に閉塞し、第二軍は海上權の完全なる保持を利用して、遼東半島の某地點に上陸を開始せり。旅順附近尙數千の敵ありと雖も、囊中の鼠又何事をか爲さんや。此に於て我海軍は更に一歩を進めて大連灣附近海面の掃海を實施し、以て一層有効なる地歩を確立せんとするに至りぬ。

片岡中將の率ゆる第三艦隊は、五月十二日午前七時大連灣の隣澳大窰口沖に達し、直に豫定の作業に着手すべく解列して、嚴島、日進、宮古の三艦は先づ陸上に向て威嚇砲擊を加ふ。同時に第二、第六、第二十、第二十一の四水雷艇隊は砲擊掩護の下に灣內の掃海を開始せり。掃海とは或方法に依りて敵の敷設せる沈設水雷を引揚げ、海面並に海底の安全を圖るをいふ也。其事の危險却て敵前襲擊に勝るものありと雖も、又實に已むを得ざるに出づ。

前記各艇隊は隈なく灣內を搜索し、危險を冒して掃海に從事し、隨處に於て敵の沈

設せる機械水雷を發見して之を爆沈する中、意外の椿事は出來せり。卽ち第四十八號艇が機械水雷に觸れて、瞬間に沈沒し、且つ死傷者十四名を出したること是れ也。是より先き第四十八號艇は第四十九號艇と共に大窰口東岸に沿うて掃海する中、午前八時と覺しき頃、黑嘴子の南西約八鏈の海上に於て敵の機械水雷を發見せしかば、百方是が爆沈を勉めしも、其効なきを以て艇を後退せしめ、更に爆沈せしめんとして作業する際、正午過廿七分に至つて該水雷は俄然猛烈なる勢を以て爆發したり。輕弱なる艇體は何を以てか之に堪へうべき、見る〳〵中に艇は兩分せられ、約七分間にして無殘にも波間に沈沒し了りぬ。各艦直に救助艇を出だし又附近にありし水雷艇も馳せ來りて共に救助に盡力したるも、事急遽に出でたる爲め、終に陰山中尉以下七名の死者と七名の負傷者とを出すに至れり。

次いで嚴島、日進、宮古の三艦が陸上の威嚇砲擊に次ぎて水雷艇と陸上敵兵との抗爭も亦開始せられたり。前夜旅順封鎖掩護に從事したる第十一水雷艇隊は十二日午前八時三十分大窰口の艦隊に來り會し、直に命を受けて灣內の測量に從事中、敵の步兵約

一中隊騎兵約五十を煤窰附近に發見せり。依て艇隊は直に之に向つて發砲したるに、彼は二三の監視哨を止めて我動作を候はしめ、主力は我に擊退せられて應戰の遑もなく背進し、吾は依て午後三時無事灣內の測量を遂行するを得たり。

又第四十七號、第四十四號兩水雷艇は大窰口內西岸に沿うて敵狀を偵察しつゝ掃海中、大沽山半島八百三十呎山の北北西山麓を通過する電線を發見したるを以て少尉堀田文雄に下士卒四名を附し、之を破壞せしむ。堀田少尉は則ち艇用端舟に乘じて上陸し、砲擊掩護の下に電柱五本を破壞し、其電線を奪ひ歸りたり。當時大沽山の麓に敵の步兵九十六、徐家山方面に一百、尙其の內方に一千の敵あり。依て我は煤窰の東方約二千五百米突に進航して陸岸を砲擊せしに、徐家山と五百五十呎山との中間より敵の步兵約二百現はれ、前進し來りしかば、其近接を待ち砲擊せんと試みたるも、敵は海岸を距る數百米突の地物に據り敢て前進せず。暫時にして敵の騎兵十一、煤窰の南西方約二千米突に現はれたるを以て、之を砲擊遁走せしめたり。我に死傷損害なし。

又宮古は深灣に進入し、ロビンソン角の北西八百呎山に敵の哨所あるを發見し、之

を砲擊破壞したり。敵は其後方に約十小隊伏在し居りたるも共に狼狽遁走せり。要するに我第三艦隊は、掃海、測量、敵狀偵察等、一すべての任務を完全に遂行し得たりき、十四日に至りて一の不幸を我海軍に見るに至りぬ。

第三艦隊に屬する第五戰隊及び第二水雷艇隊は前日の作業を繼續せん爲め、五月十四日を以て再び大窰口沖に至れり。敵は十二日の我掃海事業に鑑みて、大に陸上の防備を增加し、卽ちロビンソン角(大窰口右側の突角)九百呎の高地に在りたる監視哨は之を撤去せるが如きも、新に大孤山(大窰口左側の突角)北東六百三十呎山の北東側に假設砲臺を急造し、野砲六門を備へ、又同山の東北に掩堡を設け、步兵一中隊を配備する等、應急の處置を爲し、終日我に對して頑强の抵抗をなせり。

艦隊は先づ進んで此等の敵に對し威嚇射擊を試み、聯合掃海艇隊は其掩護砲火の下に進んで掃海を續行しぬ。是れ我四十八號艇をして無慘の最後を遂げしめたる所にして、恐るべき機械水雷は猶隨所に敷設せらる。而も重き任務に服せる各艦は火山々上の舞踏を試むるの危險を冒し掃海艇隊は終日水雷敷設區域內を運行し、加ふるに陸上

の砲火間斷なく其頭上に落つるに拘らず、能く任務を遂行したり。此日我艇隊の引上げたる機械水雷凡て五、內三個は之を擊沈し、二箇は之を爆沈せしめぬ。而して我艦隊は砲火を以て陸上の敵に對し、多少の損害を被らしめたり。

此日の作業は前日の變災に似ず、極めて無事に進行し、午後四時三十分頃、夕陽漸く海面に金波を彩る時、艦隊は其日の事業を終了せんが爲め其の放てる掃海艇隊を收容せんとす。忽ち聞く轟然たる爆聲宮古の艦尾に轟くを、驚き見れば潮水直上、水煙四邊を罩めて暫く艦影を見るべからず、嗚呼是れ我不幸なる宮古艦が敵の機械水雷に觸れたるなりき。艦體は爲めに大破損を受け、二十三分餘にして終に遼東の海底深く沈沒しぬ。幸にして附近に幾多の艦艇ありしを以て、死傷者の數は二十餘名に止まるを得たりと雖も、艦齡尙若く、速力快捷なる一通報艦をして無殘の最後を遂げしめたるは我海軍の不幸也。宮古は我國に於て製造せられ、明治三十年十月吳造船所に於て進水、卅三年完成したる通報艦にして、排水量千七百七十二噸なり。十二日以來屢々陸岸に接近して敵を惱まし、掃海艦隊を掩護したるが、今や終に其職に殉る、惜しむべきの至也。而して艦と共に運命を共にせる兵員は更に惜しむべし。

第二十二章　我海軍の一大損失

五月十五日！、これ日本海軍の一大厄日なり。此日を以て發せられたる東郷司令長官の沈痛悲壯なる公報を看よ。

本職は玆に不幸なる變災の報告を進達するを遺憾とす。五月十五日午前五時、千歳出羽司令官よりの無線電信報告に依れば、此日午前一時四十分頃、第三戰隊は旅順口封鎖の任務より歸航中、山東角の北方海面に於て濃霧に遭ひ、春日は吉野の左舷艦尾に衝突し、吉野は浸水甚しく、終に沈没せり。春日より出したる救助艇にて收容されたる機關長以下約九十名なりと。濃霧未だ霽れず痛心に堪へず。

更に最も不幸なる報告を申達するの止むを得ざるに遭遇せり。初瀬、敷島、八島、笠置、龍田は此日午前十一時頃旅順口沖にて敵を監視中初瀬は敵の水雷に罹り、先づ舵機を破られ、初瀬より曳船送れの電信に接したるを以て將に之を發送せんとするとき更に敷島より初瀬は第二の水雷に罹り、終に沈没せりとの悲報來

れり、本職は之を報告するに臨み、只だ遺憾至極と云ふの外なし。善後の處置に就ては、夫々出來得る丈けの手段を盡し災厄を增大せざるに努め居れり、當地附近濃霧未だ霽れず。

敷島は初瀬遭難狀況報告の爲め、今當地に歸港しつゝあり。驅逐隊全部及二個水雷艇隊は敵の驅逐隊に當り且つ溺者救助の爲め午後一時三十分當地を發して旅順口方面に向へり霧未だ霽れず。

初瀬が敵の水雷に罹かりしは、老鐵山の南東約十海里の所にして、當時同方面には霧なく、又其附近に敵の驅逐艦もあらざりしと云ふ。此事實より判斷する時は、敵は其附近に機械水雷を沈置したるか、或は又潛水艇を利用したるものならん。初瀬は約三十分間を隔て、二回の被害にて瞬時に沈没したるも、敷島、八島笠置、龍田等にて梨羽少將中尾大佐以下三百名を救助收容せり。初瀬沈没の頃、敵の驅逐艦十六隻旅順口内より出で來り、我を追尾せしが、會々其地に來りし、明石、千代田、秋津洲、大島、赤城、宇治及び高砂は前記諸艦と協力して之を擊

退し、初瀬生存者の收容を果すことを得たり、以上の報告は混信の爲め文意不明瞭なる無線電信と、今朝遭難報告の爲め來りし龍田の少尉並に、八島の艦載水雷艇指揮官の口頭報告等を綜合して、製作したるものなり、當地近傍霧未だ霽れず。

越えて十八日午前零時四十分、同艦沈沒の原因に關する確報は我大本營に到着したり。曰く

昨朝(十六日朝の事)濃霧霽れ、各艦逐次入港す、其齎らせる報告に依り、初瀬は全く敵の機械水雷に罹りしものなることを確むるを得たり。

嗚呼初瀬吉野の二艦は、斯くの如くにして沈沒し去れり。噸數一萬五千を數ふる山の如き艨艟、一度び旅順口外に進めば、敵艦をして心死し膽寒からしめたる初瀬は、五月十五日を以て日本海軍に見ること能はざるに至れり。快速飛ぶが如く、日清戰爭に壯快なる行動をなして帝國海軍の花と呼ばれ、十年の後尙ほ有力なる堅艦を以て目せられし吉野も亦遂に見るを得ざるに至りぬ。嗚呼是れ何等の恨事ぞや。國民の痛惜措く能はざりしもの、故なきに非ざる也。然れども、彼我海上の大勢は既に業に定

まれり。敵は一戰一艇を喪ひ、再戰一艦を傷け、數度の戰ひに殆ど完膚なきに至り、容易に港外に出づる能はざるもの、出づるの能力を缺けば也。今我二堅艦を喪失せるも、彼れ固より敗形を一變すること能はざる也。若し開戰の當時に在りて、倏忽二萬噸を失へりとせよ、形勢の變いかになり行きし乎、思ひ來りて慄然たらざるを得ず、而して今此大損害を被りて、尙ほ大なる影響を受けざる迄に、我勢力を鞏め根底を深うせる海軍の、よく謀りよく戰ひたる功勞に對して謝せざる可からず。

若し夫れ濃霧咫尺を辨せざるの間、突嗟に起りたる大變事に際し、我將卒が從容自若としてよく其責務を紊さず、難に會して煥發し來る日本武士氣質を、死生一發の間に於いて遺憾なく發揮したるは、日露大戰史を飾るべき花たり。乞ふ之を「吉野」、「初瀬」の二章に分ちて叙すべし。

(一) 吉野艦の沈沒

吉野は第三戰隊と共に、深夜旅順口封鎖の任務より歸航の途に就き、艦上少數の哨

兵を殘して、艦員皆眠に就けり。此日（五月十五日）午前一時四十分頃、恰も山東角の北方海面に來りし時、濃霧のために咫尺を辨せず。將さに針路を轉せんとする時、乍ち一大響音を聞く。是れ春日の爲めに、其左舷艦尾を衝かれたる也。前艦橋に在りし佐伯艦長は、因て直に「衝突、防水」と命じ、全力を擧げて之が防水に努めしも其効なく、浸水益々甚しくして、「總員上へ」の命下りし時は、潮水既に甲板に及び、艦長が「總端艇卸し方」を命じ、尋で「總員乘艇退去」を命じたる時は、後部繞に潮水を見ざるのみ。佐伯艦長は、是に先つて早くも御眞影を第二のカッターに奉じて、廣渡副長と共に、天皇陛下萬歲を發聲するや、「艦中總員は艦體も裂けんばかりに之に和し、萬歲の聲は波間に響き渡りぬ。第二唱已に終りて、第三唱未だ唱へ畢らざるに、何等の慘ぞ、吉野は早や右舷に傾斜して、佐伯艦長、廣渡副長、竹内航海長、末松砲術長以下三百の將校下士卒は、既に其艦に殉じて水底に沈めり。此時右舷より出たしゝ端艇五隻が、傾斜せる艦體のために壓せられて顚覆したるは、不運の極といふべし。第二カッター及春日、千歲の端艇にて、救助せられし者將校六名、准士官一名、下士以下九十七名にして、其餘は悉く戰死せり。當時佐伯艦長が、廣渡副長、竹内航海長と共に最後に至るまで、屹然として司令塔に卓立し、從容迫らず、音吐朗々、號令整然たりし最期の威嚴は、以て帝國海軍の模範とするに足る。而して能く其命令に從ひて、沈着に事を處し終に其艦の沈沒に殉せし下士卒の忠死や、亦以て偉とすべき也。

（二）初瀨艦の沈沒

初瀨は旅順港外の强行封鎖を行ふべく五月十四日午後嶽島、八島、笠置、龍田の四艦を率ゐて某地點を發し、更に或任務のために發向を命ぜられたる高砂を伴ひ、翌る十五日の朝には既に旅順沖に達し、港より十浬の沖に於て先づ一回の行進をなし、引返して二回の行進をなしけるが、此時天晴れ雲なかりしも、風强くして潮流急に、艦の操縱自由ならず、去れど初瀨は屈することなくして尙航進を續け、午前十時五十分、總員戰鬪準備をなし、當直員は上甲板に、其他は何れも各部室に在りける時、艦は突然一大激動を感じ中甲板の士官室に在りたる人々は少しく持上げられし程なりしも、下

甲板に在りたる小主計などは、殆ど天井に達するまで持上げられたり。是に於て何れも器械水雷にかゝりたるを覺りて室外に飛出し、中にも副長有森中佐は、中下甲板の總員を指揮して防水に盡力し孔穴を塡塞して潮水を止めぬ。

是時中尾艦長及千坂航海長は、直に艦橋に至りて電話もて機關部の模樣を問ひけるに、機關室には故障なきも、左舷の機械動かず、舵機室には潮水浸入して舵機の使用困難なる旨の答あり。因て航海長は同艦に座乘せる梨羽司令官に報告したり。時恰も笠置艦は鮮生角の南東に、龍田艦は老鐵山の南にありたれば、司令官は笠置に來れと信號し、笠置は全速力を以て進航し來れり。殊に左舷の器械は二回程掛けられしも、潮流の急なる爲め充分廻らず、艦體は東に向ひ居りて、右舷より南風强く吹き、全く運轉すると能はざるに至れり。去れば曳船をして右舷の機械にて避けんと欲し、殘部の僅かなる人員を使役して、左舷に傾斜するを防ぐため右舷の大艇を卸し、先づ艦體の均衡を保たしめんとし、水雷長は第一にヒンネース(端舟)、第二にランチ、第三は小蒸汽と云ふ順序にて、救助船を卸すことゝし、準備に取掛りけるが、ヒンネースを卸し、ラン

チを卸し、將に小蒸汽を卸さんとする時、笠置來りたれば、左舷の第二カッターを卸し、之に曳綱を結びて左舷の左手より曳綱を笠置に渡し、右舷の綱を導かんとする刹那、又も第二回の器械水雷に罹りぬ。時に午後零時三十分也。此時の艦隊の位置は恰もランチが水面に達するまでにて、其少しく以前に有森副長は中甲板以下の模樣を報告せんとて上甲板に來るの途中、中尾艦長に會して、防水は充分の見込付けり。御安心あれと報告し、尙航海長に告げんと艦橋近く來り、千坂航海長に其旨を告げ、直に引返して中甲板以下の防水工事場に至りたり。而して副長の方に下甲板に達したらんと思はるゝ時、第二の災厄に罹りたるものにして、轟然たる響は萬雷の一時に落下せるが如し。此時全員の過半はポンプ其他の器械使用の爲め、下甲板に在り。上甲板には、港内より進み來る敵の驅逐艦四隻と交戰するに足るや足らずやと思はるゝ程の人員のみとなれり。而して第二回の災厄は、同艦艦の方なるマストの下にある火藥庫の所に中りたれば、遂に爆發して、激烈なる音響と共に煙筒よりも檣よりも各砲門よりも機關室のスカイライトよりも盛に火を吹き出し、焰々たる火炎は天を焦さん計りに凄ま

じく、左舷の方に立ち上る黑煙は、さしもに廣き海原を鎖して何れを見れと見分け難きまでに至り、次第に檣と煙筒とは前方に傾き、見る〳〵艦體は中央より折れかゝりぬ。航海長はコンパス室より急ぎ足にて來り、前部右舷の艦橋に達せしに、艦の艦橋は既に海中に入り、艦は最早や直立の姿となり、ラム(衝角)を高き空中に見るに至れり。

是れより先き第一回災厄に罹りたる時、梨羽司令官は敢島、八島に信號を以て直に集合點に引返し、事の顚末を長官に報告せよと命じたるも、二艦は目前に初瀬の災厄を見て退くに忍びず救助に來らんとする模樣なりければ、再び遠かに報告せよと命じ二艦は集合點に向けて進み去り、笠置、龍田の二艦は熱心救助に從事し、梨羽司令官は激動の爲め海中に飛ばされたりしも附添ひ居たる京谷一等信號兵の投せる繩に泳ぎ付き、折から來る龍田の救助ボートに乘り同艦に入りたり。此に於て同艦は直に檣頭に將官旗を揭げ、熱心に救助に從ふ。時しも浪は益々荒く、風は愈々强く、大渦將に船を呑まんとする勢にて、一將校は、此渦中に投せんとするは、救はんとして却て救はれざ

るべからざるに至らん、進ひよりは寧ろ退くに如かずと云ひしも、艦長は死なば諸共也、焉んぞ捨て去るに忍びんやとて、怒濤狂亂の渦中に投じ、專ら救助に從ひぬ。

唯不幸中の幸とも謂ふべきは、當時同艦にて戰鬪準備の爲め、艦橋附近に多數の床を具へありたれば、沈沒と同時に其床悉く海中に浮び、且甲板の木片等流れ居り、多くは是等の釣床及木片に縋りて泳ぎぬ。中尾艦長も釣床に縋りて泳ぎ、千坂航海長はボートに備へある水桶に取付きて泳ぎ居たるが、龍田より送りたるボートは同航海長を收容せんとて來りけるに、同氏は水桶に縋り居れば己れは大丈夫なり、其處に泳ぎ居るものを先きに助けよと呼び、中尾艦長も同じく己れはよし、其場に流され居るものを先きに救へと叫びたり。視れば其ボートには立錐の地なきまでに收容し居りけるより、聲を擧げて其收容者を一先づ本艦に送れと命じ、之を龍田に收容したる後、再び來りて艦長は收容されたり。又千坂航海長は、其儘水桶を抱きて泳ぎ居りしが、手足痺れ上にありし桶は後には胸の上にありて儘に流れのまゝに漂ひ居たり。後遂に人事不省となりしも龍田艦に收容せられたり。

此時戰死したるは、總數四百九十四人、負傷者百餘人にして、此傷者は火藥庫爆發の爲め燒傷せしものと、激動の爲め打撲傷を受けしものとなり。而して救助せられて生存せるは、梨羽司令官を始め將校二十六人、下士以下三百四十人にして、是等の人々は二日の後根據地に引上げて後佐世保に歸れり。

第二十三章　我軍大孤山に上陸す

新上陸軍の一部隊が金州方面の上陸を開始せるより二週間を後れて、五月十九日我一部隊は太洋河口の大孤山に上陸を開始せり。之を掩護せるものは、細谷司令官の麾下に屬する第三艦隊の諸艦扶桑、平遠、筑紫、濟遠等となす。大孤山は安東縣大東溝を去ること遠からず、且つ北方に於いては岫巖方面に在る敵軍の壓迫を受くることを少からざるを以て、其地形は寧ろ第一軍の勢力範圍内に在り。故に多數の敵兵此地方に屯するの理なきは明らかなりと雖も、是に先つこと三日、十六日を以て、東鄉少將の率ゐし諸艦は、渤海灣に進入して、蓋州角附近を砲擊し、一時日本軍が、蓋州と熊岳城との間に上陸せしとの報さへ之れあるに至りしは、確かに大孤山上陸軍の新上陸をば、反對の海岸より掩護するに効ありしを疑はず。該率制運動の爲めに、敵は我軍の渤海灣方面より上陸すべきことを信せし者の如く、毫も大孤山附近に備ふる所なかりし也。かくて陸兵護送の艦隊は、其陸戰隊を上陸せしむる前に、亦同じく軍艦磐

城をして、陸岸の搜索砲擊をなさしめ、其備なきを見るや、直に陸戰隊を上陸せしめ、一の抵抗を受くることなくして、同日午前八時、目的地の占領を遂げ、直ちに國旗を其高丘に揭げて、揚陸開始の信號をなせり。第二軍の遼東半島に上陸するや、風烈しくして潮又退き、陸戰隊を始めとし、諸軍皆水深膝に達する遠淺を徒涉したりしに、大孤山の上陸に當りては、恰も稀有の好天氣に會し、事業の進涉、意外に著るしきを得たりき。

我軍は上陸開始の翌二十日の午後七時頃敵の騎兵一中隊、大孤山上北方約二里半に在る王家屯附近に現はれしかば、歩兵一隊は直ちに進んで之を包圍せり、敵は後貝加爾哥薩克獨立旅團に屬するウエルフネウジンスキー騎隊の第三中隊にして、我は見事に之を潰亂せしめ、二等大尉一、中尉一、下士以下四を捕ふ。敵の戰場に遺棄せる死屍は二等大尉以下九にして、敗兵は岫巖及沙里寨方面に退却せるものゝ如し。二十一日に至り、某歩兵隊より大石橋(土城子より沙里寨に通ずる道路上)に派遣せる將校斥候は同日午後五時頃高家屯(大石橋子の南約二吉羅)附近にて敵の敗竄兵約十騎に遭遇

し之を擊にせり。又某歩兵隊より五道溝(土城子の東南約四吉羅)に出せる將校斥候は同地の南方約二吉羅に在る張家屯にて敵騎二名及馬七頭を捕獲せり。

第一軍は既に滿韓境上に我武を輝し、第二軍亦近く大活動を始めんとする時、こゝに此軍の上陸するあり、三道併進、敵を壓迫して滿洲に追ふ、亦遠からんや。

第二十四章　南山の占領

(一)　金州攻撃

五月五日我第二軍の金州半島に上陸せる以來、約十日間は專ら第一期活動として鐵道破壞、電線切斷等の任務を遂行し、金州半島に於ける敵兵をして、北方遼陽なる策源地との交通連絡を遮斷し、且金州以北の敵兵を掃掃して之を旅順の方面に壓迫し、以て先づ半島に於ける我軍の地歩を確立せり。是に於て、第二期活動を開始せざるべからず、第二期活動とは、他なし金州半島の地頸を突過すること是なり。卽ち此地頸の險要に占據して、專ら主力を此方面に集め、退いては以て旅順要塞の重關となり、進んでは以て我軍を脅嚇せんとする敵兵を擊攘すること也。蓋し敵は其主力を金州地頸の險要に集め、以て我軍の來り襲ふを待つ。而して我に在りては此敵を擊攘せずんば、進んで旅順を壓迫すること能はず、止つては半島に於ける地歩を鞏固にする能はず、而して敵は晝夜防備に死力を盡し、攻撃一日を緩うすれば一日の困難を加ふるあ

るのみ。此に於て軍は五月十六日十三里臺を占領すると同時に、直に地頸攻略の作戰計畫を定めたり。然れども金州城は地勢上防禦陣地として大なる價値あるものにあらず、故に敵は金州の南方地頸の最も狹窄せる南山の高地に占據し、茲に主力を集めて、遙かに金州を掩護し、以て我軍をして金州に入る能はざらしめんと謀れり。故に金州には唯普通の防備と僅少の兵を置くのみにて、之を攻略するは固より易々なれども同時に南山を攻略せずんば金州占領の目的を達する能はず。卽我攻撃の目的地點は金州にあらずして寧ろ南山に在るなり。而して南山の地たる東は大連灣、西は金州澳に挾まれたる地頸に蟠まり、其狹隘なる、横幅僅かに我二十餘町に過ぎず、而して地は險はしく隆起して一帶の高地となり、前面は廣濶にして展望自在なり。堅塞茲に守れば大軍も進むを得ず、眞に是れ難攻不落の天險也。敵は之を以て旅順背面第一の防禦點となして、設備至らざるなく、南山一帶に半永久の防禦工事を施し、大小砲七十門、機關砲八門を備へ、塹濠を設け、掩護を施し、銃眼を開き、山麓の周圍には鐵條網を繞らし、地雷を敷き、鐵條網の前は數丈を隔てゝ無數の陷穽を穿ち、鐵條網を距る十間

乃至二十間の處には必らず堡壘線を作り、而して要所〳〵に機關砲を配布して、自ら難攻不落と恃みたるも。

是に於いて我作戰計畫は先づ砲兵を以て金州及び南山を攻擊し、敵の砲壘を沈默せしめて次に歩兵を前進せしめ、行進の途上歩兵の一部を以て金州城を攻擊し、同時に南山に肉薄して敵の陣地を占領するに在り。依て軍は第四師團を右翼に第一師團を中央に第三師團を左翼に配列前進せしめ、金州城は第四師團の一部隊をして之を占領せしめ、別に第一師團の一部隊をして之が豫備隊に任せしめ、金州占領の勢に乘じて全軍敵を追擊しつゝ南山に迫ることゝなれり。

軍の右翼なる第四師團は五月二十二日を以て三十里堡一帶なる豫定の陣地に就き、二十四日午前七時を以て韓家屯を發せり。同夜は全軍眠ること僅に數時間早曉出發前進に就く、十三里臺西南の高地を一列縱隊にて超え金州西北端龍王廟附近に至りし頃は、殘月西山に沒し連夜の砲聲も聞えず、金州城外寂として蟲の聲だになく人をして城内敵の有無を疑はしめぬ。既にして天明〳〵二十五日午前五時四十分頃同師團第七旅

團(大坂)は進んで金州北方一千米突の高地龍王廟東側の山北脚に集合す。此頃より敵の砲聲を聞く、軈て敵の曳火彈颯然として空中に鳴響しつゝ飛來し、後方五百米突の地に爆發し、二回目は三百米突、其次は二百米突といふが如く、漸時照準の定まり來りたるを以て、我陣地を直に後方三千米突の山に移せしが、見る〳〵前陣地には着彈雨の如く落下して砂塵を飛ばし悽絶云ふべからず。其砲彈は南山の敵壘より送れる間接射擊にして、一隊の支那人旗を以て着彈を信號しつゝあるを認めしかば、我は斥候を出して支那人の旗手を斬り旗を奪ひ、尙四十四人を生擒したれば、敵も忽ち射擊を中止せり。午前五時半砲聲を聞きしより午前十一時迄、間斷なき射擊を受けたるも我よりは一發も報いず。

第四師團の砲兵第四聯隊は十三里臺附近の高地を利用して、第一師團及第三師團及砲兵旅團と協同し、南山及金州の敵砲と砲火を交へたり。然れとも此の日の戰は僅に偵察戰に過ぎず。我艦隊は此日金州灣に來りて砲戰に加はる筈なりしが風雨の爲めに來らず。

斯くて歩兵第七旅團は海岸線に沿うて運動を開始し、第十九旅團(伏見)は稍前進して金州城前面に配列せられ、陣地は其儘にして動かざるうちに、暮色蒼然來りて此の修羅場を包めり。

此くて二十五日の夜は全軍體を隱くして露營す、忽ち司令部より命令あり曰く

一、第十九旅團は今夜十二時迄に金州を傾占すべし

二、第七旅團は四時半迄に金州西南端を占領して南山を攻擊せよ

此に於て夜襲の策は直ちに盡せられ、第十九旅團は猛然として立つて夜襲の位置に就き、金州城門さして肉薄せり。時に午後九時、敵は城門上に機關砲を備へ、門下の地中には地雷火を埋伏し、以て盛に我を亂射す。

第三十八聯隊(伏見)の一箇大隊と、第九聯隊(大津)の一箇中隊とは、第一線に進み、別に工兵第四大隊は決死隊を組織し、衝天の勇氣を以て驀進し、此城門を一氣に打破らんとせしが、敵彈雨の如く下り小隊長を初めとして戰死するもの多く、生還せしもの僅に四名のみ。加ふるに殷々たる雷鳴閃々たる雷光、沛然たる猛雨と共に來りて、砂礫

爲めに飛ぶの慘狀を現出し、裝塡せし火藥の爆發をも妨ぐるに至り、且風雨暗夜の事として味方の動靜十分に認め難く、我應援軍の彈丸第四師團兵の前方向に落下し、危險なるを以て襲擊を緩め、二十六日の午前未明を以て猛進せり。工兵は金州城を距る八百メートルの地點に於て歩兵の展開に便せんが爲め掩堡を造り、歩兵も亦時を移さず掩堡に前進せり、敵は盛に火箭を放ち探照燈を照らし其頻發する曳火彈と共に明煌々として白晝を欺き、我の行動に頗る障碍を與へ、機關砲を以て猛烈に我を射擊せしかば、午前四時頃第一大隊長藤岡少佐正門外に於て敵彈に觸れて即死し、副官水郡大尉亦負傷したり、やがて午前五時半工兵は再び南門を破壞せんとし決死の士七八名は裸體にて綿火藥を携へ、城門の破壞に從事し、又一方には第一師團の工兵斧、鋸等の器械を手にして、鐵條網の破壞に當り、八時過ぎ東南の二大門を爆發破壞したり。是れより先き、第一師團第一聯隊(東京)は二十五日の夜を以て

二十五日夜十二時を期し第四師團は金州占領の計畫なるを以て其豫備隊となり且

二十六日午前四時迄に金州城東南角よりその東南方三叉路に至る間の地を占領す

べし

との命令を受けたるを以て、第一聯隊は二十六日午前二時より肖金山の陣地を出發し、之より金州城に通ずる貔子窩街道を踏むで前進したり。かくて午前四時半頃金州東門の東方なる無名の一部落に到着したるに、敵は金州城より激烈なる射擊を開始したり。

是より先き金州城は同夜中第四師團の手に依て陷落せらるべき豫定なりしを以て、聯隊は直ちに斥候を派して一面四師團との聯絡を圖り、一方此方面の狀況を偵察せしめたるが、斥候の報告未だ至らざるも、周圍の狀況に依て考察するに、四師團は豫定の如く金州城の北門に進軍せず、金州城は猶我手中にあらざるべきを知り、第一聯隊自ら敵を右方に引受けざるべからざるを感じたれば、一隊は無名部落に停止し、一部隊をして南山方面を警戒せしめ、主力を以て金州城の敵に當るべき決意をなしたり。而して此の主力の援護に依り偵察したる結果金州城には猶數多の敵兵在るを確めたるが、城内より發射する間斷なき射擊の爲め、我軍に若干の死傷を生じたれば、今は豫定の任地に就くの前、先づ金州城を陷落せざるべからざる事となり、乃ち工兵をして

肉薄攻擊せしむると共に、一大隊を以て金州城に達せしめ城を距る約三百米突の距離に進みて猛烈なる射擊を行はしむること約三十分、茲に大小砲相協力して突擊を開始するの準備を爲したり。是に於て今村大尉は東門中央の道路を步兵の掩護により一直線に進み、下士以下三名に綿火藥を投せしめ、城門を破壞せしむ。破壞は美事に成功せしも、我が工兵は退歸するに遑なくして負傷せり。工兵少尉鳥谷秀は此破壞を見て兵十二名を率ゐて直に突入し、其内四名は戰死せしが、少尉は携帶梯子より身を躍らして城内に飛込みぬ。第一聯隊の第一大隊は之を見るより馳け足もて城壁に迫れるに敵は銃眼より熾に射擊せるも、遂に支ふる能はず蹌て南門より退却を始めたり。小原聯隊長は旗手少尉岸孝一に聯隊旗を捧持して前進すべきを命ず、旗手は金州城を距る三百米突の處に至りしに、敵彈來りて脛骨を碎きしも之に屈せず、聯隊旗を捧持し新旗手として交代したる江澤旗手の手に渡して僵れたり。此時第一中隊の將に城門咫尺の間に迫らんとするや少尉野村素一は眼早くも門扉の破壞せられて、下部に一小孔を穿てるを認め、猛然として隊列を放れ、眞先に進みて彼の破孔に近づき、辛うじ

て門内に入り數名の敵兵を斬り背後より續て來れる平井一等卒を應き相共に梯子を傳うて城壁に攀ぢ上り、手早く國旗をポッケットより取り出し、平井に命じて之を銃劍の先に着け壁上に掲げしめぬ。勇ましき旭旗は忽ち金州城頭に飜へれり。此に於て全部疾驅して城中に入る。敵兵驚駭、先を爭うて壁上に登り、銃眼より熾んに射撃し、以て我兵の進路を遮ぎらんとす、我兵之を望み大呼して城壘に攀登り一發も銃火を放たず、直ちに敵の脚下に薄り、銃劍を揮うて敵を薙ぐ。敵兵齊しく悲鳴を發して奔竄す、第一聯隊の各隊續いて怒濤の如く入城し、萬歲の聲天地を撼せり、時に午前六時也。

恰かも此時前記の如く、第四師團も城の南門を爆發せしめ吶喊して城に進入し、敵を斬り、逃ぐるを追ひ午前九時全く之を占領せしが、第四師團の一部隊は更に勢凄まじく敵の約一個大隊を追撃して、金州灣海中に追込みしかば、敵は全く逃路を失ひ、首までを海水に浸しながら猶ほ我を射撃し、我兵も亦腰まで海水に入りつゝ、盛に射撃を加へ、全く水中の大激戰となり、銃丸の落つる毎に水煙立上り死屍漂蕩するに至りしが、我は遂に悉く敵兵を塵殺し其數實に六百に近く、生存して我に捕はれしもの十餘名に過ぎず。海水紅ゐに彩られ敵の死屍海を蔽うて悽慘を極めたり。

（二）南山總攻撃

此の如く金州城は二十六日早朝を以て陷落せしかば、軍は直ちに部署を整へて南山を攻撃するに決し、第四師團は右翼隊として敵の左側を攻撃し、第一師團は中央隊として敵の正面に突進し、第三師團は左翼隊として敵の右側に迫るの方略を以て運動を開始せり。

第一師團の戰鬪

南山正面攻撃の任務を受けたる我第一師團の歩兵は、午前八時三十分頃より運動を起し、金州より南山を經て旅順に達する新開の軍道（露軍の新に開きし道）を挾みて進めり。此時先頭第一線には、第十五聯隊第二大隊（秀島少佐）を中央に、第一聯隊第一大隊長（枝吉少佐）を左翼に、第二聯隊某大隊を右翼に列して進み、敵壘を距る二千メ

ートルに至りて敵狀を見るに、敵は二重三重に砲壘を築きて防禦堅固に見受けしが敢て射擊をなさず。我兵は駈足にて前進し、八百メートルに近きし時敵は塹濠によりて猛烈なる砲火を注ぎ、我軍の前進を妨げんとせり。我兵は銃眼の外敵の姿を見る能はず。敵は我の行動を見て巧に射擊を加へ、大に我を艱ませり。

午後三時半頃我歩兵は、掩護の下に敵壘を距る五百メートルまで肉薄し、午後五時頃には二百メートルまで進みしが敵の鐵條網は容易に破ること能はず。工兵隊最先に奮進して之を破壞せんとして成らず、歩兵も續いて之を破壞せんとせしも、何樣敵の機關砲は大なる斗漏にて水をかくるが如く注ぎ來り、銃火亦猛烈にして面を向くるに由なし。中にも第十五聯隊第一大隊は機關砲の正面に向ひたれば第八中隊のみにても佐藤中尉眞先に討死し、三澤、三浦、松田、松下の各中尉或は死し或は傷き、下士以下九十餘名の死傷者を出し、第二大隊の全體を通じて三分の一強の死傷者を見るに至れり。而も我兵は斯くの如き激戰に臨むも沈着平靜にして恰も演習に臨むに異ならず、猛烈なる砲火を侵して少しも躊躇の色なく勇奮せり。斯くて時は次第に移れども敵の

抵抗は頑强にして容易に退く色なし。師團長伏見宮殿下には此有樣を御覽せられ、夜に入りては攻擊益々困難となりぬ可し、日のある中に落せよとて全師團總突擊の命を傳へさせられ、師團の總豫備隊をして突擊せしむ。是に於て第一聯隊は命を受けて、散兵線の射擊掩護に依り、街道の突擊を試む。先づ決死の兵十六名を撰拔し、向軍曹をして之を統率せしむ、軍曹は部下を引卒して猛烈に突貫し、鐵條網附近敵前二百米突の地に達し悉く死傷して斃る。聯隊長小原大佐軍旗を馬前に飜し、自ら劍を拔いて陣頭に進み、第三中隊をして更に突貫せしむ。敵彈下ること雨の如く眞先きに進める軍旗は數彈を蒙り裂けて亂絲の如く、既にして又竿を折られ、次に旗手江澤少尉彈丸三發を受けて斃れ、聯隊長もまた負傷し、淋漓たる出血は帽を濕し流れて左眼を浸し軍刀に附着せり、而かも大佐は敵情を注視するため片時も躊躇すべからざるを以て繃帶を施すの暇なく、左手に創傷部を押へて指揮す。其他の將校多くは傷き、鐵條網附近に肉薄せるものは悉く死傷し、聯隊本部は下士一人となり、下士軍旗を捧持するに至る。第三聯隊（東京麻布）は當初軍の總豫備隊なりしが、中頃歩兵の苦戰となりし爲、

増加隊として散兵線に加はり、松村旅團長指揮の下に行動し、十一時より戰線に臨み、しに敵は盛に機關砲を打ち、忽ちに死傷者を續出し、三中隊の二中尉負傷し、桑原中尉佐藤特務曹長は先づ戰死す。第二中隊のみにても二十名斃れしが尙屈せず、敵前二百米突迄前進す。既にして各聯隊は突擊隊を選拔し敵陣に突進するに決したるより、第三聯隊に於ては第三中隊（隊長寺島大尉）及第十二中隊（隊長蟻坂大尉）其の選に當り、疾風の如く敵壘に突擊し、一彈をも發射せずして前進せり。而かも敵前三百米突にして將校の悉くと中隊の半部とは、或は傷き或は斃れ、亦た前進を繼續する能はず、乃ち地上に匍匐して姑らく敵火を避け以て突擊の機を待つ。而して敵の防禦中尤も突擊隊の前進に危險なるものを地雷となす。此に於て到底普通の手段にては攻擊の見込なきを見、午後四時突擊隊中更に決死兵を選拔して地雷を試踏せしむることゝし、萬死の志願を募る、大隊長は大聲に地雷火を踏潰して行かんとする者は劍を擧げよと命令せしに、全隊悉く之に應じたり。隊長は大に感激し、兩中隊長は等しく其選拔の途なきに窮せり。依て聞入れぬを無理になだめ賺しつゝ、多數の用なしと

て選拔を各小隊長に託し、三中隊にては軍曹小林寅吉以下六名選定せられ、一行は輕裝して手帳其他大切なる物品を捨て置き將さに立たんとするや、中隊長の音頭にて先づ一同萬歳を唱へ、更に旅團長の音頭にて同じく萬歳を唱ふ。一行は相連りて死地に向つて前進す、敵彈急霰の如く、地亦た平坦一の掩蔽物なし、進むこと數十歩にして、勇士戰死せざれば則ち負傷し、壯烈の光景眞に鬼神を泣かしめぬ。三中隊は將校皆戰死若くは負傷して兵卒半ばを缺き、其指揮を山本曹長に託するに至れり。唯幸にして我砲彈の落下せる爲め其電線切斷せられ一の爆裂したるものなし、蓋し前日の大雷雨に依り、地雷敷設の地點少しく凹所を生じ、我軍容易に其所在を發見するを得たる也。

第三師團の戰鬪

南山攻擊の左翼隊たりし名古屋第三師團は、師團長大島中將（義昌）に率ゐられ、五月二十四日午後五時、敵を距る約三里の塞子河附近に於ける陣地を發し、二十五日の午前三時に運動を開始することゝし、拂曉敵前四千米突の地に達し、歩兵第六聯隊は直

に銃火を開く筈なりしが、濃霧のため豫定の行動を取ること能はず、附近の森林に於いて其まゝ露營せり。

然るに午前十時半頃より驟雨恰も盆を覆すが如くに下り、同十二時頃に至りて雨脚漸く收りしも、雨氣骨に徹し點滴我衣の袖より墜ち、爲めに戰鬪動作の敏活を妨ぐるものあるより、數時の休憩を與へられ、武器被服の手入を爲したり。斯くて二十六日午前三時に至り、再び運動を開始し、師團の右翼たる南部長内大佐の歩兵第六聯隊は、先づ東山の後方右側に集合すべきの命を傾し、其第一大隊は重複縱隊の隊形を作りて師團の總豫備隊となり、東山の後方に位置しぬ。而して午前五時大連灣方面に在りし第一師團は全線砲擊を開始したるも、其第三聯隊は時機未だ至らざるを以て、空しく後方にありたり。午前九時、第五旅團長山口少將の指揮下に東山後方に在りたる第六聯隊の一部及大佐藤本太郎の第卅三聯隊は、開進すると同時に、其第一大隊を東山の左側に迂回せしめ、以て敵の左側に薄るべき命を受けて前進を起し、東山の南方を過きて開豁地に出でたり。而も此地は前面一の遮蔽物なかりしか

ば、敵は好き目標を獲たりとなし、猛烈なる射擊を開けり。然れども我の損害は割合に尠く、漸時前進して散開したるに、第六聯隊第一大隊の第一、第三兩中隊は、恰も敵の正面に位置し、第二、第四の兩中隊を後方の延線上に豫備隊として位置するに至り、敵彈霰の如く飛來れるも、前には一の利用すべき地物無きを以て、一進一止必らず六七名の死傷者を出すに至れり。先づ將校にては第一中隊長眞先に負傷し、野村少尉尋で足部の貫通銃創を受けたるも屈せずして前進し、左翼準士官唐渡特務曹長亦負傷し、第一小隊長今枝中尉、第二小隊長太田少尉等、奮鬪前進したり。而して敵は其據守せる要塞より豫め測定せる射擊距離を以て照準をなし、彈丸多くは虚發なく、第一中隊にて四十餘名の死傷者を出し、一身二三彈を受けしは普通にして、多きは五彈に達するに至れり。たま〳〵一丸飛來して第一小隊長今枝中尉の右大腿を貫通し、數分時にして全中隊の將校皆死傷し、獨り第二小隊長太田少尉の健存して中隊を指揮するあるのみ。去れば下士以下の死傷者を加へ、忽ちにして五十五名の多きに至れり。且つ第一中隊と并進したる第三中隊は、敵彈を受くること、第一中隊よりも猶猛烈に、

其死傷實に八十一名に及び、全聯隊中損害尤も多く中隊附寄田中尉の外將校は悉く死傷し、中尉獨り奮鬪して中隊を指揮し、雙眼鏡を眼窠に宛てゝ指揮しつゝありし際、一彈空を掠め來りて雙眼鏡を擊てり。只幸にも彈力弱くして眼鏡を破壞するに至らず、辛じて一死を免れたり。第一大隊豫備隊の任務を帶びし第二第四の兩偶數中隊は、前面の戰鬪頗る激烈にして我の損傷又甚だ大なるを見るや、急馳して伍間に增加し、以て第一第二兩中隊の散兵線中に入り應援せしも、敵彈下に在ること永からざりしため、損傷は比較的寡少なりき。

此間敵艦一隻大連灣に現はれ、迫かに我陣地を脅威し、陸戰隊の一部を上陸せしめ以て我に迫らんとするもの丶如し。此に於て軍乃ち鋒を轉じて之れを擊ち、第十八聯隊(豐橋)は二個中隊を敵砲艦方面に派遣し對戰數刻に及びしかば、敵遂に其支ふべからざるを知り、上陸兵は先を爭うて艀舟に移乘し、舵機を速めて本艦に逃走す、須臾にして敵艦も又濃霧に乘じて其影を沒し去て行く所を知らず。

砲戰中敵の彈丸屢々我彈藥大隊の中央に落ち危險に瀕せること一再にして止まらず、且我砲兵歩兵共最早彈藥の缺乏を告げ、一時打方を中止せんとするに至れり。幸にして補充隊の傳騎に遭うて急を告げ遂に補充するを得たるも、敵の後續部隊は連綿雲霞の如く來り、更に新鋭を擧つて我軍を包圍せんとし、南山高地の陣地よりは重砲を亂射し、颯然として天風を切り蠭然として地軸を撼かし、形勢頗る容易ならざるに至れり。

第四師團の戰鬪

南山の大激戰に、第二軍の右翼として打向ひたる大阪第四師團の兵は、師團長小川中將(又次)之を引率し、五月廿四日午前十時半十三里堡の宿營を出で、峻阪險路を進み、廿五日夜金州に向ひ工兵第四大隊より決死隊を組織して城門を破壞し、各兵吶喊して城内に突入り、難なく金州城を占領するを得たるを以て、直ちに金州灣に沿ひて南山の敵壘に向ひ、内、大坂旅團は右を進み、伏見旅團は左を進み、前方に掩堡を築き射擊を始めけるが、敵壘に目標なきを以て、功果著しからざるに反し、敵の機關砲及小銃は我の近止に乘じて巧に射擊し、我が將卒の討たるゝもの少なからず、中にも

海岸を進みたる第八聯隊第一大隊の部隊は、敵彈に負傷したるものを收容すべき餘地なく、兎角する間に波浪に浚ひ去らるゝなど、其慘烈言ふばかりなし。流石に我が勇兵も今は暫らくためらひて見えける所に、恰も好し我が二隻の軍艦浪を蹶つて金州灣に現れ、午後は六隻となりて我を掩護し、烈しく敵を射擊したれば、我が兵之に力を得、更に前進を繼續したり。

是より先き午前中第一大隊の第二中隊は、敵彈の破裂及地雷火の爆發にかゝり、約一個分隊を失ひ、土烟天にみなぎり、身肢飛散し、後其處を檢すれば、二間ばかりの地を深さ五尺餘り摺鉢形にし、一見其慘禍を想はしめぬ。午後に至りて戰鬪益々猛烈となり。我兵の銃るゝもの前後踵ぐ、然れども我兵は踴躍敵前に進み、曾て一回も俯姿を取らず、一歩一歩兵數を減ずるをも顧慮せず、伏屍を越え潮流を亂り、南山北麓に突出し、敵の猛烈なる機關砲火を冒して鐵條網附近に肉薄す、某中隊長の如き其負傷するや、伍長の馳せ到り繃帶所に伴ひ行かんとするを見、聲叱咤して曰く負傷淺し余にじて後退すれば中隊の士氣忽ち沮喪せん、余の事顧慮する勿れと、中隊所屬の

兵殆んど全部を失ふを見るや帽を脱して萬歳聲裡に一齊射擊を命じ銃丸敵壘に迸しるを望みつゝ散兵線後に退き、遂に繃帶所に至れり。斯くして益々猛進するや、敵は全力を注ぎて之を防禦し、彈丸霰の如く飛び來りて面を向くべからず、此時決死隊として拔擢せられたる工兵三十名鐵條網破壞のため突進す、進みては俯し俯しては進み、遂に鐵條網に達す。工兵は頭を擡げんには敵彈に打たるゝ虞れあるより、臥したるまゝ作業し、死傷相繼ぐも猶屈せず、遂に一方侵入の道を開けり。後方にありて此實際を目擊するもの手に汗を握りて其光景の壯絶なるを賞讃し、全軍之が爲め勵まされ、遂に全軍一線となりて前進し、敵前二百米突に進みたる時、我砲兵は敵の散兵濠に向け急射擊をなせり。

（三）南山陷落す

是に於いて敵漸く退却の色あり、午後七時十分日將に暮れんとす。小川師團長は夜に入りては戰の一層困難なるべきを思うて有力なる海軍の掩護によりて前進し、第八

聯隊を先頭に全師團の突擊を行ひ、鐵條網を超え地雷を踏み猛火を冒して進む、第八中隊は實に軍旗中隊たり。

是れより先き中隊の幹部の將校は續々斃れ今は唯だ小隊長松浦少尉あるのみ、少尉卽ち中隊の先頭に立ち我志氣の沮喪せんことを恐れ、刀を拔いて大聲疾呼部下を激勵して曰く、君國のため死すべき時は此時ぞと、挺身衆を率ゐ彈丸雨飛の間に陣地を主持す。遂て突擊の命下るや、中隊は軍旗を擁して勇奮躍進、終に南山の敵壘に突進して第一に敵壘の高地に進み名譽ある第八聯隊旗を高く樹て、後續部隊を待けり。吉安特務曹長また松浦少尉に從うて先登たりしも、砲臺に上れる一刹那飛彈のため輕傷を負ふ、斯くの如くして第八中隊の幹部は將校以下准士官まで悉く戰死或は傷つき殘れるは最後の中隊長たりし松浦少尉ありしのみ。松浦少尉の先登すると殆ど相次いで第四師團の全部は潮の如くに進みて、山上に登り、旗を樹て萬歲を叫ぶ、喊聲天地を撼す。第一師團此勢に乘じて前進せしが、胸部を貫通せられ忽ち倒れて吐血する者少なからず、而も猶勇を皷して勇進馳せて山上に登りて、敵壘に進入し、萬歲を唱へたり。

時に午後六時三十分頃なり、全軍次で突進、死屍を越え飛丸を冒し、敵壘に突進して劍尖相接するまで激戰し遂に敵を走らせり。而して第三師團に在りては、大島師團長は馬上鞭を揚げて全線の吶喊を令し鐵蹄砂塵を蹴て戰線に入り、幕僚と共に馳驅して全軍の進戰を督勵す。兵皆勇奮遂に難攻不落の堅壘を拔き、南山の一角に旭旗を樹つるを得たり。時正に午後七時三十分也。

難攻不落を以て稱せし南山は斯くして我手に落ちたり。激戰實に十六時間、之を歐洲普通の戰術に見るときは此の如き險要防禦の攻略は數日の激戰を以て始めて其効を奏すべしとなす。僅々一日に攻略するが如きは實に日本兵ならでは能はざる所ならんのみ。

軍は南山を占領するや、直に豫備隊の一部をして敵を追擊せしめ、且砲兵は全力を盡して敵の掃清に努ひ、かくて同夜は全軍戰場に露營しぬ、今は滿目皆兵、勇ましき萬歲の歡呼諸方面に起る。

敵の計畫を想像するに此堅陣によりて少くとも一二ヶ月を支ふるを得べしと豫期し

たりしならん。然るに我軍の猛烈無比なる攻擊に遭ひ、一敗地に塗れて復た支ふる能はず、大房身の火藥庫を自ら爆發せしめつゝ南關嶺の天險も空しく潰走の間に踏過し、同夜は青泥窪の西北方なる三十里堡に宿營し、夜半より汽車にて順次旅順方面に退却したるものゝ如し。其一部は翌朝まで留て同停車場を守備しつゝありしが、午前十時頃此守備隊も亦停車場に火を放て去れり。

我軍は一夜を南山の占領地に明し、翌くる五月二十七日には兵馬を休養せしめ、且更に前進すべく諸隊の整頓を圖らんがため、軍の主力は南山附近の諸部落に宿營し別に歩兵第一旅團長中村少將(覺)をして歩兵砲兵及工兵より成る一枝隊を率ゐ南關嶺及其附近を占領せしむ。中村枝隊は同午前十時半を以て南關嶺を占領し更に前進して柳樹屯をも占領し、同地にて火砲四門、同彈藥若干、鐵道貨車(有蓋五、無蓋四十一)を鹵獲せり。

南山の猛戰に於て敵は四百の死傷者を戰場に遺棄したるを看れば、其損害の多大なるを知るべし。而して之に對する我軍の損害は死傷四千二百七人と註せらるゝに至て

は、誰か其犧牲の慘烈なりしに黯然たらざるを得んや。然れども戰鬪中南山の東麓に在る地雷の電纜を發見し、之を切斷して爆發するを得ざらしめ以て敵の豫測せる如き非常の損害を免れたるは偏に我軍の注意周到に歸せざるべからず。然れども兎に角一日の戰鬪に於て三箇師團の兵力中四千二百の死傷者を出せるに於ては、益々戰鬪の猛烈なるを想像すべし。

優詔第二軍に下る

第二軍ハ海軍支隊ト協力シ敵ノ死守シタル金州城及其南方要害ノ地ヲ力攻シ遂ニ之ヲ陷レ以テ旅順口ノ咽喉ヲ扼シ且我野戰軍將來ノ行動ノ地歩ヲ堅固ナラシム朕深ク爾等ノ忠勇ヲ嘉ミシ尚益々奮勵シテ終局ノ勝利ヲ收メンコトヲ望ム

(四) 海軍の協力戰鬪

鴨綠江畔に我分遣隊を以て敵を牽制し、又第二軍の上陸を掩護し金州半島に無前の活動をなさしめたる海軍は、今回の南山の激戰にも參加して偉大なる戰功を示せり。

奥大將の報告中「頗る苦戦に陥りしが恰もよし此時金州灣にある我艦隊は敵線の左翼に向つて更に猛火を開き砲兵第四聯隊に協力し敵火の撲滅を務め第四師團は此機に乘じ全力を擧げて敵の左翼に迫まり先づ高地線に進む」とあるに徴しても其一班を知るに足らん。

五月二十五日筑紫、平遠、赤城、鳥海及び第一水雷艇隊より成れる分遣隊は、金州灣に進みて我南山攻撃の砲撃に協力すべしとの命を受け、先任艦長西山中佐指揮の下に豫定の行動をとり、同日正午金州灣に達したり。然るに此日は生憎渤海に珍しからぬ風浪いと高かりしを以て、敵壘の攻撃を見合せ、一時某地に假泊して風波を避け午後六時再び金州灣に入り、茲に始めて陸海協力の準備を了へたり。

明くれば二十六日第二軍は黎明を以て、愈々敵壘砲撃に着手したれば、分遣艦隊も亦之に協力し、午前六時赤城、鳥海の二艦及び第一艇隊は、左なきだに金州灣頭遠淺なるに加へて干潮に際し水の淺きにも拘らず、進んで海岸に近き、蘇家屯高地の敵壘に向つて熾んに砲撃せしが午前八時海面より望見し得る敵の砲壘は一時殆んど沈黙したるを以て我艦隊も亦一時其攻撃を中止したり、此砲撃の初期敵彈鳥海の前甲板を擦過したために分隊長海軍大尉河野通雄負傷し下士以下二名戦死し、二名負傷したり。

右の如く蘇家屯高地の敵砲壘は午前八時殆んど沈黙に歸したるを以て、艇隊の一部は其淺吃水を利用し、更に進んでシャオヘ河附近の鐵道線路を砲撃し、又他の一部隠潮に乘じ航路を測探しつゝ、筑紫、平遠を嚮導として海岸に近き、我陸軍右翼の一部が敵砲火を冒し、海中を徒渉して壯烈に前進するを掩護したり。當時分遣艦隊が淺きは一尋、深きは三四尋の金州灣内に於て愼重に自由の行動を取り、能く其目的を達し少しの損傷を受けざりしは、一に我將士の訓練よく熟せるに由ると云はざる可からず。午前十時我分遣艦隊は再び全力を以て敵艦を砲撃し陸軍を援助したり、敵は終に我猛烈なる砲火に敵する能はず十一時殆んど蘇家屯を退却し我陸兵は既に同高地點に達したる如かりしを以て再び砲撃を中止したり、此時漸く干潮に際し筑紫、平遠の二艦は吃水の許さゞるものあるを以て漸時沖合に出て、赤城、鳥海及び水雷艇隊の一部は依然留まりて敵を監視す。

我が監視の艇隊は此間陸上の第二軍と聯絡を通じ、敵砲兵が蘇家屯高地を退却せしも尚南關嶺の高地に據れるを以て更に赤城、鳥海をして之を砲擊せしめたり、蓋し蘇家屯より南關嶺の高地に退きし、敵の速射砲は七千五百メートルの着彈距離を有し居るも正面よりする我野砲は此速射砲陣地に達する能はず、我歩兵は爲に非常なる不利の地に立ちたればなり、是を以て我軍艦は側面より烈しく之を砲擊して野砲の足らざる所を補ひ、終に我右翼隊前進の餘地を掩護するを得たり、此次砲擊は獨り我右翼隊のみならず、廣く我全軍の大援助となり、迅速なる大捷を得たりしもの、多く端を此に發す。砲擊中敵彈鳥海の砲側に爆發し艦長林三子雄戰死し少尉佐藤巳之吉外下士卒三名負傷したり。但し艦體には損傷なし。午後七時三十分陸軍の南山砲壘を占領するを見、艦隊は戰鬪を止めて其集合地に歸航したり。

第二十五章　金州半島沿岸の封鎖宣言

我海軍は、敵の巢窟たる旅順口に向て、已に八回の攻擊を加へ、三回の閉塞を行ひ、敵をして潰敗萎靡復た策の施すべきなきに至らしめ、更に直接港口を閉塞して、小艦の出入、猶自由なるものに對しては、水雷を敷設して、其行動を阻害し、以て陸上攻擊軍の、前進して其背面を壓迫するの機を待ちしが、我軍向ふ所として敵なく、金州の嶮も、日を刻して之を陷れ、今は陸海力を合せて、敵を旅順の一隅に包圍すべき時機に會し、東鄉聯合艦隊司令長官は、第二軍の金州を略し、南山を陷れたる五月二十六日を以て、茲に遼東半島沿岸の封鎖を宣言するに至れり。

本官は、帝國政府の命を受け、明治卅七年五月二十六日、清國盛京省遼東半島南部、即ち貔子窩より普蘭店に至る一直線以南の沿岸を、帝國軍艦の充分なる兵力を以て封鎖し、之を維持する事、並に封鎖を破らんとする、一切の船舶に對し、國際法及帝國と他の中立諸國との條約に於て許容せられたる、一切の强制手段を用ふべきこ

とを玆に宣言す。

帝國軍艦三笠に於て

聯合艦隊司令長官　東郷平八郎

海軍大臣も亦左の告示を發したり。

海軍省告示第十九號

明治三十七年五月二十六日清國盛京省遼東半島の南部卽ち貔子窩より普蘭店に至る一直線以南の沿岸の直接封鎖を爲したる旨聯合艦隊司令長官より報告ありたり

明治卅七年五月二十七日

海軍大臣　山本權兵衛

金州南部の沿岸は、已に我制海權以内に在り、今特に封鎖を宣言せるは、當時既に旅順半島に對し、海陸より之を包圍して、運輸通信の途を絶ちしと雖も、尙ほ隱然支那ジヤング、其他の中立船に依りて、兵器糧食の供給及通信等を爲すに依り、攻圍の効力も爲めに頗る薄弱ならざるを得ざるに出づ。勿論此等は戰時禁制品として、拿捕

するの途なきにあらざるも、其手數煩雜にして又甚だ緩慢なるより、玆に公然封鎖を宣言して、絶對に艦船の出入を禁止したる也。

而して封鎖の任務に從へる艦隊の勞苦は尋常にあらざるなり。船舶の外より來りて封鎖線を破り以て、敵海岸に侵入せんとするものを臨檢し、之を拿捕して封鎖の目的を達せんが爲め、晝となく夜となく、風波と戰ひて封鎖區域を遊弋するの勞苦は、蓋し國民の想到し得べき所にあらざりき。其任務は花々しからず、時間亦長く、其苦心は却て閉塞、强行偵察にも讓らざるものありし也。

第二十六章　第一軍の活動

(一)　各方面の衝突

敵は黒木大將の都督する第一軍に對して包圍の形勢を示し、我進軍を阻止せんとする者の如し。即ち敵の左翼は遼東本街道の東方、蹩陽邊門より賽馬集附近に哥薩克の騎兵約五六千を分屯せしめ、中央部隊は本街道を扼して連山關、草河口、通遠堡附近の各地に數千の步騎兵あり、本街道の西には同じく數千の兵、岫巖方面即ち砂子崗、二道洋河、硝子河等、大洋河の流域に蟠居す。兩軍の形勢此の如くなれば、隨所に斥候の小戰を見るは理の當然にして、鳳凰城附近に於いて五月六日の斥候戰となり、同じく八日の四臺子の斥候戰となり、十一日には雪裏店に於いて敵兵約四百を走らし、斯くて高麗門より鳳凰城を經て雪裏店に至る間は、行く〳〵我騎兵の手によりて一掃せられ、今や全く敵の隻影を見ざるに至れり。更に岫巖方面を見るに、五月七日に於ける楊家屯附近の斥候戰となり、十九日には温家堡子の斥候戰となり、越えて一日、

五月二十九日には葉家勾の斥候戰となり、後大孤山上陸軍と連絡を通ずることを得たり。更に賽馬集方面を看れば、五月十二日に於ける大子河の戰鬪あり、この斥候戰に於て、敵の大部隊が、蹩陽邊門及び賽馬集附近に集合せるを確めたるを以て、吉田枝隊をして此敵を擊攘せしむ。枝隊は即ち二十八日午前十時より敵騎二千(砲兵なし)に向ひて攻擊を開始し、十一時半之を擊退して追擊中、他の一部隊又到着して之に加はり、全く同地を占領せり。敵の主力は賽馬集方面、一部は掛牌嶺方面に退却せり。我損害は吉田枝隊に於て、下士以下戰死三、負傷二十二。此戰鬪に參加したる他の一部隊に於て下士卒以下戰死一、負傷六なり。斯くして九連城鳳凰城より左右數十里の一帶全く我武に伏せるを以て、第一軍占領區域内に二個の軍政署を開設せられ、其一は陸軍步兵少佐松浦寛威其長官に任せられ、五月十一日より開署し、一は陸軍工兵中佐倉辻明俊長官たり。

(二)　賽馬集及び懷仁占領

佐々木縱隊の將校斥候は二十九日鐵陽邊門、褰馬集の中央新開嶺に據れる敵を擊退し、更に翌三十日二子石大尉(官太郎)の率うる將校斥候は褰馬集を占領したり、而かも褰馬集の地たるや我立脚地としては、守るに難く攻むるに易きの故を以て一度褰馬集を占領したる二子石大尉は、三十一日更に鐵陽邊門なる縱隊本隊と合したり、三十一日手島第三中隊(半次)は鐵陽邊門西北方の分水嶺附近に露營せる敵の四百餘を急襲して城廠方面に擊退したり而して一度褰馬集を我手に委せる敵は六月一日を以て再び大舉褰馬集附近に前進し來り、城廠及び褰馬集附近を回復せり、敵の兵數は約三千餘名、越えて六月三十日我兵新開嶺に於て敵騎六百餘と衝突し激戰の後ち敵は本隊の集合點たる褰馬集の方面に敗走したり、此戰鬪に於て彼の損害は非常に多く、其死傷約百名を下らず、我死傷僅に四名也。

別に又稻村隊(新六)及び千頭騎兵中隊(德治)は六月六日宿營地を出發し、松樹溝附近より佐々木縱隊の褰馬集占領を援助すべく其前進を續行し、左側草河嶺に敵の據れるを發見し、歩兵中隊を金河嶺に留めて敵に當らしめ、草河嶺の敵を左側に眺めつ

ゝ進む、此時石門子の敵は稻村枝隊の前進を知り西北方に退却し、枝隊は無事石門子に入るを得たり、而して前に金花嶺に殘留し置きたる歩兵隊は草河嶺の敵を擊退し、夕刻石門子なる稻村隊に追及したり、而して騎兵千頭中隊は更に其東北方に前進し佐々木縱隊の褰馬集占領戰に參加し敵の連山關方面に於ける退路を扼しぬ。

各部枝隊の前進を豫期せる佐々木縱隊は窪田少佐(秀三)を鐵陽邊門に殘留し、七日曉明褰馬集の敵を擊退すべく、其宿營地太平溝を出發せり。

我軍進んで褰馬集の東南方車家嶺、楊木林子附近に達するや敵の大部隊と衝突し、午後零時三十分より三時に至るまで戰鬪を繼續し、敵の頑强に抵抗を試みたるに拘らず終に之を擊退したり、後敵騎五六十は我後路を絶たんとし、迂廻して鐵陽邊門に迫りたるも、留守隊の爲めに脆くも擊退せられ倉皇退却したり。

鐵陽邊門を占領したる吉田枝隊の一部隊は六月十一日坎椽口に於て敵の乘馬歩兵約一百を擊退し、十二日渾江左岸四個子に於て敵の小部隊を驅逐し、午後三時懷仁を占領したり。敵は露兵三百馬賊三百にして、五道家附近に退却せり。我兵死傷なし、敵

の死傷は即死三、負傷二なりき。

懷仁縣は鴨綠江右岸の上流に在り、地方富饒にして韓滿接境の都會なり、此處に馬賊巨魁張占元あり其部下馬賊二中隊にして露軍の馬賊統領マドリノフ中佐も同地に在りたりと傳へらる、同地の占領は北韓にある露兵の退路を絶ち、又吉林其他より遠く來りて我後方線を奇襲せんとする進路を扼すべく、鳳凰城の後方は之に依て大に安全なることを得たり。

佐々木枝隊は再び褰馬集を占領したる後、鰕陽邊門に歸りしが、敵は再び褰馬集附近に集合したるものゝ如く六月二十二日約歩兵一聯隊騎兵二聯隊砲兵一中隊より成る敵兵は褰馬集より前進し、鰕陽邊門にある一部隊を攻擊せしも、枝隊は之を新開嶺方面に擊退したり。此戰に窪田少佐戰死し、下士以下九名負傷せり、敵の死傷は尠なからざるが如く、現に認めたる損害は死五、負傷二十餘名ありたり。

(三) 岫巖の占領

岫巖は大孤山より海城に通ずる要衝に當り、城廓低地にあり。特に東北方面の丘陵脈より瞰制せらるゝを以て防守の要地と稱すべからざるも、海城を守備する露軍としては、日軍を控制するの第一戰として必要の地域たると同時に、我日本軍にありても亦平野に進入するの門口として之を占領するの必要あり。日清戰爭の時には第三師團の前衛、城の南方廟溝より進み第五師團の一部は城北興隆勾より進み南北挾擊して之を陷れしが、今回も亦南は大孤山上陸軍之に當り、近衛の淺田枝隊は北方に進み前後の計畫全く軌を一にしたり。淺田枝隊は稍以前より沙里寨を經て二道洋河附近に前進し居りしが、六月七日大孤山より土門子を經て岫巖に北進する大孤山上陸軍を援助するの目的を以て部署を定め、翌八日支隊に屬する騎馬の一隊は頭道子溝より紅旗營を經、岫巖東北方約一里半なる刀家堡子に出で、支隊右側の警戒に任じ、第一大隊の吉原隊(松太郎)は紅花嶺に停まりて支隊の左側背を掩護せしめ、石澤少佐(盛松)の大隊は別働隊として午前四時三十分を以て二道洋河を出發し、岫巖の北方約一里なる冷家隈子附近に進みて敵の左側を襲ひ、兼ねて其退路を扼せしむ。支隊は二分して左右二縱

刈となり、右縱隊は、午前六時三十分張家堡子(紅花嶺の西)を出發し、三道虎嶺溝、三道虎嶺、礦洞溝、黃旗溝を經て城東溝に向はしめ、左縱隊は淺田隊長自ら之を指揮し、午前六時三十分砲臺地下(二道洋河の西半隊)を出發し、趙家堡子上營子を經て步武肅々として岫巖に向ふ。

午前十一時十五分、淺田隊は上營子東方阪路に於て大休止を爲さんとする一刹那、岫巖方面に於て頻りに砲聲の轟くを聞く、午後一時上營子の西北方に達したる時恰も敵の騎兵五六百許り大虎嶺西南鞍部を占領し、盛に他の獨立騎兵及び其支隊として阪隨せる步兵中隊を射擊し頑强なる抵抗を試みつゝあるに會す、是に於て淺田隊は時を移さず味方を援助し、我步兵隊を以て敵の兩翼より激烈なる包圍攻擊を行ひ、奮戰突進して、午後二時二十五分丘山の敵を西方に擊退せり、之を見るや、今まで沈默して岫巖西南方の高地に據れる敵兵は我占領せし大虎嶺に向ひ盛なる砲擊を開始したり。

此時枝隊の砲兵は未だ來り會せず、且つ道路崎嶇にして峻嶮なる阪路多かりしに依り、途中に遲留して戰鬪に參與せしひるの望なく、又敵の陣地は我小銃射程以外にして且岫巖の平野には大なる水流のあるあり、砲火の援助なくして此開豁地を前進せんか、我は極めて不利なる地位に陷らざるを得ず、去れば彼我水を隔てゝ睨視せしが、淺田隊は石澤大隊が敵の背後に出でゝ之を襲擊するの時機を待て前進せんことを期せり。

是れより先き石澤大隊は岫巖東北方約一里なる興隆勾附近に於て、數回敵騎の爲めに進路を遮斷せられんとしたるに拘らず、之を擊破しつゝ、午後四時頃冷家隈子を占領し、更に石家堡子に向て行進するや敵は既に左翼を壓迫せられて早く動搖の色を呈し來りたり、是に於て淺田隊長の指揮下にある左縱隊は機乘ずべしとなし、水を涉りて岫巖の南方に向ひ、右縱隊と互に連繫を保ちつゝ包圍攻擊す。敵は終に防守すべからざるを察し、收容陣地を西北營子北方の河磧に選定して我に對し、其砲兵は新たに西北營子西方高地に砲兵陣地を敷き、城東溝の谿谷を縫うて進擊する我步兵に對し猛烈なる砲彈を加へ以て其第一線の退却を掩護したり。砲彈落下すること急驟に似たりと雖も我勇敢なる各隊は之を冒して進一進漸く敵壘に突進し、退却する敵兵を追擊して遂に岫巖を占領するとを得たり。

此日敵の兵力は山巖及其他を合して騎兵約四千（乘馬步兵若干を含む）砲十門を下らず、而して其主力及び砲兵は蓋平附近より卜家堡子を經て栃木城街道に潰走せり、就中大虎嶺に在りし敵騎は石澤大隊の冷家堡子に到着せし以前自家堡子に在りし糧秣倉庫を燒棄し既に栃木城街道を退却せり。我損害戰死卒一名、輕傷二十二名。

第二十七章　運送船の遭難

（一）意外の慘禍

浦鹽艦隊が金州丸を轟沈せしめたる以來同艦隊の消息は杳として聞くことを得ず、次で我上村艦隊が艦艇相銜んで浦鹽砲擊を爲すや、敵の艦隊は港內に蟄伏して出で來らず、爾來浦港は我威力のために殆んど間接封鎖を行はれたるが如きの觀を呈し、中外の視線は只齊しく旅順の海陸方面に注がるゝ時、警報忽焉天より飛來して一大慘禍を報ぜり、六月十五日戰地を指して進める十餘の運送船は、わが近海に於て浦鹽艦隊のために心のまゝなる暴行を蒙れり。人は死し船は沈む、沖の島の附近水爲めに紅ゐなり。嗚呼是れ何等の慘事ぞや。

此一大慘禍の事實を述ぶるの前、先づ浦鹽艦隊が何故に這般の暴行を企つるに至りたる乎に就いて叙する所なかるべからず。

是れより先き、五月二十五日倫敦エキスプレス通信は曰く、露國はスクリドルフ提

督の着任と共に、浦港を根據地として太平洋方面に活動するの新計畫を定め、スクリドルフ提督は一萬よりなれる要塞兵の組織を改革し、艦隊には有力なる水雷艇隊を加ふる事となし、水雷艇の材料の各部分は之が組立に要する職工と共に既に鐵道にて浦鹽に送られたり。而して露國の新に活動すべき方面は固より日本海の北岸より及ぶ可くむば朝鮮海峽の附近にあり、恁くて黃海に於ける日本艦隊の主力を分ち、以て波爾的艦隊をして突進せしむるの餘地を作らんとするに在り、云々。以て知る可し。渠等の南下策は既に一ヶ月以前既に業に決定し居れるものなるを。蓋し陸上を見れば、我第一、第二及び大孤山上陸の三軍確實なる連絡を保ちて、敵の南下を阻みて旅順を孤立に陷らしめ、而して海軍の方面を見るにマカロフ提督戰歿して以來、幾たびか吾が攻擊、封鎖に遭うて、殆んど戰鬪力なきに至れるのみならず、遼東半島南部封鎖の宣告と共に、旅順艦隊は、港外に出航することだに危險となれり。さればマカロフ中將の戰死により、代つて東洋艦隊司令長官の重任を帶びしスクリドルフ中將は、折角東洋に來れども、旅順口に入ること能はずして、浦鹽斯德に止まらざるべからざる悃なる有樣とはなれる也。

形勢漸くの如くなれば、敵は海陸相應じて、旅順口を救はんとの計畫を立てたるものゝ如し、得利寺の遭遇戰が、六月十五日にして、浦鹽艦隊の南下が、同日なるを見れば、其の計畫は瞭々として見るべし。詳言すれば、陸兵は全力を盡くして南下せむとし、浦鹽艦隊は、對馬海峽又は朝鮮海峽に遊弋して、吾が艦隊の旅順方面に向へるものゝ一部をおびき出し、旅順口封鎖の弛みたるに乘じて、旅順口艦隊と氣脈を通せむとせるに在るや亦疑ふべからず。

是に於て浦鹽艦隊は、十五日午前七時頃を以つて、沖の島と對島との間に入り來り、二手に派れて、グロムボイ先づ和泉丸を擊沈し、次いで合して常陸丸、土佐丸を擊沈し、壹岐對馬の間まで大膽に南下し、巧に我が艦隊の追擊を避け、十六日午後二時頃隱岐國附近を通過して北方に去れり。歸路英船アラントン號を捕拿し、十八日午前五時頃には、北海道福山沖なる小島沖に航し、安靜丸、八幡丸の二汽船を擊沈せるなり。當時海上にありし不幸なる我船舶は左の如し。

日の丸　△常陸丸　佐渡丸　金澤丸
△和泉丸　膽振丸　幾内丸　江の浦丸
芙蓉丸　羽後丸　吉林丸　土佐丸

（△印あるは撃沈せられたる汽船なり）

上記の汽船中、常陸丸、佐渡丸、幾内丸、江の浦丸、金澤丸、日の丸、膽振丸の七隻は、十五日朝門司を解纜したる船にて、和泉丸、羽後丸、芙蓉丸、土佐丸、吉林丸の五隻は戰地方面より本國に向け歸航中なりしも也。

（一）和泉丸の最後

浦鹽艦隊の最初の犧牲となりしは御用船和泉丸也。該船は日本郵船會社の所有に係り、總噸數三千二百二十九噸の鋼製汽船也。同船が、或任務を畢りて、某地を出發したるは、六月十二日午前十一時なりき。此時後備輜重兵伍長遠藤幸太、同上等兵高松三郎、及び某海軍兵曹長の三名は、別に重要なる任務を帶びて該船に便乘し、宇品

に向て出發したり。十五日午前四時には壹岐沖を通過し、午前六時頃には北方迥かに軍艦らしきものを認めたれとも、固より敵艦なりとは夢にも知らず、漸時進航中、午前八時門司を距る四十浬の海上に至るや、黑色の敵艦、北より廻り來りて、本船の艦部より追ひ來りぬ。是れクロムボイ艦也。忽ちにして敵砲は午前八時過ぐる頃飛來し、續いて亦もや一發飛び來つて、舶部を去る一町許の海中に落下し、第三砲彈は船體附近に落下したり。是に於てか和泉丸は、全速力を出して進航しけるが、此時敵艦は既に本船の右舷半浬に來りたれば、止むなく船を止めて、右舷に二隻、左舷に一隻の端艇を卸して、船員の多數は乘り移りぬ。かくて右舷の端艇が、本船を離るゝこと一町許なるや、轟然として一發の砲は飛び來り、右舷に中つて貫通し、爲に左舷の端艇は破壞せられ、同船にありし船長、機關長、事務長等二十名は海中に陷り、別に四名の即死を出せり。

右舷を離れし端艇に向つて、敵は荐りに旗を振り、或は手を擧げて、來れとの意を示しければ、一等運轉士は、救助せんことを請へり。敵艦は直ちに端艇を卸して、船

長以下漂流せる者を收容したり。此際三名は溺死せるものの如し。

和泉丸の船員は前記三名の兵士の外に、百八名なりしが、内即死八名、重傷十名、輕傷十五名ありしのみにて、他は皆無事なりき。露人は船員をクロムボイの甲板に收容したる後一同を整列せしめ、四人毎に一名の歩哨を置き、負傷者は醫員室に運びて治療し、又各にシャツ、ズボン下などを與へて、待遇甚だ懇切なりき。此間敵は和泉丸を砲擊し、該船は白煙を擧げて沈沒せり。

一同は甲板下なる暗室に入れられ、外出を許されざりしが、十八日突然一發の空砲を聞けり。同時に敵水兵來りて、人夫だけは甲板に出でよと命せり。遠藤、高松の兩兵士は、巧に人夫なりと詐りて甲板に出づれば、嘗れしや三井物産會社の帆船運礦丸眼前にあり。敵は端艇を卸して、二十名の人夫と遠藤、高松の兩人とを運礦丸に移して歸還を許し、直に北方さして急行せり。幸運なりし二十二名は大に喜び、尤も近き舞鶴に上陸して鄕里に歸りぬ。

(二) 常陸丸の最後

御用船常陸丸は佐渡丸と共に或る任務を帶び六月十四日午後六時を以て、宇品を解纜し、翌十五日午前七時には關門海峽外の六連島を經て、同九時には、最後の島たる白島を通過したり。此の日海上は極めて平穩なりしかど、曇天なりしため、四五海里内外は何物をも看取すること能はざりき。兩船は初め並行して進航しけるが、沖の島に近きし頃は、佐渡丸先となり、常陸丸は遲れて進航せり。敵艦は和泉丸擊沈以前に於て、此二隻を認めたるが如しと雖も、距離遠かりしため、先づ和泉丸を擊沈したる後轉じて此二隻に向ひたる也。

午前八時を過ぐる頃なりき、四方海霧に掩はれて何物も見えず、只遙に砲聲の殷々たるを聞く。衆皆思へらく、恐らくは我が艦隊の演習を試みつゝあるものならひと。敵艦が和泉丸を砲擊しつゝありとは、夢想だにせざる所なれば、衆皆平然として談笑せり。該船には近衛後備聯隊第五、六、七の三中隊の兵士千九十五人、船員百二十人、

外に馬匹三百二十頭其他重要材料を搭載しあり。船長は英人カンベル、機關長同じく英人也。

忽ち看る濃霧を破つて一隻の巨艦現れ、黑煙を揚げて常陸丸に向ひ來りぬ。近きたるを熟視すれば、三本檣、四本煙突のクロムボイなりき。船に武裝なし、途只逃ぐるの一あるのみ、即ち俄かに船首を轉じて、遁走を企つるや、敵は快速の巡洋艦なり、忽ちにしてロシヤは右舷に、リユーリックは左舷に、各千米突の距離に接近し來りて、停止を信號せり。船將に停止せむとする一刹那、敵は無法にも發砲し、續いて二三十發亂射せり。砲彈甲板に爆發し、或は舷を貫き、其の響や百雷の一時に落ちしが如し。而して最後の二發は機關部の一部に命中したるが故に、船は進退の自由を失ふに至りぬ。

然るに敵艦は何思ひけむ、もと來し方に退きしが、眞に損害を與へたるものは、僅に四五發のみにて、船の尙ほ健全なるを見るや、敵艦再び接近し來り、ロシア號は五百メートルの距離より五六十發の砲火を放てり。此砲撃によりて、常陸丸の機關部は全く

破壞せられぬ。此の時に至るまで、兵士は長官の命令によりて、室內に靜坐せしが、第一回の砲撃にて、多くの死傷者を出し、今亦激烈なる砲火を受けしかば、聯隊長中佐須知源次郎は、衆を甲板に上らしめて、最後の命令を下せり。

兵士は悉く甲板に立てり。須知聯隊長沈痛なる語調にて最後の訣別を述べて、室內に入りぬ。內には中隊長大尉長尾庸三、同大尉橋本省三、其他將校十八名と兵二三名居り、中佐の室中に入るや、旗手少尉大久保正、聯隊旗を捧げて中佐に向つて曰はく、小官は聯隊旗を寸斷して嚥下すべけれども請ふ安じ給へと。聯隊長制して曰はく、憂ふる勿れ、吾れ之を適宜に處分すべしと、言未だ終らざるに、巨彈此に命中して、無慘にも十二人は卽死せり。長尾大尉重傷を負ひながらも、屈せず帶劍を拔きて割腹し、大隊長少佐山縣俊信、大刀を拔き腹一文字に搔き切り、橋本大尉は拳銃もて自殺せり。此の時室內に殘存せしは、須知中佐と一人の兵士とのみ。兵士室外に出でゝ甲板に至れば、血潮に滑べりて步し難し。再び聯隊長室に歸り見れば、須知中佐は既に聯隊旗を燒き終りて更に旗竿の半ばを燒き盡せり。折しも巨彈再び此の室に中り、中佐は遂

に瞑目せり。何等の慘ぞ。

彼の兵士は亦もや甲板に出で、身を海中に投じたり。續きて投身せるもの二百名許り、渦卷く波に漂ふほどに、平素大音の聞えありし大友軍曹は、今を限りの聲あげて、「討てや懲せや露西亞國」の軍歌を歌へり。衆之れに和して、悲壯の樂は波に響きぬ。

船は容易に沈まざりき。敵艦は二百メートルまで接近し來りて、三百發の砲彈を亂射せり、甲板上には屍山を成し、海面鮮血を湛えぬ。敵は我兵一人も餘さず虐殺せむと欲したるなるべし。船は艦部の吃水下に十餘發を受け、盛んに白煙を揚げ沈沒せり、時に午後二時半頃。記せよ。我が兵皆な船と運命を共にせり、殊に記せよ、捕虜となれるは一人もなかりし也。殊に船長カンベルの如きは、外國人なるに拘らず、最後までブリッチに在りて職務を全うし、萬事窮するや、事務長太田耕平と共に海底に沈めり。彼は船長として日本郵船會社に在ること二十年、遂に職に殉しぬ。

船の將に沈まむとするや、兵多く海中に飛び入りて、木片に縋りて漂ひぬ。此内五十二名は端艇に乘り移り運を天に任せて漂ひ、十六日曉に至るや、大形の汽船を見たり。

聲を限りに呼べば日本國旗を出せり。衆喜び極りなく、勇を鼓して近き見れば、計らざりき殆んど同時に敵艦の攻擊を受けし佐渡丸ならんとは。兩船の人々嘻し涙に咽び知るも知らぬも抱き合うて萬歲を祝しぬ。恰も好し帆船第一宮川丸來りたれば（十六日午後二時）救助を求めたるに、彼の船員は、積みし荷を海中に棄てゝ、收容し得るだけ遭難者を乘せ、次いで伊勢丸來り、十七日午前八時には日の丸に出合ひたれば、常陸丸、佐渡丸の遭難者は、同日無事下ノ關に到着するを得たり。

他の一部は僅かなる木板に縋りて、波のまに〳〵漂ひけるが、其の中には、溺死せるものあり、僅に生き殘れる者も今は氣力盡き果てゝ、運を天に任せてありけるに、幸にして、山口縣萩の漁夫佐伯作松の所有に係る漁船住吉丸によりて救はるゝを得たり。

常陸丸は日本郵船會社の所有船にして、船質鋼製、總噸數六千百七十五噸、速力十四節の大汽船なり。總乘組員は百二十人、舵取以下十六人は救助船に收容せられたり。他多く悲壯の最後を遂げぬ、而して須知中佐によつて率ゐられたる近衛後備歩兵第一

聯隊の兵員、實に七百四十二人は萬斛の恨を呑んで空しく海底の藻屑と消えゝんぬ。

嗚。

（三）佐渡丸の遭難

常陸丸に尋いで佐渡丸の慘狀を語らざるべからず。既記の如く同船は、常陸丸と共に宇品を解纜し、馬關海峽を通過するや、少しく前進せり。午前九時、後れて航行し來れる常陸丸が回轉するを見、人々怪みて尙ほ窺ふに、左舷陸上の方約二千突の處に、一隻の軍艦現れたり。よもや露艦とは思はざれば、何事かなすと眺め居たるに、突然一發の砲彈は、常陸丸に加へられ、又續々として砲聲起りしかば、今は敵國艦隊なるを知り、如何にせばやと思ふまもなく、グロンボイ、リユーリツクの二艦は、本船の左右を圍めり。敵艦は本船に向ひて、砲彈を亂射したれども、何れも命中せずして海底に落ちたり。されど佐渡丸が舳を轉じて逃げんとする一刹那、巨彈來つて、機關部を破壞したれば、最早や進行する能はざるに至れり。敵は信號もて、非戰鬪員

は去るべし、戰鬪員は此方に來るべしと命じたれば、監督將校小椋中佐は談判のために單獨敵艦に赴きしが其儘歸り來らずなりぬ。

小椋中佐と行き違ひに、敵少佐一名、兵十餘名を率ゐ、端艇にて佐渡丸に來れり。此の時船員は食堂内に會議しつゝありしが、或者は今來れる敵士官を撲き殺して、一同潔よく自殺せむと主張し、或者は敵艦に突進して、最後の運命を決せんと云ひて、議容易に決せず。室内には靴上着など取り亂し有りたれば、星野少佐（庄三郎）外二三の人々は、斯る醜體を示すを恥辱なりとし、總てを海に投せしめぬ。

便乘者中青泥窪居留民梅田潔は、船長室にて敵士官と問答し、歸り來つて報ずらく、敵は四十分の猶豫を與ふるが故に、非戰鬪員は速に立ち去り、戰鬪員は敵艦に移るべきを以てせり。星野少佐大に怒り、直に梅田を伴ひて船長室に至れば、室前に露兵一人立てり、少佐は大喝一聲、我れは日本の士官なりと怒鳴りしかば、彼の水兵は駭きて捧銃の敬禮を行ひぬ、死生一髮の間に尙ほ此滑稽事あり。

星野少佐は該敵士官に向ひ、獨逸語を解するや否やと訊ねしに、彼は知らざる眞似し

たれば、梅田を通譯として、本船には非戰鬪員多數にして、軍人は少數なり、而して軍人としては非戰鬪員を救助するの責任あるか故に四十分以上の時間を與へよ、なほ人道のため、汝が艦よりも端艇を出すべし、との意を通じたれども、彼は頑として動かず、尙ほ四十分〳〵と繰り返へして、立ち去らむとせり、星野少佐大に怒り、日本には捕虜となる腰拔武士は一人もなしと大喝し、且つ成るべく永く彼を引き止めむと欲し、再び獨逸語もて話しかくるや、先に之を解せずと言ひし彼は、流暢なる獨逸語もて應答し且つ此時傍にありし、佐藤中佐に向つて、我艦に來れと勸めしかば、さなきだに憤懣せる中佐は、最早や堪へ難く、鐵拳を固めて打ち掛らむ勢を示したれば、敵士官大に驚き、狼狽して逃げ去りぬ。事こゝに至る、最早や逃るべき道なし、輸送指揮官田村工兵大佐は船員一同を後部上甲板に集めて左の訓令を與へぬ。

本船は今や露艦三隻のために包圍攻擊せらる。余は元より軍籍に在るものなれば、逃るゝ心なしと雖も、諸君は非戰鬪員なるが故に、逃るゝも、或は捕虜となるも、諸君の決心に一任すべし。諸君若し逃れむと欲せば、幸にして陸地は近し、逃れ得

るだけ逃れて、此の報道を其筋に傳へ給へ。

何等沈痛悲壯の言ぞ、此訓命に接するや或は海中に飛び込む者あり、或は墮落する者もありて、本船附近は、海上人を以て埋めらるゝに至りぬ。暫時にして敵艦二隻、佐渡丸を圍み、四十分の猶豫などあらばこそ、忽ち一發の水雷を放ちぬ。されど命中せず、靜岡工兵大尉は、必死となりて船の損所を修繕し、竹内工兵中佐は、總員を督して力を盡くせり。

星野少佐は鉛筆にて遺書を認め、既に自盡せむとしければ、衆之を制して、死なば諸共に死せむ、先づ一同最後の酒を酌み代さひとて、シャンパン酒を拔き口より飲み移しにして、天皇陛下の萬歲を三唱せり。一同はてゝに最後の決心をなせる時、第二の水雷は來りて機關部に當りぬ。敵艦は此の樣子を看ると共に北方さして退却せり。蓋し第二水雷を以て、佐渡丸を擊沈し得たりと信じたる也。而も佐渡丸は、進退の自由をこそ失ひたれ、未だ沈沒する程の破損を生せざりし也。

某將校當時の心中を語りて曰く、水雷の爆發と共に沈沒せんと決心せし一刹那には、

何事も思はず、又悲しとも喜しとも考へず、遺族の如何にも思ひ及ばず、唯我運は玆に盡きぬ致方なしと思ひしのみ。然るに已に危險の去りたる後に至り、已に斯る危險を無事に通過せしからには、余が武運は未だ盡きざるべし、何とかして余のみならず本船の生存者を何とかして助けたしと、此苦心慘憺は實に從容死に就くよりも困難なりと。かくして此危境を脱せむには、成し得る限り長く船を浮ばし置くに在るも、如何にして浸水を止むべき乎、船員は船長始め悉く逃げ走り、僅かに水夫同樣のもの六名位留まりしのみ。是とて救濟策の顧問者としては甚だ覺束なし。去れども是等を督して排水に勉めつゝありしに、夜に至り風雨益々猛烈を加へ、健全なる船舶さへ難破を免れざる程の天候となりぬ。此間第一に苦心せしは現在船は何れの地に漂流しあるかの一事なり。東風烈しかりしより推考せば、或は對馬又朝鮮南岸にまで吹き流されゐるやも知れず、加之漂流しつゝある我船が、暗礁又は陸岸に乘り上げ破壞せずとも計り難し。夜闌なるに及び船は益々左舷の方に傾き、動搖甚だしく、破壞部より侵入し來る激浪は、舷の中央に噴騰し、雨は篠突く如くに甲板上を洗ひ、其惨絶云はん方

なし。海事に稍々智識ありと思はるゝ軍夫等は、最早や到底見込なき旨相語り、浮囊を纏ひ急造筏を準備する等、避難の支度に忙はし。下士は殊勝にも將校の爲めに浮標を集め、之に椽木を十字に結付け、萬一轉覆せんとする間際には、將校と共に之に取附き、賴み難き運命に身を任せんとて此等の材料を船橋上に準備せり。此時に於ける約束は實に悲慘なりき、曰く、我等は俱に與に運命を決せん、我等の内一人にても生存しあらば、他の遺骸の處置を爲さん。我等は浮囊を纏ひ且身を繩にて浮木に縛し置かん、危難到底免れ難きを認めし時は、皆共に此の場所に集らんと。時已に十六日午前二時頃なりき。衆皆最早や船は轉覆を免れざるものと思惟し、約の如く其場所に來れるに、幸なるかな、少焉にして風休み、波收まり、危險は稍々減じたるものゝ如くなりぬ。三時過ぐる頃遠く探海燈の光を認めたり。或は救助の爲我軍艦の來れるなりとも云ひ、或は敵艦の尙彷徨しあるならんとも云ふ。友か敵か招かんか潛まんか、誰しも惑はざるを得ざりしなり。やがて天明けて、曙光を認め、雲霧吹き散じて稍ゝ遠望し得べき時、前方に二三の漁船らしきものを見出せり。先づ第一に之を招き、何地

に漂流しあるかを問はんと旗を以て之を招きしに、豈計らんや最初に來りしは、我船より昨日避難せし非戰鬪員等が、終夜洋中に漂ひ、我船を認め救を求めんとて近き來りしなりき、即ち之を收容せり。次に收容せしは常陸丸の避難者にして、殆んど全部砲彈の負傷を受け、而も十五日朝食以來一粒をも食せず、其狀態の悲慘なる名狀すべからず。此の如く尙ほ一二の短艇を認めしも皆遭難者のみにして、偶々煤煙を認むるあるも多くは數十海浬の遠方にありて、救助船の來るべしとも思はれず。或は本船遭難の狀況未だ內地に達し居らざるやの疑あり。

是に於て內地との連絡を取る爲め、通信船を差遣することに決し、決死の士十四名を選拔す、川人少佐が司令たり。永富、樋口及南の三曹長も亦選に當る。三曹長は中佐の部下なり。別に臨み涕泣中佐に向つて曰く、必らず速かに救助船の來らんことに努力すべし、願くは健全なれ、但し若し萬一のため承り置くべき事なきかと。中佐答て云く、亦別に云ふべき事なし、唯若し萬一の事あらば我等が死を決せし折の實況を語り、我等が露人の捕虜とならず、漂流して遂に海中の藻屑となりしことを世人に

告げよと。かくして彼等は勢良く出發せり。時に十六日午前七時なりき。同日午前十時頃遙か四五海浬の海上に帆船を認む。其航進方向は恰も我に向へり。我は鐘を鳴らし、又危險信號を爲せり。帆船は近づきぬ、午前十一時頃船員二名身を躍らし海に投じ、我船に攀登し來れり。此船は第一宮川丸と稱し、約百五十噸の帆船にて、石炭及テールを搭載し長崎に向ふの途中なりき。該船に就き收容人員を算測すれば、其積載物を打捨つるも四百五十人位を容るゝに過ぎずと云ふ。然るに在船者は爾來增加し、約五百五十人ありて、約百人は之を收容するを得ず、依て收容し得る限りを帆船に收容し、其他は端艇又は急造筏に乘せ、帆船にて曳き往くことゝなり、積載物を捨てゝ漸次之に移乘せしむ。十七日午前三時頃に至り、救助船伊勢丸の來るに會ひ之に約百五十人を移乘せしめ、午前八時頃救助船日の丸至る、依て之に挽曳を依賴し、午後五時頃無事門司に到着せり。

佐渡丸は西曆千八百九十七年、愛蘭ベルファストなるウオークマン會社の建造に係り、常陸丸と略ぼ同一の式にして水量六千二百二十六噸也。同船の乘組は總計千六十

九名にして、馬匹三百二十一頭あり、乘員中には鐵道作業局より派遣せる者七百九十八名居れり。將校は總て無事にして、六月二十一日迄の調査によれば、鐵道作業局派出員中生存者六百三十六名なり。此の他約三百人の生存者あれば、敵艦の人命に及ぼせし損害は僅小なりき、煙突より前後にはさしたる損傷なく、後檣部の附近に破損の跡を見るのみ。これ一局部の損害なれば、直に修繕に着手し十一月を以て終れり。

此の他の運送船は如何、日の丸は十五日午前十一時二十分、白島の西方二十浬に敵艦を認めたれば、直ちに船首を元と來し方に轉じて難を避け、後方より來りし金澤丸に危險を報じて共に筑前大島と地ノ島との間に隱れ、正午頃には膽振丸來りたれば、是れ亦危險を報じて難を避けしめたり。畿内丸は十五日午前七時、常陸佐渡と共に、六連島を過ぎしが、躰て前二船の影を失へり。忽ち砲聲を聞きしも別に怪む所もなく前進しけるに、敵艦を四五海里の海上に認め、且つ兩船の遭難をも見たれば直に轉じて江の浦丸と共に、筑前大島に避難せり。

羽後丸は六月十二日某戰地を發し、十五日午前七時半、對馬沖に來りし時、我巡洋

艦に邂逅し、敵艦此の附近に游弋すとの報を受けて大に驚き、時しも本艦の右を陸地に沿うて航行中なる和泉丸にも、此のことを傳へむと欲したれど、距離遠くして及ばず、忽にして、二隻の露艦現れて和泉丸を圍めり。船長は乘員を警戒し、船首を一轉すると共に、十三浬の最速力を出して後退せり。然るに敵艦グロムボイは、本船を追ひて、九時十三分には六千五百米突の海上に來りぬ。轟然一發、砲彈は船上を越えて、前進路に落ちたり。これより後、敵は數彈を發したれど、我れは巧に是をさけて急航せり。然るに全速力を出したるため、機關に故障を生じ、蒸氣漏出して船の進航遲々たるに至れるを以て、艦長は四隻の端艇を兩舷に吊して船員を乘らしめ、萬一の場合には綱をきりて逃げよと命じ、重要書類は悉く之を燒棄し、尚不完全なる舵機を使用して逃げ延び、陸地三海里の點まで至るや、敵艦は漸く引き返せり。これにて一同蘇生の思をなし、萬歳を祝しつゝ勝本港に入りぬ。續いて芙蓉丸、武揚丸も避難し來れり。かくて三船無事門司に入れるは十八日午後六時なりき。

（四）北海の蠻行

玄海沖に於いて、亂暴狼藉到らざるなき露艦は、我艦隊の來るを恐れて、佐渡丸の末だ沈沒せざる頃、北方さして逃げ行けり。蓋し浦港には歸らず、北海道さして航行せる也。途に舞鶴に至り英國船アラレトン號の佐世保に石炭を陸揚し、今や室蘭に航行中なるを認め、停止を命じて船中を檢査し、船舶證明、航海日誌不明の件を以つて是を捕拿し、船員一同（其内邦人一名あり厨夫なり）、をロシヤ號に移し、汽船はペトロフ大尉の率ゆる一部隊に命じて浦港に回航せしめたり。

十八日午前五時函館飯田信三所有の汽船新湊丸は、小湊に進航中なりしが、渡島國江良崎沖にて露艦に遭遇し、種々尋問せられたる後、航行許可を得たれども、危險なれば福山港に避難せり。

尋いで敵前に來りたるは、函館山本順二所有船巴港丸にて、鮭糟と雜貨とを載せて、利尻より青森に向け進航中なりしもの也。船員の軍艦を見るや、日本艦隊の北海に向

ふものなりと信じ、新しき國旗など用意して、大に歡迎せむとて近き見れば、思ひきや敵艦なりしかば、船長は重要書類を燒きすて、萬國信號書を携へて、ロシヤ號に赴けり。面會したるは白髯鬱々たる老將軍なりき。彼は日本軍艦の圖を示して、何艦は何處にあるや。函館には軍艦何隻ありや等の質問したれど、船長は何事も不明なりと答へ、且つ我船は漁夫のみにて、今は利尻より青森に航行中なりと告ぐるや、彼れ老將軍は更に日本新聞を所持するや、蜜柑は有らざるか、など問へり。船長は何物もなしと告ぐ。問答終るや、歸航を許されたり。

敵の巡洋艦隊が、玄海沖方面に暴行を逞うしつゝありし間に、安靜丸、八幡丸の二商船はエノグラドスキ大佐の指揮せる水雷艇隊のために北海道附近に於いて暴行に遭ひぬ。安靜丸は鯡〆粕を載せて、馬關に航行中、六月十六日敵水雷艇のために擊沈せられ、乘組員十五名の中、二名は行衛不明となり、十三名は江差に無事上陸したり。八幡丸は同時午後六時、小島沖の五十浬海上にて、露國水雷艇に遭遇したり。敵艦は端艇を卸して、士官以下十數名該船に來り、種々訊問する所ありしが、折から通過しつ

、ありし寶德丸を停止せしめ、八幡丸船員十五名を乘移らしめ、荷物を掠奪したる後、船を擊沈して去りぬ。尙水雷艇隊長は、八幡丸船長に一書を托せり。書は函館要塞司令官宛にて英文もて書されたり。其の要領に曰はく、

「本官は蟲沈貴國船に對し、其人命救助を保留し能はざるを遺憾とす、該件に就ては總て貴官に於て擔任あらむことを希望す」と。

暴言も亦極まれりと云ふ可し。此日清榮丸も亦蟲沈の不幸に會へり。

(五) 上村艦隊の行動

斯くの如く、運送船の受けたる一大慘禍に對して、國民は痛恨措く能はず、只上村艦隊の復讐的一大快報を齎らし來るべきを信じて、只々之れを待ちぬ。

果然！、上村艦隊の露艦追擊の報は相踵いて來れり。結果奈何、之を上村司令長官の報告に見よ。

上村第二艦隊司令長官の報告に曰はく、六月十五日午前八時哨艦對馬の無線電信に

依り、敵艦隊沖の島附近に現はれ南方に航行するを知り、直に水雷艇隊を急行せしめ、對馬壹岐間の水道を警戒し、西方より來る船舶に對し、竹敷に避けしむべきを命じ、又門司港務部に電報を發し、西航の船舶を停止せしむべきを傳へ、在竹敷及び哨艦服務中の諸艦に、無線電信を以つて、至急來會すべきを命じ、本隊は對州南端を經て急航せり。當時天候次第に險惡となり、暴雨これに伴ひ、屢ば後續部隊を見失ふに至りしが、神崎附近に至り、一艇隊を本隊に合せ、敵艦隊を北方より壓せむが爲め、針路を沖の島の北方に取れり。

此間哨艦對馬は、絶えず敵艦隊と觸接を保ち、敵情に關する報告を務めたり。正午哨艦對馬より無線電信を以て、敵艦隊は、沖の島南方約十五海里にありて、北西に航進すとの報に接し、次で濛雨の爲、艦影を失すとの報に接す。午後一時半沖の島の南約五海里に於て、再び敵艦隊を發見せしも、濛雨の爲直に之を見失ひたりとの報に接せり。依て針路を右轉し、敵艦隊の所在地たる沖の島の南方に邁進せしが、此時濛雨最も烈しく視界益す狹きが故に、敵と會せば直に接戰距離に入るべきを思

ひ、益す各艦を戒飾しつゝ航進し、敵を搜索せしも遂に之を發見するを得ず。此時哨艦對馬列に入るの報に接す。

茲に於て本職は、敵艦隊が、濃霧濃密なるに乘じ、既に北方に退却せしものと判斷し、之を追尾せむが爲め、針路を北方に轉せしも、雨愈よ烈しく、視界益す狹く、敵影を發見するの望み殆と絶ゆ。依て翌朝、敵と會戰するの望を以て速力を增加し、敵の退路を扼するの地點に針路を定む。此間我が艦隊が、高速力を以つて濃霧四塞の間に、不規の運動を行ひ、毫厘の故障なかりしは本職の滿足する所也。此夜艇隊をして索敵運動を執らしめしも、其目的を達するを得ざりし。

十六日黎明豫定地點に達す。此の時天候回復し、視界亦廣かりしも、遂に敵の隻影を見ず。

依て更に針路を轉じ、索敵運動を繼續せしも其効なく、十七日敵艦隊は、尙本邦沿岸に在るものゝ如きを以て、之を邀擊せんが爲、巡洋艦隊を以て、搜索列を張り南下せり。此日天候至て平穩にして、視界廣く心窃かに搜索の好望なるを期せしも、

遂に敵艦に會せず、同日午後對馬の北端を距る北東約百海里の地點に來りしに、無線電信に依り、敵は北海道方面にあるの情報に接したるが故に、索敵運動を始め、今十九日歸港せり。

此行動中、約四晝夜の搜索運動は遂に何等の功なくして歸航の止むを得ざるに至りしは、深く遺憾とする所なり。

四晝夜の苦心、强雨濃氣のために妨げられて、遂に何の得る所なかりき。國民の失望はいかばかりなりしぞ、失望に次いで來るものは怨嗟也、非難也。海上艦戰の事容易に局外の知り得る所にあらず、非難の辭、冷笑の言は囂々として上村艦隊の上に下りぬ。是に於いて海相山本大將は、左の意味の辨明を述べたり。

上村艦隊の責務は、對馬及び朝鮮海峽並に對馬日本大陸間を防備して、浦港及び旅順口間の敵艦隊聯絡を橫斷するに在りとす。されば東鄕司令長官及び上村司令長官の下に屬する艦隊を割きて、日々に起る所の陸兵小輸送の護衛に當らしむるものとせば、本務の遂行に力を缺くの懼れなき能はず。萬一此の本務の遂行を誤るが如き

ことあらば、全體の作戰計畫上に、遺算を生じ、國家の大事を釀すなきも保し難し。是れ當任者の爲し得ざる所なり。今回敵艦の沖の島附近に出沒せる事を、哨艦の偵知して、上村艦隊の主力に報じたるは、十五日午前八時前後にして、同司令長官の全艦隊を率ゐて、根據地を出でたるは、同午前九時二十五分なり。而して哨艦の敵艦を認めたりと云ふ地點に向け四十海里を進みたれど尙敵艦に會せず。思ふに此の時敵艦と上村艦隊との距離は四十海里內外に在りしものならむと信ず。而して當時不幸にして濃霧海面を掩うて、自己艦隊各艦をすら認識する事を得ずして、常に無線電信機に依りて方位を報告せる程なりき。まして四十海里を隔つる敵艦、いかで之れを知り得べき。若しも砲聲などにても聞えなば、これをたよりに近くべきも、其れすら聞えざりしが如し。是に於いてか上村艦隊は敵艦の航路を追ふの外に道なきなり。此追窮の航路二あり、上村艦隊は內一をとれるなり。然るに敵は虛僞の航路をとり、北海道福山沖に現れて、函館に迫らむとする態度を示し、迂回して浦港に歸れり。上村艦隊の推想航路は遂に行き違ひとなりて、相會せざりしは遺憾なり。

陸兵の大輸送には常に護衛艦を附したれども、前記の理由あるが故に、平日の輸送には護衛艦を附するの餘力に乏しく、當局者は止むを得ず、作戰の大計畫を誤らざらむことを主とし、及ぶ限りの警戒を加へたり。但し重ねて今回の如き不幸あるは、國民の忍びざる所なるを以て、既に當局者に於いても、自今以後或る完全なる特種の航路を執ることに內決して其命令を傳へたれば、今後の輸送上、幾分安神することを得む云々。

第二十八章　得利寺の大捷

海上慘禍の悲報と同時に、陸上大捷の快電は來れり。玄海の沖、我が運送船は敵の犧牲となりて悽慘稀に看るの悲劇を演じつゝある時は、得利寺附近、第二軍の將士は、南下し來れる敵の大軍を擊破して、一萬五千の死傷を與へたるの日なりき。

此戰がいかにして戰はれたるかを叙するの前、先づ敵の南下し來れる必要――旅順救援策――に就いて語らざるべからず。

敵將クロパトキンの戰略は始めより守勢をとるにありき、我第二軍の遼東半島に上陸するをも阻害せず、我第二軍が南山の堅壘に迫るや之を夾擊せず、半島を我馬蹄の蹂躙に委して顧みざりし所以のものは、其戰略が大兵を遼陽奉天附近に集中して玆に日本軍を迎へ、以て其最も得意と信ずる一大野戰を試み、一擧して日本軍を破らんとするにあるならんとは、歐洲の軍人社會に於て專ら噂されたる所なり。然るに今や俄かに其主力の半を割て之を遼東半島に出し、從來の守勢を變じて攻勢をとるに決したるは、其戰略の一貫に於て頗る疑はしき者あり。傳ふる所によれば、露國皇帝はクロパトキンに向ひ、旅順を重圍の裡に救ふべしとの電命を傳へたりと云ふ。旅順は露國にとりて何物にも代へ難きものなるは勿論、要塞内に多數の皇族士官あり、是等の貴族にして若し悉く戰死せば國民の感情に少なからざる影響を及すのみならず、若し又日本に降伏して捕虜の辱を蒙るに於いては露國皇室の尊嚴は到底維持すべからざるに至らん。是れ皇帝の最も憂慮したる所なるべし。クロパトキンは自己の戰略に矛盾するを知りながらも勅命如何とも去難く、遂に作戰方略を變更するに至れるものなるべき歟。之に就て軍事專門家はクロパトキンが旅順救助の計畫を定めんが爲め提督スクリドルフを浦鹽斯德より遼陽に呼び寄せ、海陸相應じて、陸上より數萬の大兵を南下せしむると同時に浦鹽艦隊も亦黃海に突出して旅順の艦隊と連絡し、以て統制運動を爲すべしとの軍議を定めたるが如し。前章に云へる如く、海上の慘禍は得利寺大戰と同日なりし事は此事實なるを證するに足るべし。

敵の大部隊が遼陽を出發して南下の行動を始めたるは南山陷落卽五月二十六日前後

に在りたるが如し。輸送は五月二十日頃より開始せられたるものか、同二十四五日には、敵兵の汽車にて大石橋蓋平等に到着せる者漸く多く、六月初めには蓋平以南の地に集合せる者既に一萬の多きに達せり。兵は東部西伯利亞狙擊歩兵にして最も精鋭なるものを派遣したるが如く、クロバトキンの股肱西伯利亞第一軍團長スタッケルベルグ中將之に將たり。敵の計畫は幾何の兵力を南下せしむるにありたるや明ならざれども、少くとも三四萬の兵力を集中するに在りたるを疑ふべからず。而して得利寺の衝突に於て敵の兵數三萬餘に過ぎざりし所以のものは、我軍の行動機敏にして敵の未だ全兵力を集中する能はざるの時に乘じたるに因らずんばあらず。

之より先き我第二軍は、既に南關嶺を掃蕩し、青泥窪を占領し、敵を旅順の要塞に壓迫したると同時に、旅順攻擊軍は乃木大將指揮の下に編制せられ、奥司令官は其主力を率ゐて愈々北進の行動を起せり。抑も此奥軍の北進活動は、我戰略の大根底より發したるものにして、敢へて敵の南下に刺激せられたる臨機の行動にあらず。即ち金州半島に於て或任務を終了したる後は、第一軍と連繫運動を執るがため北進すべき第

二の任務を有し居たる也。而して半島に於ける豫定の任務は既に終了したるを以て、即ち豫定の如く北進の途に就きたる也。

敵も亦我軍の北進を偵察して會戰の陣地を得利寺に選定せり。得利寺は遼陽より旅順に通ずる鐵道の通過地に當り、鐵道通路の兩側は皆山地にして、嶮要の形勢たらざるにあらずと雖も、地勢狹窄大兵を用ふるに便ならず、攻むるに難きと同時に守るにも亦極めて危險なる陣地也。若し此附近に於て開濶なる良好の戰鬪陣地を求むれば只夫れ復州歟、而も敵は之を捨てゝ得利寺を陣地と定めたる所以のものは、鐵道により て送兵給養等を始め兵器彈藥其他の補給に便なるが故ならざるべからず。兎に角敵は得利寺を戰鬪陣地として、一方には必死となりて應急防禦工事を施し、他方には後續部隊の到着を待ちつゝありき。

是に於て軍は敵の未だ著しく強大ならざるに乘じ、成るべく速に猛烈に之を隘路より驅逐し、熊岳城の平地に進出し、以て全體の作戰に進捗せしむるの決心を採り、六月十三日より普蘭店を出發し、大沙河の河畔より鐵道線路の西方に亘る諸營を利用し、

逐次敵の前進部隊を驅逐しつゝ、十四日得利寺の南方約十吉羅にして鐵道線路の左右に亘る線に前進し、別に一縱隊を復州街道に出し、該方面の警戒に任せり。以上計畫の如く、軍の主力は十四日午後一時乃至二時間に於て指命の線に達するや、果して敵は得利寺南方約四吉羅なる龍王廟の高地を中央とし、其右翼は復州河の右岸高地より、左翼は龍王廟の高地より約六吉羅に亘り、陣地を占領しあるとを確めたり此得利寺附近に於ける戰鬪の禮砲は、午後二時頃龍王廟高地にある敵の砲兵より我に向て放されたり。此禮砲に伴うて忽ち、彼我の猛烈なる砲戰は開始せらる。此附近一帶の敵の陣地は、山又山、谷又谷といふ有樣にて、尤も工事に長じたる敵は、其各高地を堅固にしかも隱蔽して巧に占領しあるを以て、當時は彼我の砲戰のみにして日沒となり、戰鬪は自然に中止せられ、我軍は其位置に在て夜を徹するに至れり。

十四日に於ける諸種の偵察の結果により、敵の兵力を三師團以下と判斷し、翌十五日の拂曉より攻擊することに決し、主力を以て鐵道線路の左右より、其一部を以て左方に聯繫して敵の右側に迫るが如く攻擊の部署を定めたり。各隊は指定の如く、十五

日早朝夜暗の濃霧に乘じ豫定の運動に着き、午前五時二十五分頃我砲兵より龍王廟の高地にある敵の砲兵に向て砲擊を加ふ。是を此日に於ける彼我砲丸の交換の始めとす。此龍王廟の高地は、地勢上最も良好なる砲兵陣地にして、遠く鐵道線路の通ずる谷地を瞰制し、其砲兵は昨十四日以來我攻擊の動作をして大に躊躇せしめたるものなり。

濃霧の晴るゝと同時に、各方面とも戰鬪は益々眞面目に導かれ、砲聲殷々山嶽ために震動するに至れり。午前十時より十一時頃は戰鬪正に酣なるの時機にして、我軍の中央及左翼は、互に聯絡しで動作し、殊に其最左翼は敵の右翼を包圍しつゝ既に敵の第一線を奪略し、着々歩々を進めつゝあり。之に反して我右翼の方面に於いては、比較的敵兵優勢にして彼れは漸時其第一線に增加し來り、午前九時三十分頃より約一師團の兵を以て攻勢に轉せんとせしこと數回なりしも我諸部隊は其位置を固守し、現狀を維持するを得たり。

是より先き、我最右翼に在りて、敵の左翼背を脅威すべき任務を有する我騎兵の主

力は、軍の右翼に當り激烈なる銃砲聲を聞くや、直に其方面に轉進し、徒歩戰を以て勇敢に奮闘し、能く其苦戰中にある我右翼に多大の援助を與へたり。

續いて我中央及び左翼の攻擊進むに伴ひ、我全砲兵は數度の陣地變換を行ひ、龍王廟の高地にある敵の砲兵に射擊を集中し、午前十時頃より漸次之を姿靡せしめ、午後二時に至り全く之を沈黙せしめぬ、此高地にありし敵歩砲兵は、陣地を撤して鐵道線以東の地區を北方に退却するに至れり。此に於て軍の一部は直ちに前進して該高地を占領し、猛烈なる歩砲兵火の追擊射擊を行へり。

此時に當り、我中央及右翼は、頑强なる敵の第二陣地の抵抗に會ひ猛烈果敢に前進し、益々敵の右翼を包圍し、遂に之を復州河の河谷に擠下するに至れり。此時に於いて、包圍攻擊の形勢は猛烈なる歩砲兵火の包圍追擊と變じたり。之がため朝來最も勇敢頑强に抵抗せし敵も、今や全く名狀すべからざる潰亂の慘狀を極め、北方に退却するの餘儀なきに至れり。只敵のため最も幸福なりしは午後五時頃、驟雨俄に來りて、咫尺を辨せず、從て我砲兵は一時追擊射擊を中止せざるを得ざるに至り、其退却をして大に容易ならしめたること是れ也。

此の戰闘に於いて敵の損害は、其當時素より詳ならざりしも、其戰場に遺棄せし死屍のみにて約二千に達し、第一師團長グルングロースは負傷し、歩兵第一聯隊長は戰死し、同第二第三聯隊長も亦負傷し、第四聯隊長は俘虜となるに至りしを以て察するに其戰闘の如何に激烈にして勇敢に導かれ、且慘狀を極めたるかを察するに足るべし。軍は連日炎暑を冒し、險惡なる山河を跋渉し、加ふるに此日は拂曉より薄霧に亘る交戰後なるとに依り、遠く追擊するを止め、軍の主力は占領せる敵の陣地内に夜を徹することゝせり。敵の捕虜は第四聯隊長以下三百にして、その戰場に遺棄せし諸材料頗る多く主なるものを擧ぐれば左の如し。

砲車十七輛、小銃及砲兵彈藥車合せて五十七輛、砲彈千四百發、小銃彈九萬一千發而して全體の死傷は、三千二百を超ゆ。我死傷は千百六十三名（内戰死二百十七名）、馬匹九十頭なり。

六月十七日大元帥陛下には、戰勝を嘉せられ左の勅語を賜りたり